一、元祿五壬申年三月晦日、忠雄公當御屋鋪ヲ公義へ御上ナサル。
是時嚮ノ和田倉門內邸ハ返上シタル者ノ如ク同書亦左ノ如ク傳フ。
和田倉御門之內御屋鋪
一、慶長六辛丑年（或ハ慶長七壬寅年ト云。或ハ慶長八癸卯也トモ云テ、其實ヲ詳ニセズ。）秀政公（○小笠原。）當御屋鋪ヲ御取成サル。（當御屋鋪ハ、御家（○小笠原氏）ニテ、武江ニ御屋鋪ヲ構ヘ給フノ始發ナリ。）
一、當御屋鋪ノ間數坪數等詳ナラズ。
一、秀政公當御屋鋪取リノ時、御家老犬井半左衞門久知其事一卷ヲ引受コレヲ務ム。
一、慶長年中、當御屋鋪ニ御屋形ヲ始、御長屋等ヲ建サセラル。御家老春日淡路信次（或ハ道次ト云。）御作事一卷ヲ引受コレヲ務ム。
一、秀政公御在府ノ節ハ、當御屋鋪ニ御坐ナサル。
一、忠脩公モ御在府ノ節ハ當御屋鋪ニ御坐ナサル。
一、慶長十四己酉年當御屋鋪ニ新ニ御書院ヲ建サセラル。其次第結構ナル事共ナリ。御圍ニ御庭ノ事ハ、悉皆古田織部正殿（實名重勝。）ニ御任セ、古田殿御物數寄ニテ出來ス。此度總シテ御屋形御長屋等ノ御取繕ヒアリ。（此度ノ御普請ハ、當冬ニ至リ、大將軍秀忠公、當御屋鋪ニ御成ナサレシ故、其御用意ナリ。此年十二月二十五日御成ナサルベキ旨ヲ仰出サレシ故ナリ。）家老葉山右京進眞時或ハ御老ト云。御普請ノ一卷ヲ引受コレヲ務ム。

一、元和元乙卯年ヨリ當御屋鋪忠眞公ノ御抱持トナル。
一、忠眞公御在府ノ節ハ、當御屋鋪ニ御坐ナサル。
一、寛永年中忠眞公當御屋鋪之內ニ鎭守稻荷大明神ノ祠ヲ御造立ナサル。
一、寛永十三丙子年十二月忠眞公當御屋鋪ヨリ小石川御屋鋪ニ移ラセラル。
一、寛永十七庚辰年三月忠眞公當御屋鋪ヲ公義ニ御上ナサル。（今般常盤橋ノ內ニテ、御屋敷御拜領ニ因テ如レ此。）

小笠原氏鐵炮洲邸　武江藩邸記ニ、

鐵炮洲御屋鋪
一、寛永十七庚辰年忠眞公（○小笠原。）當御屋鋪ヲ御取ナサル。
一、北表口百四拾間一尺。南裏方上ニ同シ。東方入四拾七間半。西方入上ニ同ジ。坪數六千六百五拾餘坪。
一、此地ハ、往昔ヨリ海ニ續キタル沼ニテ、潮ノ滿干アリシ所也シニ、忠眞公

思召有テ御直ニ傍示ヲ御指セ。御屋鋪ニ御取立ナサル。或説ニ、傍示ノ内ノ正中ニ、小島ヲ御築セ、夫ニ御茶屋ヲ建サセラレ、夫ヨリ陸地ニカケテ、追々ニ地形ヲ築セラレ、御屋鋪段々成就セシト云也。

一、寛永年中當御屋鋪ニ御屋形御長屋共ニ建サセラル。

一、當御屋鋪ニ大和守長宣公御坐ナサル。

一、萬治年中或ハ明暦年中ヒ云テ不詳。當御屋鋪御類燒也。

一、其後年序不詳。當御屋鋪北表百四拾間一尺ノ内、西方御定杭計ニテ、築地等ハ成就ナシ。七拾貳間半一尺入四拾七間半、坪ニシテ三千四百四拾四坪餘ノ所ヲ、加々爪甲斐守様御實名直隆。ニ遣サル。加々爪氏ヨリ御所望ニ因テ如此。茲ニ因テ忠眞公御抱持ハ、東西六拾七間半、南北四拾七間半、坪ニシテ三千二百六坪トナル。

一、寛文七丁未年春當御屋鋪ニ御屋形御長屋共ニ建サセラル。此材木ハ、常盤橋ノ内御屋鋪ノ奥方、或ハ御内長屋等ノ當意不用ノ所ヲ解セラレシ材木也ト云。御普請奉行西田八郎右衞門直次コレヲ引受相務ム。

一、寛文七丁未年冬ヨリ、當御屋鋪、忠雄公ノ御抱持トナル。

一、寛文十一辛亥年當御屋鋪ヲ小備中守眞方公ニ御カシナサレ、則眞方公コレニ御坐ナサル。

松平乘壽邸

松平乘壽邸事蹟

一、延寶三乙卯年八月廿二日眞方公本所ニ於テ御屋鋪ヲ土井周防守利益公。御拜領也。而ヒコレニ移ラセラレズ、其マヽ當御屋鋪ニ御坐ナサル。

一、元祿十丁丑年十月十七日忠雄公田安御屋鋪兩所共ニ御類燒ニ因テ、忠雄公忠基公御一同ニ、當御屋鋪ニ御入ナサル。此時眞方公ハ、小倉ニ御在館ノ御留守也。

一、同年十一月十四日忠基公ハ、當御屋鋪ヨリ眞方公ノ鐵炮洲濱御屋鋪ニ移ラセラル。

一、元祿十一戊寅年五月二十八日忠雄公當御屋鋪ヨリ下谷御屋鋪ニ移ラセラル。

一、元祿十二己卯年忠雄公當御屋鋪ヲ小備中守眞方公ニ進セラル。是ハ眞方公ト御屋鋪替也。

八月廿二日辛未〇寛永十七年(紀元二三〇〇年)〇辛未、三正綜覽。濱松〇遠江國。城主松平乘壽〇和泉守。邸地ヲ賜フ。〇寛永日記。

松平乘壽邸 寛永日記ニ、

八月廿二日〇寛永十七年。

一、小出越中守〇尹貞。内藤四郎左衞門〇正次。兩人之元屋敷、松平和泉寺〇乘壽。ニ被

下之旨老中大久保右京亮ヲ申渡之。和泉病中ニ仍也。

附記 八町堀其他士宅

〔附記〕八町堀寺屋敷上地ノ内ヲ士宅ニ賜フ。事寛永日記ニ見ユ。

八月廿六日〇寛永十七年。

一、八丁堀寺屋敷上地之内四十間ニ弐拾八間、日向半兵衛〇政成。ニ被下之。神谷彌五助〇彌五郎清次歟。上屋敷富永主繕〇重師。ニ被下之。西窪之佐久間三五郎安〇公。下屋敷之内三拾間ニ弐拾間、伊奈兵藏〇忠綱。豊後守〇阿部忠秋。對馬守〇阿部重次。ニ被下之。右之通伊豆守〇松平信傳仰之趣。

自證寺其他轉移起立

廿八日丁丑〇寛永十七年(紀元二三〇〇年)八月〇丁丑、三正綜覽。牛込榎町〇市内牛込區。ニ移シ、改メテ自證寺ト稱ス。〇大猷院殿御實紀。文政寺社書上。外ニ是年(紀元二三〇〇年)ヲ以テ起立若クハ轉移シタル寺院若干有リ。〇寛永十七年〇文政寺社書上。傳通院記。

自證寺其他轉移起立事蹟 自證寺

自證寺其他轉移起立　顚末左ノ如シ。

自證寺　法常寺轉移改稱ス。

一、境内　拝領地

東叡山末　武州豊島郡市ヶ谷　天台宗　鎮護山圓融寺自證院

此坪一萬六百餘坪。

右往古年代不レ知牛込榎町ニ有レ之ル處、寛永十七庚辰年八月廿八日市ヶ谷ニ於替地拝領被二仰付一、其節當所ヲ引移り申ル。

一、當寺開闢起立之年代等、相知レ不レ申、古來牛込榎町ニ有レ之、法常寺ト相唱、日蓮不受不施之宗派ニ御座ル。然處寛永十七庚辰八月自證院殿尾張大納言光友卿御簾中千代姫君樣御母堂於振之方。當寺ニ御逆葬ニ相成、其頃本理山自證寺ト改號仕ル。境内徧狹ニ付、大猷院殿御命ヲ以、當所市ヶ谷ニ替地被二仰付一、其後寛文乙巳年不受不施之宗派御禁斷之節、天台宗ニ改宗之砌、如レ今鎮護山圓融寺自證院ト改號仕ル。其頃當寺儀、輪王寺之院室ニ相成ル。右譯ハ千代姫君樣御乞請ニ依テ、則御母堂之御法號自證院ヲ院室之稱號ト被二遊ル一義ニ御座ル。

——文政寺社書上

廿八日〇寛永十七年八月〇中略。この日千代姫君〇將軍家光長女。の御生母ふりの局うせらる。

この局の父を岡吉右衞門といひし、母はのち尼となりて龍光院といひしとぞ。

一書に吉右衞門か父は半兵衞といひ、兄左内は、蒲生家につかへてさる剛のものなりしかば、のち叙爵して越後守といふ。弟町野庄右衞門、これも蒲生家につかふ。局の母はたあといひ、祖母は祖心といひ、町野長門守幸和かつまとなり、幸和うせて御所に宮づかへし、尼となりて祖心といふ。幸和かもとにて設けたる女子たあを岡吉右市街恢弘時代

衞門が妻とゐし、局をうめりとあり。さらばこのたあは即ち龍光院の事ゐるべし。この局うせて自證院と謚らる。市谷に一寺を建られ、自證院と號し、佛具料二百石の地をよせらる。牛込榎町にありし法常寺といひしを、この局の爲に市谷に引移され、其はじめ自證寺といひしが、寛文の頃、圓融寺自證院とあらたむ。

——大猷院殿御實紀

ふりの局ハ、家譜略ニ左ノ如ク見ユル者是也。

三代家光公○中略。

御長女（御生母町野氏、於富利方。實岡氏。自證院殿。）

千代姫

寛永十四年四月七日紀年錄三月五日トス。誕生。○尾張大納言光友卿○德川。へ御緣組、御入輿。○元祿十一年戊寅十二月十日逝、六十二歳。○法名靈仙院殿長譽慈光松月大姉○葬增上寺。

自證寺ノ外、寛永十七年中ニ起立若クハ轉移シタル寺院ヲ擧クレハ、左ノ如シ。

功運寺　櫻田ヨリ三田聖坂ニ移ル。

三州渥美郡田原龍門寺末
三田聖坂
禪曹洞宗　龍谷山功運寺

境内御拜領地ニゐ、寛永十七庚辰年櫻田寺地御用地ニ罷成、只今之寺地壹万百三十九坪餘拜領仕ゐ。惣間口貳百十三間貳尺九寸、奥行五拾六間四尺。

一、開闢起立ゐ、天正十八庚寅年神君樣關東御入國之砌、當寺二代慶存從三州御供被仰付罷下ゐ。慶存由緒ゑ、神君樣御舍弟松平五郎樣御子息ニゐ、傳通院樣御取立也。慶長元丙申年本多佐渡守殿・永井右近大夫殿承りニゐ、品川海晏寺拜領住職被仰付、品川ゟ毎月御城ゟ御齋ニ罷上ゐ處、品川ゟ程遠ニ付、慶長六辛丑年櫻田ニゐ別ニ寺地拜領、則號功運寺、從御公儀御建立也。其上慶存代拾六人扶持幷四季着被下置ゐ。其後寛永十七庚辰年右之地御用地ニ罷成、只今之地拜領仕ゐ。○中略。

一、衆寮、間口八間、奥行四間半。

一、境内奥山上ニ渡邊網塚有之、高サ七尺ニ五間四方、五輪塔高四尺八寸、空風火水地之文字、右從古來申傳ニゐ御座ゐ。一切由來相知不申ゐ。

一、寺中長源庵ゟ申常念佛堂有之。本尊阿彌陀如來本佛立像長貳尺。

右之堂、間口貳間、奥行貳間。寶曆年中永井采女殿開基。

一、鎭守社貳間ニ九尺。稻荷明神木像也。長九寸。是ハ當山之鎭守、門前之氏神ゐり。

一、寺中來福院

右坪數百八拾坪。

一、開闢寬永元甲子年、開山功運寺三世自山太悅和尙、遷化寬永四丁卯十月六日。○中略。

一、寺中明圓寺

右坪數八十六坪。

一、開闢寬永七年庚午、開山功運寺四世玖岩壽悅和尙、遷化寬永十二乙亥年八月廿一日。○中略。

一、寺中大林院

右坪數九拾四坪。

一、開闢寬永十癸酉年、開山功運寺四世玖岩壽悅和尙也。○下略。

——文政寺社書上

善心寺

善心寺　初麻布ニ在リ、起立ノ年代ヲ知ラズ、開基大河內善兵衞寬永十七年ヲ以テ殆スルヲ以テ姑ク此ニ採錄ス。

境內除地七百七拾坪、買添年貢地七百七十四坪。

起立年代不レ知、右ヲ麻布ニ有レ之ハ處、延寶年中當所ヘ引移申ハ。

京都本傳寺末
小石川大塚上町
法華宗　長清山守慶院善心寺

一、開山守慶院日榮大德、寬文二壬寅年五月廿九日卒。

一、開基善心院日淨居士、寬永十七庚寅年六月廿四日卒、俗名大河內善兵衞。

——文政寺社書上

淨廣寺

淨廣寺　麻布善福寺中ニ建立ス。

一、境內坪數百三拾七坪五合餘　持地。

一、寺起立ヲ寬永十七年善福寺弟子長玄坊右地中ニおゐて建立仕ハ事。右開基長玄坊寬文二壬寅十二月七日死去仕ハ事。

——文政寺社書上

京都本願寺末麻布善福寺地中
淨土眞宗　淨廣寺

圓通寺

圓通寺　四谷ニ起立ス。

一、拜領地百七十五坪。

境內。

房州小湊誕生寺末
武州江戶四谷法藏寺橫町
日蓮宗　大黑山圓通寺

覺

一、當寺起立ハ、寬永十七庚辰年拙寺本寺房州小湊山誕生寺閑居寶勝院日深聖人此地ニ菴室ヲ結ヒ、寶勝院ヲ呼來ハ。○中略。

一、開山寶勝院日深上人　延寶六午年五月六日寂。

市街恢弘時代

但シ、生國相知不レ申ハ。行年八十六歳。在住四十年。　――文政寺社書上

田中寺

田中寺　寛永十七年ヲ以テ轉移ス。

一、禪曹洞宗

牛込赤城天德院末
同所改代町
龍谷山田中寺

一、境内六百坪御年貢地、間口貳拾壹軒三尺、奥行三拾八軒餘。

外ニ、牛込行願寺領御朱印地之内六拾坪、古來ゟ借地。境内北ノ方ニ有レ之ハ竹藪地圍込ハ。

外ニ、牛込宗參寺領御朱印地之内、古來ゟ借地。境内北之方ニ有三拾五間四合竹藪地ニ圍込置申ハ。○中略。

一、開闢起立之義ゟ、當寺修復記詳也。其文左ニ、

龍谷山田中寺修復之記

武州豐島郡牛込村龍谷山田中寺舊號淨見寺。先レ是寛永五辰年先住破了比丘開二基於同所之天神町一、其後寛永十七辰年移二寺於近隣平田之中一。蓋欲レ爲二安禪修道之一助一也。○下略。　――文政寺社書上

本然寺

本然寺　淺草御小人町ニ起立ス。

駿州山脇村長源院末
淺草
曹洞宗　本然寺

一、境内高貳千貳百四拾坪餘、御年貢地也。

一、山號ゟ天德山。

一、寛永十七年庚辰二月上旬、當年迄百八拾六年。

淺草御小人町金左衞門屋敷ニ而起立、其後同所眞言宗龍福院内ニ借地、拾ケ年罷在ハ。

一、其後淺草新寺町臨濟宗金龍寺境内ニ借地申ハ。　――文政寺社書上

本然寺　八軒寺町ニアリ。天德山ト號ス。○中略。寛永十七年御小人町今其地詳ナラズ。金左衞門氏姓ヲ知ラズ。ト云フ者ノ屋鋪ニ草創シ、其後同所龍福院境内ヲ借地シ、後復新寺町金龍寺境内ヲ借地シテ移轉セシカ、享保十五年命アツテ今ノ地ニ移リシトイヘド、記錄ヲ失ヒ詳ナラズ。○下略。　――府内誌殘編

善德寺

善德寺　四谷ヨリ深川ニ移ル。

四谷龍昌寺末
深川海邊大工町中通
曹洞宗　祥雲山善德寺

一、當寺起立　寛永六巳年也。

本ハ四谷押衆柿野間角左衞門屋敷ニ而取立、十二年ニ相成ハ。夫ゟ寛永十七年辰ニ深川ゟ越、町人助右衞門屋敷ニ致二借地一、十七年罷成ハ。○下略。

毛利秀元將軍饗應

毛利秀元將軍饗應事蹟

九月十六日甲午〇〇寛永十七年(紀元二三〇〇年)〇甲午、三正綜覽。國府〇長門國。城主毛利秀元〇甲斐守。將軍家光〇德川。ヲ品川殿〇武藏國ニ荏原郡。ニ饗ス。〇天享吾妻鑑。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

毛利秀元將軍饗應　左ノ如ク傳フ、

一、十日〇寛永十七年八月。將軍家被レ召二毛利宰相秀元一、甲斐守也。汝者茶湯數奇之道堪能之由、世上有レ其聞一可レ有レ上レ覽品川邊之山景地、殊ニ面白被レ思召一、日比被レ建御殿其傍ニ一、輕構二茶店一、茶湯興行可レ仕之旨、被二仰出一秀元謹而上意之趣難レ有奉レ存、隨二上意一則用意可レ仕之旨、御請仕リ退出ス。其後毎日往二于品川一、新搆二茶店一、營二數奇屋一用意專也。

一、十六日〇寛永十七年九月。毛利秀元今日於二品川御殿一可レ獻二御茶一之旨相定、兼日ヨリ數奇屋御茶屋書院廣間等建レ之。御數奇屋天井ハ以二唐物一組レ之、總壁ハ以二葭網代一組レ之、或以二藤美鋪紋ヲ組タル唐物ヲ壁ニ押當一、以二青竹一打レ緣、一間コトニ樣子ヲ替、手輕キ物數奇又不レ可レ類。御成ノ日限今日ニ相極故ニ、執權酒井讃岐守忠勝・堀田加賀守正盛・松平伊豆守信綱・阿部對馬守重次等ハ、自二早朝一彼所ニ來テ万端取二持之一。井伊掃部頭直孝ハ依二病氣一不參。阿部豊後守忠秋爲二月番一故勤二御留守居一、警固御本丸。次ニ尾張亞相義直卿・水戸黄門賴房卿・松平筑前守光高・松平越後守

毛利秀元起請文　原寸竪一尺七分。横二尺五寸。

子爵　毛利家所藏

慶長四年六月四日付、安國寺長老ニ宛ツ。卽チ惠瓊也。惠瓊ハ安藝安國寺ノ僧、豐臣秀吉毛利輝元ト和スルノ日、其間ヲ往來シ、後常ニ秀吉ノ床下ニ候シテ事ヲ用ヒツヽ在リタル者。是年春輝元及三大老五奉行、德川家康ニ對シテ異意有リ。夏家康、惠瓊及輝元ノ臣福原慶俊ヲ召シテ、嚮ニ秀吉命スル所ノ秀元分封ノ遲滯スルヲ告メ、先ツ二十萬石ヲ分タシム。本誓書ハ是頃ノ者ナル可シ。

毛利秀元將軍饗應

毛利秀元將軍饗應事蹟

九月十六日甲午〇〇（寛永十七年（紀元二三〇〇年）〇甲午、三正綜覽。國府〇長門國。城主毛利秀元〇甲斐守。將軍家光〇德川。ヲ品川殿〇武藏國荏原郡。ニ饗ス。〇天享吾妻鑑。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

——文政寺社書上

毛利秀元將軍饗應　左ノ如ク傳フ、

一、十日〇寛永十七年八月。將軍家被レ召二毛利宰相秀元一、甲斐守也。汝者茶湯數奇之道堪能之由、世上有二其聞一、可レ有レ上レ覽品川邊之山景地一、殊ニ而白被レ思召一、日比被レ建御殿其傍ニ、輕構ニ茶店一、茶湯興行可レ仕之旨、被レ仰出一。秀元謹而上意之趣難レ有奉レ存、隨二上意一則用意可レ仕之旨、御請仕リ退出ス。其後毎日往二于品川一、新構ニ茶店一、營二數奇屋一用意專也。

一、十六日〇寛永十七年九月。毛利秀元今日於二品川御殿一可レ獻二御茶一之旨相定、兼日ヨリ數奇屋御茶屋書院廣間等建レ之。御數奇屋天井ハ以二唐物一組レ之、總壁ハ以二霞網代一組レ之、或以二藤美鋪紋ヲ組タル唐物ヲ壁ニ押當一、以二青竹一打レ緣、一間コトニ樣子ヲ替、手輕キ物數奇又不レ可レ類。御成ノ日限今日ニ相極故ニ、執權酒井讃岐守忠勝・堀田加賀守正盛・松平伊豆守信綱・阿部對馬守重次等ハ、自二早朝一彼所ニ來テ万端取二持之一、井伊掃部頭直孝ハ依二病氣一不參。阿部豊後守忠秋爲二月番一、故勤二御留守居一、警固御本丸。次ニ尾張亞相義直卿・水戸黄門賴房卿・松平筑前守光高・松平越後守

毛利秀元起請文

原寸　竪一尺七分。横二尺五寸。

子爵　毛利家所藏

慶長四年六月四日付、安國寺長老ニ宛ツ。即チ惠瓊也。惠瓊ハ安藝安國寺ノ僧、豐臣秀吉毛利輝元ト和スルノ日、其間ヲ往來シ、後常ニ秀吉ノ床下ニ候シテ事ヲ用ヒツヽ在リタル者。是年春輝元及三大老五奉行、德川家康ニ對シテ異意有リ。夏家康、惠瓊及輝元ノ臣福原慶俊ヲ召シテ、嚮ニ秀吉命スル所ノ秀元分封ノ遲滯スルヲ咎メ、先ツ二十萬石ヲ分タシム。本誓書ハ是頃ノ者ナル可シ。

光長、保科肥後守正之、加藤式部少輔明成、松平下總清匡ハ、御成以前ヨリ參向。將軍家ハ巳ノ上刻御城出御アツテ、品川ニ着御、先ツ常ノ御殿ニ入御アリ。于時秀元爲御迎御殿ニ伺候ス。今日天氣好仕合ノ由有御會釋、御先江可參之由有上意、秀元平伏メ難有旨ヲ申上、退出。則數奇屋有入御。此時御供ニハ御相伴衆計ナリ。尾張殿・水戸殿・越後殿・加藤式部少輔四人也。御數奇屋ハ三疊大目緣ヲ一コマ被下ケ、二方ニ御相伴衆被座、床ノ内ニハ南堂ノ墨跡、花入ハ日本ニ唯一ツノ名物無鏑ト云ヲ薄板ニ載テ直之、花ハ不入、幕府令入之給フ。勝手ノ席ニハ、松平筑前守・保科肥後守・松平下總守・酒井讃岐守・堀田加賀守・松平伊豆守・阿部對馬守等伺候ス。其次ノ間ニハ、三浦志摩守正次・内藤志摩守忠重・安藤右京亮重長・柳生但馬守、其外出頭人衆也。御饗應ノ結構難述言詞。此外供奉ノ人々ハ、於本御殿饗應ス。假ノ御茶屋セハキニ依テ也。金方ノ机ニ置テ、堆朱ノ長盆ニ、染付ノ香爐、香匙(ケウジ)火箸(ヒゴチ)、梨地蒔繪香合、東山殿御物、數奇ノ香合。堆朱ノ印籠置堆朱之盆、皆唐物名物ナリ。公任之古今上下・行成之朗詠二卷・香合責貝・唐物名物本香形紅葉硯名物・料紙三色、上ニ置計算、唐物・水引箱、唐物。床脇ノ棚ニ、沓形ノ炭取、彫物香合、皆唐物也。羽箒茶入文琳唐物名物。掛袋、四方之盆唐物。ニ置。御茶碗ハ吉野高麗。名物御次ノ間ノ床ニハ、

三幅一對、中尊牧溪ノ觀音、讃ハ無準ノ筆。左ハ黄牛同筆、讃ハ寧(シン)退耕。右ハ茶陵之郁老主同筆、讃ハ寧退耕。文臺筆臺短冊文鎮、臺子ニハ大棗袋掛但、金欄紋桐袋。茶碗、青磁、金ノ風爐四方物、御釜松向寺。名物。水伴ノ暦々御先祖歸ル。大樹ハ自レ夫御茶屋ニ入セラル。東海寺ノ住持澤菴和尚被レ召寄、御盃ノ上ニテ亭主歌一首可レ仕ト有二上意一。昨日雨淋、今日天快晴ナリシカハ、

降雨モ今日ノ晴トヤ我君ヲ待得シ山ノ甲斐ハ有ケリ。

將軍家有褒美一澤菴モ一首ト仰ケレハ、

夕暮ヲ惜ミ惜マシ木ノ間ヨリ影サシノホル海ゴシノ月。

如レ斯興ヲ催サル。又茶屋ノ棚且傍ノ芝ノ上ニ、今燒ノ茶入香爐香合花入鉢徳利以下アラユル瀬戸物モ數双置レ之。大樹上覽、香合二ツ御取被レ遊、澤菴ニモ香合花入鉢ナト被レ遣。其跡ハ伺公ノ面々、目利ノ善惡有、御批判御笑草ト成ル。御茶屋ニ御座ノ内、若キ御小姓衆廻リ花仕レ様ニ被二仰出一。仍大木共ニ折釘ヲ打掛置、籃花入、其下ニ珍シキ草花色々盡數置レ之。此籃ハ龐居士カ娘靈照女ガ待シ花匡トテ紹(マヽ)鷗カ孫也、仍テ傳レ之、薫カ子宗呑又傳レ之送二秀元一。天下之名物也。此籃ニテ廻花良久ク有レ之、亥中刻還御有レ之。此數奇屋其外之作事等大ニ手替ノ由、風聞有レ之、故、爲二見物一江戸中ノ僧俗男女、廿日餘群集ス。

——天享吾妻鑑

十六日 〇寛永十七年九月。品川の御殿にて、毛利甲斐守秀元御茶奉る。林中の御茶室にて、尾水兩卿松平越後守光長松平〇前田。筑前守光高加藤式部少輔明成御相伴し、御茶はてゝ、保科肥後守正之松平正盛松平下總守忠明酒井讃岐守忠勝堀田加賀守出雲守勝隆には、御酒を賜ふ。囃子三番の後、御宴ひらかれ、兩卿はじめ廻り花ありて、日暮海邊の茶亭にならせらる。この亭に新陶器あまた置ならべ御覽にそなふ。御前において老臣近習幷供奉せし物頭等へも、一種づゝ心のまゝにとらしめられしとぞ。秀元よりは備前國景の刀を献し、左安吉の御刀を給はる。日記。曾我日記。〇世につたふるところは、甲斐守秀元茶道名譽の事聞召れ、品川の御殿をしつらひ、御茶奉るへしと、兼々より命せられしかば、茶室を經營す。數寄屋の天井は唐物を用ひ、四壁は葭小麥藁等を網代にくみ、あるは藤にてうるはしくあやどり、緣は緣竹を用ひ、間ことに其さまかへたれば、事そぎたる其新奇また類ひあるへからず。けさより酒井讃岐守忠勝重次は、御先にまかり、萬事を沙汰す。尾水兩卿及ひ松平筑前守光高・松平越後守光長・保科肥後守正之・加藤式部少輔明成・松平下總守忠明等も、御先にまかり待受奉る。御所には常の御座に入らせらるれば、秀元出て迎へ奉り、御懇詞を蒙り、忝きよしを謝す。さて申刻數寄屋にわたらせ給へば、尾水兩卿・光長・明成の四人、御相伴に候せり。床には南堂の墨跡、花入は豐臣太閤より賜ひし無鏑といへる日本無双の名器にして、薄板にのせ

たり。御花は御みづから遊さる。勝手には、筑前守光高・肥後守正之・下總守忠勝・加賀守正盛・伊豆守信綱對馬守重次、次に三浦志摩守正次・内藤伊賀守正重・安藤右京進重長・柳生但馬守宗矩、其外近侍の輩伺候、饗應善美を盡せり。又供奉の輩は、本殿に於て饗應す。かりの茶室は狹少なるが故なり。其膳具は、金銀をちりばめたるを五百人具は黒の今燒に、御紋を白く付たり。これはわざと新物を用ゆ。茶釣は色替り利休作、炭取儲けしとぞ。數寄屋には、御膳はていし、秀元御茶を點して奉る。釜は瓢箪、茶入は唐物、茶碗は、羽箒は鶴の羽なり。茶事終て廻炭あり。炭取はたびたび〳〵に出す。みな唐物なり。其後書院にわたらせ給ふ。此所の構造の机上に置、筆端に盡しがたし。まづ床には雪舟西湖の畫の幅、花入は金の鴛鴦を堆朱四方の長盆には、染付の香爐、是、火箸、東山殿の梨地蒔繪香合、堆朱の印籠、同じ盆、みな唐物なり。大納言公任卿筆の古今集、行成卿筆の朗詠集、香合は螺鈿、唐物木香形、紅葉硯料紙三色唐物の水引箱。床脇の棚には、沓形の炭取、彫物香合、みな唐物。羽箒、茶入、けんり、床には三幅對、中央は牧溪、讃は无準、左は政黄牛、讃は寧退耕、右は茶陵の郁庵主同筆。文臺、短冊、文鎭、臺子は大棗袋、掛袋は金襴、桶、柄杓、茶碗青磁、金の風爐、四方物釜、松尚寺水指、抱立瀧耳の唐物、水纏南蠻物、象眼のこうしあり。蓋置は三方の偶人羽箒堂、爐の間には盆石、羽箒、柄杓、蓋置赤臺、水指、水列せり。さて書院にて御宴の間、囃子三番あり。てゝ御秘藏の左文字御脇差を給はる。秀元より大内左京大夫義隆所藏の國宗の刀を獻ず。伽羅はこと更御感なゝめならず。御宴事終りて、御相伴の輩は、日西に、かたぶけば、御いとま賜はりて、御先を召て御酒下さるゝ程、既に十六夜の月東天にのぼりければ、亭主に入らせ給ひ、僧澤庵かばきのふ雨降りしか共けふを得し山のかひはありけりと詠じければ、御賞詞を蒙り、澤庵にも一首と仰ありしかば、夕ぐれをおしみおしまじ木の間よりはやさしのぼる海こしの月と詠じ奉りければ、彌興にいらせ給ふ。秀元は茶亭の棚傍の芝の上に、今燒の茶入、茶碗、香爐、香合、花入鉢、德利以下數多つらねをきしを御覽じ給ひ、其中香合二御手つからとらせられ、澤庵にも下さる。其跡は供奉の輩に目利してとるべしと仰下されしかば、各心香合、花入鉢などを御覽じ給ひ、御興さらにふかくおはしまして拜受すれば、其鑒定の工拙を評し

かりしかば、秀元に御盃をたまはり、歌よむべしと仰ありければ、とりあへず、

降雨もけふとやはるゝわが君をまちえし山の甲斐はありけり。

澤庵もまた仰によつて、一首を詠ず。

ゆふぐれをおしみおしまじ木のまよりはやさしのぼる海ごしの月。

茶亭の棚或はそのかたはら芝のうへに、今燒の茶器數種をならべたり。其うち香合ふたつを、みてづからものしたまひ、其餘は供奉の人々の心にまかせて取しめられ、その鑒定を御批判ありて、興せさせたまふ。又庭樹に折釘をうちて籠花入をかけたれば、滿座の人にかはる〳〵花をさしはさみて、台覽に備ふ。亥刻にいたりて還御あり。——寛政重修諸家譜

酒井氏賜邸

酒井氏賜邸事蹟

十月十二日庚申（〇寛永十七年（紀元二三〇年）〇庚申、三正綜覽。）小濱（〇若狹國。）城主酒井忠勝（〇講岐守。）嫡子忠朝（〇備後守。）和田倉門内（〇市内麹町區。）舊小笠原氏邸ヲ賜フ。（〇伯爵酒井家回答。）

酒井氏賜邸　ハ、

忠勝（〇酒井。）

一、同（〇寛永。）十七庚辰年十月十二日和田倉御門内小笠原右近大夫忠政元屋敷

忠朝（〇酒井備後守。忠勝嫡子。）拜領。（但、明暦二年ノ頃ニ返上カ。年月未詳。）

——伯爵酒井家回答（〇小濱。）

奥平忠昌邸

奥平忠昌邸事蹟

附記　阿部正能邸

澤庵中屋敷

小笠原氏和田倉門内邸返上ノ事ハ、上文之ヲ記ス。

廿八日丙子（〇寛永十七年、紀元二三〇年）十月〇丙子、三正綜覽。）宇都宮（〇下野國。）城主奥平忠昌（〇美作守。）邸ヲ木挽町（〇市内京橋區。）ニ賜フ。（〇奥平家譜。）

奥平忠昌邸　奥平家譜（〇中津藩。）ニ據レバ

忠昌（〇千福、美作守。家昌長子。）

同（〇寛永。）十七庚辰年十月二十八日木挽町ニ邸宅ヲ賜フ。

〔附記〕阿部正能邸

寛永十七年頃給賜セラレシ者歟。

一、正能公（〇阿部。）寛永十七年庚辰御十四歳之御時御元服（〇中略。）御屋敷小石川。

——公餘付錄

澤庵中屋敷

十月廿五日（〇寛永十七年。）

一、松下主馬助（〇貞綱。）屋敷澤庵へ遣レ之。依レ之牟禮万五郎（〇勝政。〇寛永十一年四月改易。）屋敷主馬助ニ被レ下レ之。

十一月廿日（〇寛永十七年。）

市街恢弘時代

岡野内藏允〇成明。〇書院番。　服部三右衞門〇保久。〇大番。

右澤庵中屋敷作事被仰付被下ニ付、奉行被仰付之。　——寛永日記

成明〇内藏允。致仕號閑入。〇岡野。

〇上略。十七年〇寛永。十一月二十日、仰をうけて東海寺の住職澤庵か別莊の普請を奉行し、〇下略。

保久〇三八郎。三右衞門。〇服部。

〇上略。十七年〇寛永。十一月二十日僧澤庵か別莊の普請を奉行し、〇下略。

——寛政重修諸家譜

醫員賜宅

十一月廿八日〇寛永十七年。

一、權大納言之局御暇、明日依歸洛、道中醫師玄齋〇高木。同道可有之旨、松平伊豆守〇信綱。申渡之。依之黃金三十兩呉服三御道服被下之。

道圓〇木下守清。　玄齋〇高木正長。

右御切米幷屋敷被下之旨、老中被相傳之。　——寛永日記

廿八日〇寛永十七年十一月。醫員高木玄清正長、こたひ權大納言局歸洛のとき、さしそひまかるべしと命せられ、いとま給ふ。木下道圓守清、玄濟共に廩米幷宅地を給ふ。

——大猷院殿御實紀

市街起立轉移

是年〇寛永十七年(紀元二三〇〇年)。市街ノ起立又ハ轉移シタル者有リ。〇文政町方書上。文政寺社書上。東京府誌。劇場年表。

市街起立轉移事蹟　柴井町

市街起立轉移　寛永十七年中ノ起立轉移市街ヲ擧グ。

柴井町　起立年代明カナラズ。東京府誌寛永中芝居轉移後市廛ヲ開クト傳ヘ、劇場年表是年芝居出火シテ引拂ト爲ルト云ヘハ、或ハ是頃ノ起立乎トモ思ハル。

柴井町

沿革　相傳フ、元和年間此地ノ芝原ニテ始テ劇ヲ演ス。寛永ニ至リ、之ヲ中橋ニ移シ、其址ニ市廛ヲ開キ、芝居町ト稱セシニ、後今字ニ改ムト云フ。本町書・上。

——東京府誌

同〇寛永。十一年甲戌

鎌倉河岸の小芝居、不殘芝居町へ移さる。今の柴井町なり。

同十七年庚辰

市街恢弘時代

功運寺門前

芝居町に、芝居にて飛驒踊りひんだ小島のさぶれ狂言大當りぶりしに、十月廿一日芝居より出火、此時一同引拂と成。○朱此芝居町、後柴井と文字を改。　――劇場年表

功運寺門前　櫻田ヨリ三田ニ移リテ起立ス。

三田功運寺門前

一、當町起立之儀ハ、功運寺開山慶存和尚、御入國之砌、三州ゟ御供ニ而罷越、慶長年中櫻田ニ而家數四拾五軒拜領被仰付ハ所、寛永十七申年御用地ニ被召上、三田聖坂江替地被下置ハニ付、寺社御奉行阿部飛驒守樣江門前町家作之義奉願上ハ得ゟ、屋敷御改細井佐次右衞門・杉浦彌市郎樣御見分ニ而町家作被仰付、三田功運寺門前ト相唱江ハ。其後延享年中町方御支配ニ相成ハ。書留等六拾ヶ年程以前燒失仕、相知レ不申、其上名主滿藏不埒有之遠島被仰付ハ跡、寛政十午年當名主藤八附支配被仰付ハ間、巨細之書留無御座、相知レ不申ハ。　――文政町方書上

功運寺○三田聖坂。

一、門前町屋之義ゟ、先年櫻田ニ罷在ハ節、元和四年取立、家數四拾五軒御座ハ。寛永十七庚辰年、右之地御用地ニ罷成、三田聖坂江替地被仰付ハ節、門前之內拾三軒ハ不參、殘三拾貳軒此方江參り、今以致住居ハ。門前町屋間口百八拾間四尺九寸、惣坪數貳千三百三拾三坪八合六勺六才。　――文政寺社書上

赤坂新町　赤坂新町壹町目

赤坂新町　是年及翌十八年ヲ以テ、武家ノ拜領町屋ト爲ル。

一、町內起立之儀ハ、往古武州豐島郡貝塚領人繼村之內ニ御座ハ處、寛永十七辰年中千代姬君樣御附高田九兵衞・三宅五兵衞・中尾太兵衞、右三人之者拜領仕、赤坂新町壹丁目ゟ改、翌十八巳年奧御火之番長坂半兵衞、二ノ丸龜岡庄兵衞・荒川金左衞門、右三人、猶又拜領仕罷在。○下略。

一、武家拜領町屋敷

一、表京間拾間壹尺。裏幅同斷。奧行南之方貳拾八間四尺、北之方貳拾七間四尺五寸。此坪數貳百八拾壹坪壹合三勺。　御天守番之頭　高田九兵衞

一、表京間拾間壹尺。裏幅同斷。裏行南之方貳拾九間三尺五寸、北之方貳拾八間四尺。此坪數貳百九拾五坪貳合五勺。　小十人松平田宮組　三宅五兵衞

一、表京間八間。裏幅同斷。裏行南之方三拾間六尺、北之方貳拾九間三尺五寸。此坪數貳百四拾壹坪八合五勺。　御勘定　中尾左傳次

一、表京間七間五寸。裏幅同斷。裏行南之方三拾間壹間五尺、北之方三拾間六尺。此坪數貳百廿貳坪壹合。　小普請組長井五右衞門支配　長坂鐵五郎

一、表京間六間。裏幅同斷。裏行南之方三拾貳間五尺、北之方三拾間六尺。此坪數貳百拾八坪七合。　御評定所書役　青山彥五郎

一、表京間六間五尺。裏同斷。裏行南之方三拾三間壹尺五寸、北之方三拾貳間五尺。此坪數貳百貳拾三坪三合八勺。

右拜領年月之儀ハ、前ニ申上ル。

赤坂新町貳丁目

一、町內起立之義ハ、往古之義相知不レ申、申傳之儀ハ、一木村之內ニ而、此邊一圓ニ田地等ニ候有レ之ル處、寬永十八巳年中武家方町並屋鋪ニ相成、○下略。

一、武家拜領人姓名○寬永中拜領者ヲ抄出ス。

表田舍間四間三尺。裏幅同斷。裏行同三拾七間。此坪數百六拾六坪五合。

御本丸三番部屋御坊主　鈴木清甫

右ハ寬永年中先祖鈴木清德拜領仕ル由。年久敷義ニ而、慥成義相知不レ申ル。

表田舍間四間半。裏幅同斷。裏行同三拾七間。此坪數百六拾六坪五合。

半田丹阿彌支配　池田新阿彌支配　御本丸表坊主　秋里祐悅

右ハ寬永十四丑年十一月廿五日先祖秋里宗意ニ丸御宮附坊主被ニ召出一ル。右拜領地之義ハ、年代相知レ不レ申ル。

表田舍間四間半。裏幅同斷。裏行同三拾七間。此坪數百六拾六坪五合。

御本丸御用部屋御坊主　中村地面住居　宗甫

右ハ寬永五辰年先祖中村良賀御天守下御宮附御坊主被ニ召出一、右町屋敷拜領、年月相知レ不レ申ル。

表田舍間五間壹尺五寸。裏幅同斷。裏行三拾七間。此坪數百九拾四坪餘。

御本丸奧坊主　高橋地面住居　宗貞

右ハ先祖高橋宗圓元和九亥年月日不ニ相知一被ニ召出一、寬永十八辛巳年右地面拜領仕、其節ハ當時迄拜領地面ニ住宅仕罷在ル。

表田舍間五間貳尺貳寸五分。裏幅五間。裏行同拾五間。此坪數七拾九坪五勺。

御代官簑笠之助手附　幸村庄助

右ハ先祖幸村太左衞門ゟ申者、權現樣御代被ニ召出一、慶長十巳年三州ゟ御供仕罷越相勤ル處、其節ハ御奉行之品相知レ不レ申、元和八戌年御側衆保々石見守殿中根壹岐守殿宮崎備前守殿支配ニ而御天守下御宮御番相勤、拜領屋敷之義ハ、寬永十八巳年地割奉行朝比奈源六郎庄田小左衞門ゟ相渡申ル。

表田舍間五間貳尺八寸。裏幅五間壹尺。裏行同拾五間。此坪數七拾九坪七合四勺。

町奉行筒井伊賀守組同心　人見脩助

右ハ先祖人見作右衞門義、御宮御番相勤ル節、寬永九申年拜領仕、同十八巳年町並屋敷被ニ仰付一、元祿九年七月町奉行川口攝津守勤役之節町屋鋪ニ被ニ仰付一ル。

市街檢弘時代

表田舍間五間貳尺六寸。裏幅五間壹尺。裏行同拾五間。此坪數七拾九坪五合。

小普請組神尾豐後守組　齋藤勝三郎

右ゟ先祖齋藤三右衞門ゟ申者、慶長十巳年三州松平村ゟ御供仕御奉公相勤、其節之役義支配等知不レ申、元和八戌年御天守下御宮御造營ニ付、保々石見守宮崎備前守支配之節、御宮高盛手傳相勤、其後忰三右衞門義、寛永十八巳年右屋敷地割奉行朝比奈源六・庄田小左衞門より相渡申ハ。

表田舍間五間壹尺七寸。裏幅四間壹尺貳寸。裏行同拾五間。此坪數七拾壹坪壹合貳勺。

小普請石川民部組　小峯勇三郎

右ゟ先祖齋藤長兵衞、寛永年中二ノ丸ノ御宮番人ニ被二召出一相勤罷在ハ内、右地面拜領仕ハ由。寛文二寅年養父長兵衞男子無二御座一ハニ付、急養子奉二願置一病死仕、同年四月養子甚左衞門ゟ跡式被二下置一、川船方同心被二仰付一、其後名字改本名小峯ニ罷成ハ。

一、横切下水壹ヶ所之義ハ、町内西之方一ツ木町淨土寺界ゟ東之方田町御堀端明地内大下水ゟ流し落申ハ。幅三尺五寸。水源之義ハ、妻木彦右衞門様屋敷内より流出申ハ。此義ゟ年代不レ知梶原源太景季鎌倉ゟ奥ゟ通りハ節、景季右川ヲ渡水中ゟ帶ハ太刀落しハニ付、附居ハ者之内ニヨ取上ヨゴレヲ洗ひハ由ニ御座ハ。右ニ付其頃より太刀洗川ゟ申傳ハ由。然ル處其後追々町屋出來ハヨ、當時ゟ下水ニ相成申ハ得共、今ニ右下水を梶原太刀洗川ゟ里俗ニ申傳へハ。

赤坂新町三町目

赤坂新町三丁目

一、御城ゟ坤之方ニ當り、凡貳拾三町程。

一、町内起立之義ゟ、同所貳丁目ニヨ申上ハ同様ニ御座ハ。尤不レ殘拜領町屋敷ニヨ同町貳丁目ゟ寂合町ニ御座ハ。○中略。

一、武家拜領人姓名○將軍家光時代ノ者一人ヲ抄ス。

表田舍間拾五間貳尺。裏幅同拾九間五尺四寸。裏行同東之方拾五間、西之方三間壹尺九寸。此坪數百六拾坪五合。

西丸御切手御門番頭松岡又右衞門組　清水安之助

右ゟ先祖清水伊兵衞義、大猷院様御代年月不二相知一、拜領仕ハ。

——文政町方書上

四谷忍町

四谷忍町　忍城守衞ノ士是年再ヒ拜領スト云フ。

四谷忍町

一、町内起立之儀ゟ、往古一圓之曠野ニ有レ之ハ處、文祿元辰年中御鷹野之砌、右

原之内ヲ高木九助様手附弐拾人ゟ於當所ニ御杖先ニ㐂居屋鋪被下置、御鷹野御道筋ニ付、町人共差置可申旨被爲仰付、拝領仕、其後高木九助様義筑後守様ゟ被成受領、武州忍之御城代被仰付ゟ砌、御同人支配ニ㐂忍之御城虎之間御番相勤ゟニ付、銘々忍表ゟ引移ゟ間、前書拝領町屋鋪一旦被召上ゟ跡、役名不知町野長門守様御組屋鋪ニ相成、寛永十七辰年中忍之御城勤番相止、御當地ゟ被召歸、御寶藏下番被仰付ゟ處、屋鋪無之ニ付、奉願、町野長門守様組屋敷被召上、如先規之當時有形之通り弐拾人ゟ大繩屋鋪ニ㐂被下置ゟ。後町御奉行御支配開町屋ニ奉願、名主付ニ相成ゟ得共、右起立之年月等ゟ度々之類焼ニ㐂焼失致、相分不申ゟ得共、忍之御城相勤ゟ有縁を以當所ヲ忍町ゟ唱來ゟ。且亦町内東之方横町境ゟ同所傳馬町三丁目ゟ續ゟ勝田彌十郎外弐ケ所拝領町屋鋪之義ゟ、元明屋鋪伊賀者ニ㐂、右ゟ往古麹町ニ㐂屋敷拝領罷在ゟ處、御用地ニ相成、寛永十二亥年中同所伊賀町ニ㐂代地被下置、猶其後同所ゟ御用地ニ相成、寛文五巳年中當所續明地之處拝領致ゟ儀ニ御座ゟ。尤右地續傳馬町三丁目之方ゟゟ沽券地屋鋪ニ付難組合ゟ間、忍町之方ゟ差加り同町名相唱來ゟ。

一、町内裏通り御先手御組屋鋪境自分道之義ゟ、寛永十七辰年中地主ゟ御支配御留守居方ゟ相願願濟ニ㐂、裏通弐間之道明ケ申ゟ。右ニ付自分道之内ニ違變等有之節ゟ町内ニ㐂取計申ゟ仕來ニ御座ゟ。

但、右願濟之節ゟ、未町屋ニゟ相成不申以前ニ御座ゟ。

一、町内之内東寄之方横町ヲ里俗忍原横町ゟ唱ゟ譯ゟ、起立ニ申上ゟ通、忍之御城相勤被召歸ゟ者拝領屋鋪ニ付、惣名忍町ゟ唱ゟ横町ニ付、忍原横町ゟ唱來ゟ義ニ㐂、原ゟ申文字ゟ何故付ゟ哉、一向申傳も無之相分不申、いつゟ之頃ゟ右様唱ゟ哉、書留等無之相分不申ゟ。

一、町内中程横町ヲ里俗左門町ゟ唱ゟ譯ゟ、古來諏訪左門様ゟ申御先手御組屋鋪起立ニ付、則左門町ゟ唱來ゟ義ニ㐂、いつゟ之頃ゟ右様相唱ゟ哉、書留無之申傳へ迄ニ㐂相分不申ゟ。尤當時御先手小尾十郎左衞門様御組屋鋪ニ御座ゟ。

一、町内西端ゟ横町ヲ里俗右馬殿横町ゟ唱ゟ譯ゟ、古來右横町ニ借馬致ゟ者弐軒數年罷在ゟニ付、則有馬町ゟ相唱ゟ處、其後辻右馬之助様ゟ申御旗本屋鋪有之ニ付、猶其頃ゟ右馬殿横町ゟ相唱ゟ由、何レ之頃ゟ右様相唱ゟ哉、書

留等無之相分り不申候。（略）○中

御廣鉢添番
新井藤吉郎　他住居。

小普請組太田内藏頭組
田村與兵衞　他住居。

御留守居支配御寶藏下番
吉田龜太郎

小普請組神尾豐後守組
關根丈治郎　他住居。

御留守居支配御寶藏下番組頭
大須賀惣三郎　他住居。

御留守居支配無役
伊藤恒次郎　他住居。

御留守居支配御寶藏下番
島田貞藏　他住居。

御留守居支配御寶藏下番
吉岡源太郎　他住居。

御留守居支配御寶藏下番組頭
岸本兵三郎

御代官佐藤忠右衞門手附
井上彌左衞門　他住居。

表田舍間七間。裏幅同斷。裏行貳拾五間。此坪數百七拾五坪。

表田舍間半、此坪數百七間。裏幅同斷。裏行貳拾五間。此坪數百八拾七坪。

表田舍間七間。裏幅同斷。裏行貳拾五間。此坪數百七拾五

其後銘々當時有形之通割合所持仕來ㇾ義ニ御座ㇾ。尤外御場所ゟ御役替致、當時御寶藏下番勤之者と拾壹人ニ相成申ㇾ。

——文政町方書上

牛込淨泉寺門前

牛込淨泉寺門前　牛込村大橋龍慶所持屋敷之所、同人右門前起立之儀ゟ、往古牛込村之内ニ有ㇾ之、其後大橋龍慶屋敷内ニ起立ス。

牛込淨泉寺門前

牛込淨泉寺ゟ寄附仕、同寺除地ニ相成、寛永十七辰年中門前町屋ニ起立仕、其頃御奉行御名前書留無ㇾ之、相譯り兼申ㇾ。尤寺社御奉行御支配御座ㇾ。〇下略。

——文政町方書上

下平右衛門町

下平右衛門町　町地拜領者有ㇾ。

一、拜領地

右、下平右衛門町之内町醫山本壽仙拜領地、間口田舍間四間五尺五寸、奥行貳拾貳間壹尺八寸、此坪百九坪六合四夕。

町醫師　山本壽仙

右拜領地之儀ハ、先壽仙伯母ぬさ夫倉橋喜兵衛儀權現樣御代御賄頭相勤ㇾ處、御勘定不足仕ㇾニ付、逼塞被ㇾ仰付、御役名不ㇾ知久世大和守樣御差圖を以、同斷矢部四郎兵衛樣被ㇾ仰渡ㇾハ、淺草平右衛門町之町人作兵衛上ヶ地ニ住居

仕ㇾ樣被ㇾ仰渡、寛永十七年ゟ右屋敷ニ罷在、同十八巳年十一月中右喜兵衛儀病死仕ㇾ已後、同人妻ぬさ義、寛永二十未年御本丸ゟ御奉公ニ被ㇾ召出、其後ぬさ義、弟山本藤右衛門と申者一所ニ住居仕ㇾ。夫ゟ甥山本壽仙と申ものゟ右屋敷讓り渡、壽仙悴ゟ當壽仙迄四代所持仕ㇾ。公役町並相勤罷在ㇾ。尤御用等相勤ㇾ儀無ㇾ御座ㇾ。

——府内備考

江戸城煤拂

〔附記〕江戸城煤拂

一、同年〇寛永十七年。江府金城煤拂、今年ゟ始る。

——國朝舊章錄

基督教徒處刑

基督教徒是年〇寛永十七年（紀元二三〇〇年）。品川〇武藏國荏原郡。ニ於テ刑セラレタル者有リ。〇玉滴隱見。

基督教徒處刑事蹟

基督教徒處刑　傳フル所左ノ如シ。談海集ニモ此事見ユ。

吉利支丹ヒ梟首ニ掛ル支

寛永十七年ニ四谷ノ宿外百姓ヒ、其外ノ者ヒ相加リ、穴ヲ堀リ棲トシテ年月ヲ送リケリ。是昔吉野ノ同科ノタクヒノ如シ。是ハ皆提宇子天帝爾天連印留慢等ノ邪宗ヒ成シガ、四谷明地ノ處ヲ江戸傳馬町ノ公義御役勤ムル者ヒノ下屋敷ニ被ㇾ下ㇾニ付、地割衆ヨリ右ノ屋敷割渡サレシ時、彼穴ノ中ニ住居ナ

ラサレハ立退タル其跡ノ穴ニハ、牛ノ角何ヤカヤ肉食仕い様々ノ物有シ故、其義ニ付テ御穿鑿有シカハ、九人召捕レ、梟首ニ掛ラレケリ。其後所々方々ヨリ追々捕ヘ來テ同罪ニ被行畢。

同年ニ品川ニ於テ賣人其外諸浪人ヒ、吉利支丹宗門ノ族ヲ七十餘人召捕ヘラレ、品川ノ沖ニノ逆ニツルサレ水礫ニ掛レケリ。汐ノ滿タル時ハ首ヨリ下肩ヲ越テ汐水ニヒタル、息モツキ上ス苦シミ、中々目モアテラレヌ有様ニ。亦汐ノ引シ時ハ、顏夥敷腫テ人粧替リシカハ、此世ノ人ヒ思ハレス、イトイフセク貌悉ク替テ、七八日カ間ニ皆々末ノ露本ノ雫ト後先立テ死失セリ。誠ニカヽルイフセキ責ニ逢テ死スルヨト思ヒヤルサヘイト堪難シ。

——玉滴隱見

江戸大火

江戸大火事蹟

十八年辛巳（〇寛永〇紀元二三〇一年。）正月廿九日乙巳（〇乙巳、三正綜覽。）夜、江戸大火、翌晦日丙午（〇寛永十八年（紀元二三〇一年）正月。〇丙午、三正綜覽。）夜ニ及ヒ、町家九十七町・武家屋鋪百卅軒ヲ燒ク。（〇變災篇參照。）

江戸大火　變災篇ニ詳記ス。

正月晦日（〇寛永十八年。）

一、昨夜子刻、桶町より火事出來、至今日風烈故町屋九拾七町、屋敷數千九百貳拾四軒、但桶町より南ハ芝宇田川橋迄、西ハ淺生東ハ本引ケ迄也。侍屋敷百貳拾一軒、同心屋鋪五十六軒燒失。所謂、

脇坂淡路守（兩屋敷。）　稲葉淡路守
秋月長門守　古田兵部少輔
土井甚十郎　村田伊平太
村越清二郎　山内豐前守
中川內膳正　堀甚五兵衞
京極刑部少輔（中屋敷。）　渡邊半丞
山崎甲斐守　古田平三郎
古田兵九郎　本堂伊勢守
大島茂兵衞　大島久五郎
稲葉民部少輔　有馬左衞門佐
毛利甲斐守　德永式部少輔
田中主殿頭　谷宇右衞門

加藤民部少輔
能勢市十郎
内藤主膳正
内藤左京
一ノ邊右馬助
朽木兵部少輔
山岡傳右衞門
伊吹又三郎
能勢惣右衞門
松平相摸守下屋敷。
本多百助
妻木平十郎
一柳藏人
植村出羽守
土方杢助

谷藏人
内藤權之助
多賀左近
遠山忠兵衞
下曾根三十郎
上田主殿
戸田半右衞門
渡邊内匠
大村丹後守
分部左京亮
金森市兵衞
一柳美作守
佐久間藏人
本多太郎左衞門
島津万壽

佐久間源六
新藤九左衞門
兼松彌五左衞門
富永喜左衞門
近藤市左衞門
奥田半兵衞
戸川權左衞門
金森左兵衞
牧野内膳
妻木吉左衞門
山角又兵衞
山口但馬守
金森左近
多賀外記
本多主馬

木下右衞門大夫
竹中左京
多羅尾内記
土方宇右衞門
花房志摩守
戸川土佐守
神長左衞門
櫻井庄之助
小出甚太郎
妻木傳兵衞
黒田万吉
山口備前守
大久保甚右衞門
秋田隼人正
中山六左衞門

小出大和守（下屋敷。）
伊東主膳正
同　内膳正
毛利日向守
渡邊久左衞門
服部久兵衞
秋山彌左衞門
多賀角左衞門
能勢次左衞門
花房勘右衞門
加藤助十郎
大澤牛之助
天野對馬
山田五郎左衞門（八丁堀筋）
尾張大納言殿（下屋敷。）

眞田伊豆守（下屋敷。）
仁賀保内記
寺澤兵庫頭（下屋敷。）
小出杢助
佐久間宇右衞門
佐久間五郎兵衞
赤井五平二
戸田一郎右衞門
永井式部少輔
松平石見守（長屋四十間。）
川田半助
有馬出雲守
山中彦四郎
紀伊大納言殿同。

日根野織部正同。
松平周防守（下屋敷。）
松平左近
坪内惣兵衞（與力壹人。同心四十人。）
山本與九郎（同心三人。）

今夜陰。（戌下刻）火消番之下々、町人等數百人燒死云々。——寛永日記
同（〇寛永。）十八年正月廿九日の夜より、翌晦日の夜ニかけ、一日二夜江戸中大火也。火元は中橋桶町也。此時家數九十七町幷武家屋敷百卅軒燒失ふ。是御代始めての大火と云々。
晦日（〇寛永十八年正月。）夜中桶町失火、至ニ今日一烈風故、町九十七町、侍屋敷（大小名屋敷。）百二十軒、同心五十六軒燒失。町人下々數百人死。——玉露叢
廿九日（〇寛永十八年正月。）江戸桶町ヨリ出火、風大ニ吹ク。火不レ消事一日一夜、數千軒燒失ス。——人見私記

執權阿部豊後守依ニ上意一、火事場へ出。是ハ大名大勢爲ニ火消一可レ罷出一旨有ニ御觸一故、不レ可レ不レ知レ之由依ニ仰出一ル所也。在江戸ノ家人ハ大略召連ト云云。然ニ大名

京極主膳正
松平　主馬
松平越後守（下屋敷。）
榊原兵右衞門（同心十人。）
田中主殿頭（同心二人。）

ノ中、相馬大膳亮落馬シテ半死半生之躰也。町奉行加々爪民部少輔○忠澄。ハ落馬ノ卒ス。火消大名ノ家人手負死人大勢有」之、燒死ノ者町人數百人也。豊後守風下ノ家ヲ取切消留ト云云。

——寛明日記

一、寛永十八年正月廿九日桶町大火、南ハ增上寺際小田川橋、東ハ海邊迄、北ハ御成橋、西ハ淺布、其間之侍屋敷町屋敷類燒。御玄關ハ御出被」遊、御直ニ御下知被」遊、火消役相馬大膳落馬、漸歸宅、大目付加々爪民部少輔○忠澄。烟ニ咽テ死去。

——寛永小說

王子茶亭營作事蹟

二月五日辛亥

○寛永十八年(紀元二三〇一年)○辛亥、三正綜覽。使番林勝正○丹波。命ヲ受ケテ王子茶亭ヲ營作ス。○寛永日記。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

王子茶亭營作

王子茶亭營作 傳ス、

二月五日○寛永十八年。

一、林丹波守○勝正。王子御茶屋御普請奉行被」仰付」之。

——寛永日記

五日○寛永十八年二月○中略。使番林丹波勝正、王子村御憩息所構造の奉行仰付らる。

——大猷院殿御實紀

勝正○藤左衞門。丹波。林。

十八年○寛永。二月五日まで、王子御茶屋の普請を奉行す。

——寛政重修諸家譜

久保町市人賜銀事蹟

北條氏重等屋鋪替事蹟

三月朔日丙子

○寛永十八年(紀元二三〇一年)○丙子、三正綜覽。新ニ市街ヲ設ケタル京橋久保町○市内。市人ニ銀二百貫ヲ給ス。○寛永日記。人見私記。

久保町市人賜銀 ハ、

三月朔日○寛永十八年。

一、今度屋敷相立ル町屋拾町○京橋久保町。之者共、銀子貳百貫目被」下之旨、兩町奉行老中被」申渡之。

——寛永日記

三月朔日○寛永十八年○中略。

今度屋敷相立ル町屋十町○京橋久保町。之者共、銀子二百貫目被」下旨、兩町奉行ヱ老中申渡ス。

——人見私記

北條氏重等屋鋪替

八日癸未

○寛永十八年(紀元二三〇一年)三月。○癸未、三正綜覽。關宿○下總國。城主北條氏重○出羽守。大番頭松平忠實○外記。同松平眞次○縫殿助。佐貫○上總國。城主松平勝隆○出雲守。等ノ屋鋪替有リ。○寛永日記。

北條氏重等屋鋪替事蹟 寛永日記ニ、

三月八日〇寛永十八年。

一、本多甲斐守〇政朝。上屋敷北條出羽守〇重。氏記、〇忠寛。松平式部大輔上屋敷〇次。忠松平外隊。松平和泉守上屋敷松平縫殿助、〇次。眞北條出羽守元屋敷松平出雲守、〇勝右之通屋敷被下之、出雲守外記、縫殿助ハ、唯今迄之屋敷是又嫡子ニ被下之旨、被仰出之趣、老中被申渡之。

何レモ西丸下ニ於ケル諸邸ナル如シ。往古江戸繪圖ノ「本多甲斐」邸西隣「本多美濃」邸ヲ承應江戸圖閣本江戸圖「北條出羽」邸ヲ承應江戸圖保江戸圖承應江戸圖「松平外記」トシ、往古江戸繪圖ノ「北條出羽」邸ヲ承應江戸圖閣本江戸圖「松平出雲」トス、是ナル可シ。若夫往古江戸繪圖ノ「松平和泉」邸ハ、承應江戸圖新添江戸圖共ニ「曾我丹波」ト記シ、往古江戸繪圖ノ「主殿〇石川忠總。下屋敷」ヲ兩圖同ク「松平縫殿」トス。

晦日乙巳〇寛永十八年(紀元二三〇一年)三月〇乙巳、三正綜覽。日本橋貳町目邊火災〇變災篇參照。延燒ス。

日本橋貳町目邊火災　變災篇ニ記ス。

三月晦日〇寛永十八年。

日本橋貳町目邊火災事蹟

附記　士人の商行爲處罰

一、昨夜丑刻、日本橋貳丁目之町屋より火事出來、同貳丁目十三間、三町目廿四間、四丁目廿三間、幷玄冶・半井三位・幸若村彦屋敷、其より薄屋町十九間、御簾屋德助・久志本式部・山田藤右衛門・木屋庄兵衞家・檜物町四十貳間、河原豊後大工町六間、油町廿貳間、此外會所四ヶ所燒亡、今巳上刻火消留之。

——寛永日記

〔附記〕　士人ノ商行爲處罰

四月十九日〇寛永十八年。

一、渡邊彌之助步行同心屋敷之前ニ竹材木等立置、商賣仕躰、昨日酒井讃岐守下屋敷之邊御成之節上覽樣子、被遂御穿鑿之處彌之助步行同心也、不寄何事商賣仕ル義、前廉御法度被仰出之處、如此之躰、曲事被思召之間、雖可被行死罪、爲歩行之者之儀ハ間、御追拂也、右之趣御弓御鐵炮之頭中殿中へ招之、何ゑ常々不念ニ依申付之右之趣也、向後能〳〵可申付之旨、上意之通、民部少輔志摩守被傳之。

——寛永日記

十九日〇寛永十八年四月。昨日酒井讃岐守忠勝か別業にならせ給ふとて、先手頭渡邊彌之助勝か所屬の同心等か住宅前を過させ給ひしに、その同心宅前に

竹木をつみ置、商賣するさま御覽せられ、先令違犯の罪により、かの同心は追放たる。よて先手頭をめして、この後所屬をよく曉諭すへきむね仰出さる。又松平伊豆守信綱・阿部對馬守重次・大目付井上筑後守政重幷目付の輩をめして法令の事を面命せらる。渡邊彌之助勝は、病臥により咎められず。その子權六郎正は、御前をとゞめらる。

——大猷院殿御實紀

窪町土橋修理

窪町土橋修理事蹟

四月晦日乙亥（〇寛永十八年（紀元二三正綜覽）〇乙亥、三正。）ヲ奉行トシテ、窪町土橋（〇市内。）ヲ修理セシム。（〇寛永日記。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。）

窪町土橋修理 相傳ヲ、

四月晦日〇寛永十八年。

飯河善左衞門（〇方好。）〇大番。島彌次右衞門（〇正成。）

右窪町土橋破損ニ付、奉行被仰付之旨、老中傳之。

——寛永日記

晦日〇寛永十八年四月〇中略。此日大番飯河善左衞門方好、島彌次右衞門正成、窪町土橋修理奉行仰付らる。

方好善左衞門。

〇飯河。

——大猷院殿御實紀

慶長十九年めされて台德院殿につかへたてまつり、大番に列し、〇中略。寛永十八年四月晦日仰をうけて窪町土橋修理の奉行をつとめ、〇下略。）

正成〇忠三郎。彌次右衞門。今の呈譜正友に作る。日記。寛政呈譜。御徒方萬年記。安國殿記。

十八年〇寛永十八年（紀元二三正綜覽。）五月〇己亥、三正綜覽。將軍家光（〇德川。）三緣山靈廟（〇市内芝區。）ニ詣シ、命シテ安國殿ヲ轉移セシム。蓋火災ヲ警戒スル也。（〇寛永日記。大猷院殿御實紀。）

安國殿轉移

安國殿轉移事蹟

廿四日己亥〇寛永十八年（紀元二三正綜覽。）五月〇己亥、三正綜覽。將軍家光（〇德川。）三緣山靈廟（〇市内芝區。）ニ詣シ、命シテ安國殿ヲ轉移セシム。蓋火災ヲ警戒スル也。（〇寛永日記。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。）

安國殿轉移 左ノ如ク傳ヲ、

五月廿四日〇寛永十八年。

一、午後、增上寺御佛殿御參詣、御長袴（御劍今川刑部。）御沓三浦志摩守（〇正次。）役之。

五月廿五日〇寛永十八年。

一、午後刻、增上寺へ御成。是安國殿御普請ヲ付ヲ地形上覽、云云。

一、松平陸奥守（〇伊達忠宗。）鍋島信濃守（〇勝茂。）下屋敷、久留島丹波守（〇通清。）屋敷、依レ爲二增上寺近邊一、御佛殿火之用心惡付ヲ、宅地可レ被二替下一之旨、被レ仰出之一、依レ之右三輩へ老中奉書遣レ之。

六月六日〇寛永十八年。

一、土井遠江守幷讃岐守・豊後守・對馬守御前へ召、增上寺の繪圖上覽、是今度彼寺内御普請付ゐ也。

十二月十五日〇寛永十八年。

一、於增上寺安國殿上棟付ゐ、御弓御銃炮之頭三人・御歩行之頭、何も組共ニ、御目付兼松彌五左衞門幷御徒目付五人、彼地へ被差遣之。

一、土井大炊頭〇利勝。被召出、安國殿上棟令首尾義、御機嫌之旨、被仰含之、云々。

十二月十七日〇寛永十八年。

一、增上寺安國殿御入佛、依之御法事有之、土井大炊頭奉之執行、云々。

十二月廿六日〇寛永十八年。

一、去比增上寺安國殿御造營御奉行土井大炊頭被仰付之、依之下奉行四人、白銀幷吳服等被下之。

——寛永日記

廿五日〇寛永十八年五月。

一、增上寺塔幷安國殿御繩張ニ九ツ過御成。八過還御。其刻口御門之道々御繩張被仰付、土井大炊頭被仰付之、依之下奉行四人、白銀時服被下。

——寛永日記

廿四日〇寛永十八年五月。三緣山靈廟へならせ給ふ。今川刑部大輔直房御刀、三浦志摩守正次御沓の役す。尾紀水三卿陪拜、其他豫參供奉例の如し。崇源院殿靈牌所

浦志摩〇正次。堀田加賀〇正盛。永井信濃〇尚政。酒井河内〇忠清。御先ゟ參。塔ゟ酒井雅樂〇忠世。被建ル故、則酒井河内ニ被仰付ル事。

十五日〇寛永十八年七月。

安國殿地形御覽被遊、七ツ過ニ還御。

五月廿五日〇寛永十八年。增上寺塔幷安國殿御ゐ張ニ九過ニ御成、八過還御。虎ノ口御門之道之御繩張被仰付、土井大炊頭〇利勝。酒井讃岐守〇忠勝。阿部豊後守〇忠秋。阿部對馬守〇重次。三浦志摩守〇正次。堀田加賀守〇正盛。永井信濃〇尚政。酒井河内〇忠清。御先ゟ參。塔ハ酒井雅樂〇忠世。被建ル故、則酒井河内ゟ被仰付ル事。

——曾我日記

十二月十八日〇寛永十八年。安國殿御作事出來ル、初ゐ增上寺ゟ御成。八ツニ御成、安國殿より直ニ還御。

——人見私記

十八日〇寛永十八年十二月。午刻、增上寺安國殿御成。未刻還御。

廿六日〇寛永十八年十二月。去比增上寺安國殿造營奉行利勝〇土井。被仰付、下奉行四人ヱ銀時服被下。

にもまいらせ給ふ。安國殿の地形をも御親巡あり、酒井讃岐守忠勝もて三卿へ仰つかはされしは、警火のため安國殿を塔の方に引うつされ、塔をば又其傍にうつし、本坊よりつゝきし廊閇、山門の傍の僧坊を破壊し、道をひろくおさるへきよしあり。

廿五日○寛永十八年五月○中略。午後三緣山にならせられ、安國殿の經營を御覽せられ、松平陸奥守忠宗、鍋島信濃守勝茂別業、久留島丹波守通清宅地、增上寺に接近せるをもて、外にうつさる。これも警火のためありとて、阿部豐後守忠秋もて、かさねて紀邸に安國殿經營のさまを仰つかはさる。

廿八日○寛永十八年五月。○中略。この日酒井河内守忠清に、增上寺構造所の助役を仰付らる。

十三日○寛永十八年六月。吉辰により三緣山安國殿鍬初あり。

十五日○寛永十八年七月。增上寺に成らせられ、法問聞召れ、安國殿經營の地を親巡し給ふ。

十五日○寛永十八年十二月。三緣山安國殿上棟により、月次拜賀おこし、安國殿へは、先手頭三組、歩行頭三組、目付兼松彌五左衞門正直まかりむかふ。土井大炊頭利勝を、

めして、この上棟事故おくとゝのひ、御氣色の旨面命せられ、○下略。

十七日○寛永十八年十二月。○中略。この日三緣山安國殿入佛供養あり、土井大炊頭利勝奉行す。

十八日○寛永十八年十二月。安國殿へ參らせ給ふ。三卿陪拜あり。紀伊亞相病いへてけふ陪拜せられ、御滿悅の旨仰こと蒙らる。

廿六日○寛永十八年十二月。安國殿御造營のことにあづかりし土井大炊頭利勝が家士等時服下さる。

利勝松平代。甚三郎。大炊助。大炊頭。從五位下。從四位下。侍從。○土井。

十八年○寛永。十二月二十六日、さきに增上寺安國殿造營のことをうけたまはりしにより、其ことにあつかれる家臣に時服白銀等をたまふ。

——寛政重修諸家譜

○上略。御宮作ㇾ三度迄御改被ㇾ仰出ㇾ候儀、最初之御宮ハ、元和二年十月御造營、則今之開山堂是也、貳度目之御宮ハ寛永十一年御造營、則今之黑本尊堂是也。三度目之御宮ハ寛永十八年御造營、則今之丸山之御宮是也。

此丸山地ニ再三御造替被ㇾ仰出ㇾ候譯ハ、神君樣○德川家康。駿河御在世之節、故あり

て九月十三夜丸山秋の月と云御出題ニあ御歌り、

松高き丸山寺ゟ流ゟの井幾年すゑゑ秋の夜の月

依レ之被二思召付一レ御儀と申傳レ。此御歌の譯書、永き故略レ之。

御本社内左右鷹墨繪六ヶ所有レ之、此御繪ハ。大猷院樣御繪之由申傳、毎度御修復之節、御鷹計ハ、御古イ儘ニあ差置レ事。

御惣門を鷹御門と申ゑ、駿河御城御玄關ニレ所、御存生之節、常々御賞美被レ遊レ御門ニ付、寛永十八年御再建之節、大猷院樣思召ニあ、御引取御建被二仰付一レ由。尤腰掛之跡、且すざゟ樣之ゑのうけレ折釘有レ之レ。右之通御由緒ニ御座レあ、大猷院樣ニハ、厚く被二思召一レ御儀と奉二恐察一レ。

——安國殿記

元和三年正月御鏡の御影昇遷座也。其後寛永十一年又改て影殿新に御建立有しが、家光公上意には、大權現の御影、當家あらん限は、誰か是を疎んじ奉らん、大切の影像あれば、火の用心覺束なし、家はなれたる丸山の麓に御移しあらんと、御自身御見立まし〳〵て、新に新殿を御建立、寛永十八年御影遷座、今の安國殿すゑはち是ありといふ。

——開運錄

寛永十九年巳六月廿五日ニ、增上寺ひろかり、正宗殿〇伊達。下屋敷鍋嶋殿下屋

伊達氏別業其他轉移

伊達氏別業其他轉移事蹟

敷立ニて、殊外之御普請始り申レ刻、五重堂やふりて其跡へ安國殿參レ。いつゟも立直り申レ。增上寺二十一代目也。

——誠貳日記

忠之從四位下侍從。右衞門佐。筑前守。幼名萬德。忠長。後忠政と改、又忠之と改。〇黑田。

同〇寛永。十九年增上寺安國殿石御鳥居建立。

——寛政呈譜

東照宮鄕社。

芝區芝公園地ノ西南ニアリ。德川家康ヲ祀ル。寛永十八年辛巳德川氏之ヲ創建シ、安國殿ト稱ス。明治六年癸酉七月東照宮ト改メ、鄕社ニ列ス。祭日六月一日トナス。境内大銀杏樹アリ、傳テ家康手植スル所ナリト云。

——東京通志

廿五日庚子〇寛永十八年(紀元二三〇一年)五月〇庚子、三正綜覽。仙臺〇陸前國。城主伊達忠宗〇陸奥守。佐嘉〇肥前國。城主鍋島勝茂〇信濃守。ノ別業、及森〇豐後國。邑主久留島通春〇丹波守。邸ヲ外ニ移ス。增上寺安國殿警火ノ爲也。〇前項參照。

伊達氏別業其他轉移　事情上記安國殿轉移ノ條ニ記ス。

廿五日〇寛永十八年五月〇中略。午後三緣山にならせられ、安國殿の經營を御覽せられ、松平陸奥守忠宗・鍋島信濃守勝茂別業、久留島丹波守通清〇通春歟。宅地、增上寺に

接近せるをもて外にうつさる。

按スルニ往古江戸繪圖增上寺ノ北ニ並ヒテ、西ヨリ「政宗○伊達。下やしき」「くる島越後○春。通。」「あべ島信濃○茂。勝。中やしき」ト有リ「是ナル可シ。○府本寛永九年江戸圖、鍋島中屋敷ヲ「福島左衞門屋布地今政宗下屋布」トシ、「政宗下屋敷」トアルヲ「鍋島信濃下屋布」ニ作ル。内伊達氏別業ハ、

寛永十八年五月廿六日辛丑、江戸ニ於テ阿部對馬守殿○重次。宅ヘ久世久左衞門ヲ召出サレ、公○伊達忠宗。ノ御下屋敷召上ラルルノ旨仰渡サル。

此御屋敷ハ、今ノ增上寺ノ境内ナリ。此以後、替地トシテ濱ノ御屋敷ヲ賜フ。

此年霜月下旬以後歟。年月不レ知。今ノ御上屋敷是ナリ。

——義山公治家記錄

是日○寛永十八年(紀元二三〇一年)五月廿五日。濱松○遠江國。城主松平乘壽○和泉守。・田中○駿河國。城主松平忠晴○伊賀守。・柳生○大和國。邑主柳生宗矩○但馬守。ニ、出石○但馬國。城主小出吉英○大和守。ノ返上邸ヲ與フ。隣接地タルヲ以テ也。○寛永十八年。

松平乘壽等賜邸　寛永日記ニ據レハ、

五月廿五日

一、小出大和守○吉英。上ケ屋敷、松平和泉守○乘壽。松平伊賀守○忠晴。柳生但馬守○宗矩。ニ被レ下レ之是右三輩之屋敷隣ニよりて也。

小出氏ハ、往古江戸繪圖虎門ニ「小出大和」ト記ス者是歟。

〔附記〕　藩邸取締

藩邸取締ノ一例トシテ伊達忠宗法度書ヲ左ニ抄出ス。

定

一、門之出入、男女共晝夜木札を以可レ相レ通之事。

一、火之用心堅可レ申付レ。若屋敷之近所火事出來レ、早速參レ、留守居之者下知次第、疎略仕間敷之事。

一、喧嘩口論非次第ニ可レ申付レ。付、助言之輩當人とり可レ爲曲支之事。

一、常々形儀等可レ相嗜レ。於レ猥ニ、不レ寄レ誰々、可レ爲曲支之事。

一、町宿停止之事。

一、湯風呂へ入事、伊勢九左衞門ニ承合可レ參支。付、町あるき可レ爲同前事。

一、作支場諸職人日帳、念を入可レ爲付事。

一、屋敷中ニ他所之者置申間敷事。

一、金銀遣方路錢駄賃代扶持方之義承屆、手形可出し。其外之儀ゟ、遂披露可相渡事。

一、諸役人萬支無油斷樣可申付事。

一、見物支、堅停止之事。

一、博奕雙六惣別勝負、可爲停止事。

一、振舞一汁三菜、酒可爲三返之事。

右法度之外、指當儀不寄何支、無機遣可申付者也。

寛永十八年五月十二日

片平伊勢殿

久世九左衞門殿

——大日本古文書

邸地收給

六月廿日甲子〇寛永十八年(紀元二三〇一年)〇甲子、三正綜覽。佐倉〇下總國。城主石川忠總〇主殿頭。大手前邸〇市内麴町區。ヲ返上ス。〇寛永日記。是日〇寛永十八年(紀元二三〇一年)六月廿日。森〇豐後國。邑主久留島通清〇丹波守。ハ替地ヲ芝〇市内芝區。ニ賜レ、所司代板倉重宗〇周防守。大目付井上政重〇筑後守。亦賜邸ス。〇寛永日記。

邸地收給　寛永日記傳フル所左ノ如シ。内久留島通清増上寺邊ノ邸ヲ收公シタルコトハ、既ニ之ヲ記ス。

六月廿日〇寛永十八年。

一、石川主殿頭〇忠總。大手之前之屋敷差上度之由、連々依訴訟、則被召上之、於他所替屋敷可被下之旨也。

一、久留島丹波守〇通清。屋敷之替地、芝よて被下之。

一、板倉周防守〇重宗。大圓寺屋敷被下之。

一、井上筑後守〇政重。下屋敷被下之趣、至長崎奉書遣之。

下文大圓寺櫻田溜池ヨリ伊皿子ニ移ルコト見ユ。所謂大圓寺屋敷ハ其舊地歟。非歟。

〔參考〕　東本願寺敷地

寛永日記左ノ如ク記スハ、京都ニ於ケル寺地乎、江戸ニ於ケル寺地乎ヲ知ラス。

六月廿一日〇寛永十八年。

一、東本願寺敷地之於東際、東西百九十四間貳尺南北二百九十七間五尺、今度就新加之御寄附、御直判之御書出被遣之。因茲彼寺留守居之僧一人侍一

人召寄之、阿部豊後守幷寺社奉行三人、右之旨被申渡之。

〔附記〕屋鋪替

六月廿二日〇寛永十八年。

一、井上新左衞門屋敷秋山十右衞門〇正俊。ニ被下之。十右衞門屋敷御城近邊故、連〻訴訟申上付而、被替下之旨、阿部對馬守〇重次。被申渡云々。

——寛永日記

尾張家下屋敷後道路

七月朔日乙亥〇〇寛永十八年(紀元二三一年)〇乙亥、三正綜覽。名古屋〇尾張國。城主徳川義直〇大納言。請ヒテ下屋敷〇市内。後背ニ道路ヲ開ク。〇寛永日記。

尾張家下屋敷後道路事蹟

尾張家下屋敷後道路 ハ、

七月朔日〇寛永十八年。

一、五時過御三家登營、例之間ニ而御酒出、老中出座、尾州家より内々被仰入ニ付、下屋敷町屋之裏筋路ニ被成度段、達御聽、相濟ん由。〇下略。

——寛永日記

七月朔日〇寛永十八年〇中略。尾張亞相義直〇徳川義直。は、別業の後に、道路をひらかんと事をゆるされ、〇下略。

——大猷院殿御實紀

芝浦海濱老臣巡視

十月五日丁未〇〇寛永十八年(紀元二三一年)〇丁未、三正綜覽。諸老臣芝浦海濱〇市内。邸宅ヲ巡視ス。〇寛永日記。

芝浦海濱老臣巡視事蹟

芝浦海濱老臣巡視 ハ、

十月五日〇寛永十八年。

一、老中芝筋海手之屋敷爲見分被參、云々。

——寛永日記

五日〇寛永十八年十月。諸老臣芝浦海濱を巡視す。

——大猷院殿御實紀

市谷水道石垣構造

十六日戊午〇寛永十八年(紀元二三一年)十月。〇戊午、三正綜覽。村上〇越後國。城主堀直定〇千牛。介。安田〇越後國。邑主堀直時〇七郎五郎。市谷水道石垣〇市内牛込區。ヲ構造シ、是日〇寛永十八年(紀元二三一年)十月十六日。家臣等授賞セラル。〇寛永日記。人見私記。寛政重修諸家譜。府内備考。

市谷水道石垣構造事蹟

市谷水道石垣構造 ハ、

十月十六日〇寛永十八年。

堀　千　介〇直定。　同　七　郎　五　郎〇直時。

右市ヶ谷水道石垣被仰付、就令出來、彼下奉行七人銀子吳服被下之。

——寛永日記

十六日〇寛永十八年十月。堀千介〇直定。同七郎五郎〇直時。市谷水道石垣被仰付、就出來、彼下奉行銀子吳服被下。

——人見私記

十六日　○寛永十八年十月○中略。堀千助直定・堀七郎五郎直時、市谷水道石垣構造つかふまつりたるにより、その事にあつかりし家士等、銀時服給ふ。

——大猷院殿御實紀

直定　千介。○堀。

○上略。十八年○永。寛十月十六日市谷水道石垣の普請を助けつとめしにより、家臣等に物をたまふ。

直時　七郎五郎。丹後守。從五位下。○堀。

○上略。十八年○永。寛十月十六日宗家千介直定とともに、市谷水道石垣の普請をつとめしにより、家臣等に物をたまはり、○下略。

——寛政重修諸家譜

田町壹丁目○市谷。○中略。

一、下水　幅六尺。

右ゟ當町より牛込揚場町ニ至りいん大下水ニ而、兩側石垣石橋共、寛永十八丗年中、堀千之助様御手傳ニ而出來仕いん。

但、大下水ゟ、大久保邊落水幷四ッ谷邊上水吐水二口ニ而、八幡町ゟ一口ニ相成、田町通・船河原町・御武家屋敷前通・牛込牡丹屋鋪揚場町・船河原橋際江戸川ゟ落込申いん。右下水堀石垣出來以前ゟ、只今尾州様表御門ゟ下之方を柳川ゟ相唱いん由。右ゟ川添ニ柳樹植有之いん故之唱ゟ申傳いん。亦同御屋鋪表御門上之方ニ楓坂ゟ申いん場所有之、右近邊川筋を楓川ゟ相唱いん由。紅葉川共相唱いん由申傳いん。

揚場町　○牛込。○中略。

一、大下水　幅壹間。

右ゟ南之方ゟ北之方へ流、牛込牡丹屋敷ゟ武家方前通流來、末ゟ江戸川ゟ落入申いん。兩側石垣石橋とも、寛永年中堀千之介様御手傳ニ而出來仕、當時家前之方ゟ町内ニ而修復仕、道附之方ゟ、町御奉行所ゟ御訴申上いん、御修復被成下いん。委細之義ゟ、市谷田町御調之節、同所ニ而申上いん通ニ御座いん。

——府内備考

秋　○寛永十八年（紀元二三〇一年）。**淀**　○山城國。**城主永井尚政**　○信濃守。**西久保**　○市内芝區。**土手普請ヲ奉行ス。**　○譜牒餘錄。

西久保土手普請　其那邊ナルヤヲ知ラズ。永井尚政之ヲ奉行シタルコト譜牒餘錄ニ見ユ。

市街恢弘時代

附記　主殺處刑

一、同年〇寛永十八年。之秋、西久保土手御普請奉行信濃守〇永井尚政。被仰付、相勤申し支。

〔附記〕主殺處刑

七日〇寛永十八年十二月〇中略。さきに書院番内藤四郎左衞門か家僕二人、主を殺害して亡命せしかば、きびしく追捕せられ、府内を引廻して後、日本橋に於て數日の間竹鋸をもて首を引き切らしめ、保人もかの賊追せしとき、送り行きしにより、同罪ニ處せられ、賊父兄弟保人の妻子。すべて十人、淺草に於て磔に行はる。

——大猷院殿御實紀

青山幸利賜邸　土井利勝賜邸

冬〇寛永十八年(紀元二三〇一年)。尼崎〇攝津國。城主青山幸成〇大藏少輔。嫡子幸利〇大膳亮。前松山〇備中國。城主池田長常〇出雲守。上屋鋪ヲ賜フ。〇寛政呈譜。古河〇下總國。城主土井利勝〇大炊頭。ノ谷藏屋鋪〇市内日本橋區。ヲ賜フ、亦是年〇寛永十八年(紀元二三〇一年)。ニ在リ。〇開府以降舊藩賜邸調。子爵土井家回答。僧天海モ屋鋪ヲ賜フ。〇東叡山開山慈眼大師傳記。

天海賜宅

青山幸利賜邸事蹟

青山幸利賜邸　寛政呈譜ニ、

幸成〇從五位大藏少輔。初名石之助。藤藏。雅樂介。〇青山。

同年〇寛永十八年。冬、嫡子大膳亮〇幸利。御前に被召出、池田出雲守〇長常。上ケ屋鋪被下之旨蒙仰。

土井利勝筆蹟　原寸　竪一尺四分五厘。横一尺二寸一分。

伯爵　伊達家所藏

一同年〇寛永十八年。之秋、西久保土手御普請奉行信濃守〇永井尚政。被仰付、相勤申ハ夏

附記　主殺處刑

〔附記〕主殺處刑

七日〇寛永十八年十二月〇中略。さきに書院番内藤四郎左衛門か家僕二人、主を殺害して亡命せしかば、きびしく追捕せられ、府内を引廻して後、日本橋に於て數日の間竹鋸をもて首を引き切らしめ、保人もかの賊追せしとき、送り行きしにより、同罪ニ處せられ、賊父兄弟保人の妻子、すべて十人、淺草に於て磔に行はる

青山幸利賜邸

土井利勝賜邸

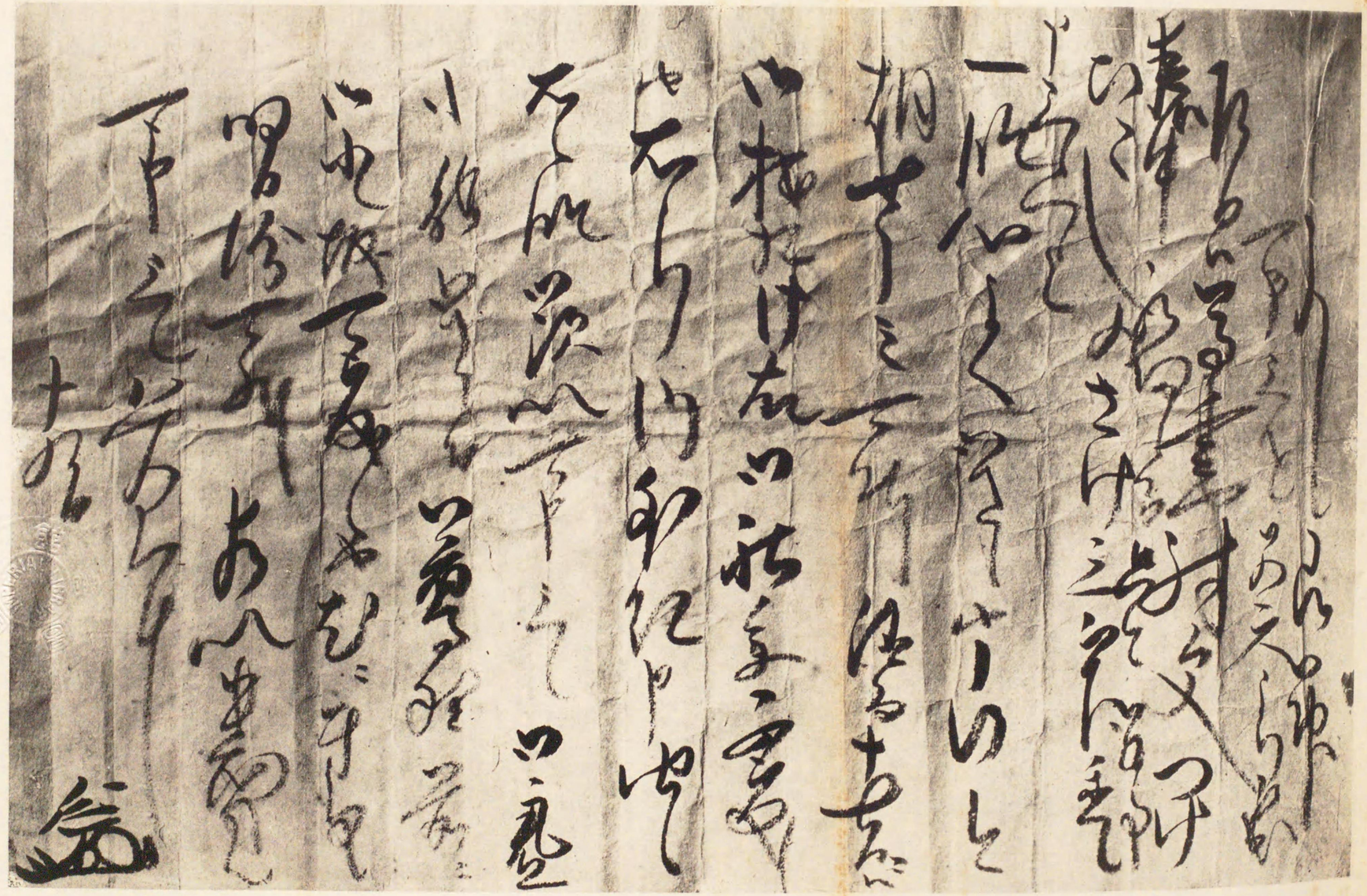
冬〇寛永十八年(紀元二三〇一年)。尼崎〇攝津國。城主青山幸成〇大藏少輔。嫡子幸利〇大膳亮。前松山〇備中國。城主池田長常〇出雲守。上屋鋪ヲ賜フ。〇寛政呈譜。古河〇下總國。城主土井利勝〇大炊頭。ノ谷藏屋鋪〇市内日本橋區。ヲ賜フ、亦是年〇寛永十八年(紀元二三〇一年)。ニ在リ。〇開府以降舊藩賜邸調。子爵土井家同答。僧天海モ屋鋪ヲ賜フ。〇東叡山開山慈眼大師傳記。

天海賜宅

青山幸利賜邸事蹟

青山幸利賜邸　寛政呈譜ニ、

幸成〇從五位大藏少輔。初名石之助。[illegible]



但、是迄大手御門前龍ノ口之屋鋪罷在し。右屋敷被二下置一し。年月不二相知一。

池田長常（大猷院殿御實紀「政豐」。ハ、是年九月六日卒シ嗣無クシテ家絶エシ者、即チ——寛政呈譜

六日（○寛永十八年九月○中略。）備中國松山城主池田出雲守政豐卒す。嗣子なければ、封地六萬五千石收公せらる。此政豐は、故備中守長幸が子にて、寛永九年八月廿六日家つぎ、けふ卒せしふり。——大猷院殿御實紀

長常（童名猿。出雲守從五位下○池田。）

（○上略。）十八年（○寛永。）紅葉山及び西城市谷等の石垣の普請をつとむ。九月六日卒す。年三十三。——寛政重修諸家譜

也。是時邸宅モ收公セラレタル者ナル可シ。往古江戸繪圖日比谷門內奥平大膳邸東隣ニ「池田備中」（○長幸。）ト有ル者、承應江戸圖ニ「青山大膳」（○幸利。）ト見ユル、是也。

土井利勝賜邸　正保江戸圖「土井大炊下屋敷」ト見ユ。三方入堀有リ。

華族　土井利興

屋敷名	位置	坪數	給收年月
中	蠣殼町谷藏屋鋪里俗土井堀ト云	今ノ日本橋區蠣殼町壹丁目四番地ノ內	七千八百四十五坪餘	寬永十八辛巳歲初代利勝ノトキ給リ、延享四丁卯歲六月八代利里ノトキ上ル

一、寛永十八年（利勝君時代。）谷藏屋敷拜領。

——開府以降舊藩賜邸調

天海賜宅　天海賜宅ノ事ハ上文之ヲ記ス。東叡開山慈眼大師傳記左ノ如ク記スハ、前者ニ同シキヤ否ヤヲ詳ニセス。傳ヘテ「構二居住於營中之側一」ト云ヘバ、恐ラクハ正保江戸圖紅葉山ノ北堀端ニ「大僧正」ト有ル者是ナラム歟。

——子爵土井家回答（○古河藩。）

同○寛永。十八辛巳年、家光公新構二居住於營中之側一而招二天海師一所以者何東叡山者、地勢高、風力烈傷二疎冷之侵一老體爲レ禦二冬日之氣一也。次日々進二高駕於東叡山一、欲レ需二面晤一而聞二於道一雖レ然愍二供奉之疲勞一、以修二隣好一。粤自二十一月上旬一海師初移二別業之居一、覃二同月下旬一、俄受二疾病一、不レ安レ席不レ甘レ食。家光公驚以使二諸家臣伺一氣候一。即酒井讃岐守忠勝・酒井河内守忠清・堀田加賀守正盛・松平伊豆守信綱・阿部豊後守忠秋・阿部對馬守重次・松井右衞門大夫正綱・秋元但馬守泰朝・中根壹岐守正盛等也。弗豫之中、二賜二恩顧一。不レ日而平復。雖レ然命二壹岐守正盛幷醫師久志本式部少輔常尹一、更侍二護尊候一。仍至二翌年正月一、海師有二根本大師異朝而相承前唐院一箱一、以授二于家光公一。維時同十九壬午年十一月十七日癸丑也。抑此一箱者、叡嶺中堂側有二慈覺大師坊室一、名曰二前唐院一。根本大師異朝而稟二承道邃行滿二師深旨一、筆記將來、有二十襲而以珍祕箱三十合一、是其節第一也。台家法寶都歸二于此中一而已。有二根本大師自筆卷物一、是唯授二一人之箱一也。此故人皆聞レ名不レ見二其實一。問曰、此箱者師資相承之珍祕、法中而傳受來、奚爲今奉レ授二于家光公一乎。海師答曰、佛法相承、不レ依二繩素一、只任二道之所一至、而以事付囑、初漢非レ無二其例一、家光公志二慕佛法一、當今沙門誰敢出二其右一乎、何況於二俗士一乎、偏準二于東照宮一、欲レ窮二台家奧祕一。其法鋒也朝磨夕淬、非二庸人之所一企及一。吾今以二一箱一而授二于家光公一、若要レ知二此例一、東陽大士者彌勒之化身、而獨依二佛經一發二明一心三觀之玄旨一、仍以此所傳之三觀一爲二根本一、師資稟承、且復於二我朝一有二其例一。萩原遍行法皇者、聰明穎利、深入二佛門奧府一、此故値二于心聰法務一、發二明四箇大事略傳三箇一、然後授二台家奧府於金鑽豪海一、仍自二遍行法皇一、以來代々相承來矣、此故仰二萩原法皇一奉レ戴二于台家血脈一、謂二之法皇相承一、擧レ世知之、今又家光公任二道之所一至、以授二此奧祕一了矣。若有二後學秀發者一、何不レ獲傳受於家光公乎矣、是吾老懷之所レ希也、先レ是開二示此箱深秘一、奉レ傳二授東照宮一、仍遣二其例於家光公一而已。于レ時爲二一箱相承之賀義一。黄金三百兩御服十領檀貺。

〔附記、一〕　旗下士及醫員賜宅

荒川直客　町屋敷ヲ赤坂ニ受ク。

市街恢弘時代

人見賢知、清水瑞室、太田宗勝

岡壽元

直客（金右衛門。○荒川。）

同（○寛永。）十八辛巳年月日不知、赤坂町屋敷拜領仕ル。　——寛政呈譜

人見賢知、清水瑞室、太田宗勝　宅地ヲ賜フ。

六日（○寛永十八年九月○中略。）兒醫人見玄德賢知、清水龜庵瑞室、太田治兵衛宗勝、采邑宅地を下さる。　——大猷院殿御實紀

岡壽元　寛永十八年十一月廿五日神田佐久間町一丁目ニ町屋敷ヲ受ク。

壽元（甫庵。叙法眼。靜隱。○岡。）

寛永十八年巳十一月廿五日新規被召出、於神田佐久間町壹丁目、町屋敷被下之。　——寛政呈譜

〔參考〕岡氏

藤原姓　岡　家紋（左三巴。五七桐。）高三百俵。

岡惣兵衛元重、備前國ニ出生、豐臣家仕、浮田家勃興之節、和泉守直家應招、右家ニ仕官、其以後、子孫代々浮田家之臣ニ罷在ル。元重三代

某（岡越前守。九郎右衛門。）

豐臣太閤朝鮮征伐之節、父共ニ至マヽ入中納言秀家ニ相從、彼國ニ渡海仕、

文祿二年父元忠死去後、遺領相續仕、老臣之職ニ加り、勤仕ル處、子細有之、浮田家退去、歸朝仕、浪人ニ而罷在ル處、古傍輩花房志摩守ト共ニ權現樣ニ被召出、兩人共祿六千石宛被下置、同樣御奉公付暫南部ニ住居仕罷在ル。後忰平內妻緣之義ニ付、存寄ニ相叶不申、平內儀、勘當仕ル處、後年ニ至り、右平內母方叔父明石掃部介全登手ニ相加り、大坂城中ニ相籠りル節、父子離別仕、籠城之始末、權現樣奉蒙御不審、元和元卯年七月三日於妙顯寺切腹。

某（岡平內）

妻緣之儀ニ付、父越前守不興受、牢浪仕、罷在ル處、母方叔父明石掃部介全登手ニ相加り、大坂城中ニ相籠り申ル。元和元卯年五月落城後、於江戶切腹仕ル。

元春（岡彌傳次。法體道和。）

浮田中納言秀家代、別ニ祿千三百石被宛行、近習小性ニ而、組子相預り勤仕ル處、慶長三戌年子細有之、浮田家退去、浪人ニ而京都ニ罷在ル所、

性質嗜二醫學一ㇾ之ニ付二法躰相改一、醫業相立罷在ㇾ處、寛永十三子年五月六日於二京都一死。

元勝　岡九郎右衞門。智庵。

父元春ト共ニ浪人仕、於二京都一法躰醫業相續、慶安二丑年三月廿五日死。

元安　岡九郎吉。五郎左衞門。道詮。

醫業好不レ申ㇾ之ニ付、父智庵死去後備中國都宇郡早島ゟ引移、浪人ニゟ罷在ㇾ處、享保十三申年九月四日死。

壽元　元春二男　岡甫庵。隱居　靜隱。

兄智庵元勝悴元安醫業好下レ申ㇾ之ニ付、壽元儀、兄元勝養子ニ罷成、醫業相續、寛永十八巳年十一月廿五日被二召出一、御切米三百俵、御側御奉公、承應元辰年十二月十八日法眼、天和元酉年十二月廿六日隱居、元祿七戌年七月十八日死。八十七歲。淺草桃林寺ニ葬。嚴有院樣御筆御歌之物幷御畫山水之圖拜領。

壽益　岡甫庵。五郎吉。道渓。

延寶元丑年十二月廿四日初見、天和元酉年十二月廿六日家督寄合。貞享元子年十月十六日御側御奉公、甫庵ゟ申ㇾ處、余語古庵ト紛ㇾ間、改名仕ㇾ樣上意ヲ以道渓ゟ改。元祿四未年九月廿八日御追放。同五申年五月九日追放御免。同十三辰年十二月朔日月並之御禮御目見。寶永六丑年四月朔日鍋松樣御誕生御用。同年七月十二日御切米三百俵被二下置一、御側御奉公御赴。正德二辰年十二月十八日法眼。同五未年九月十九日御側御奉公御免、寄合。寬保四亥年八月廿八日長福樣小次郎樣奉レ伺御機嫌能被レ遊二御座一ㇾ之ニ付、御番料貳百俵。同五子年二月廿八日御側御奉公。同六丑年十二月十一日御番料貳百俵御加增被レ下、都合四百俵。同九辰年正月廿八日隱居、御番料四百俵隱居料。元文二巳年正月廿一日死。八十四歲。淺草桃林寺葬。

壽益編集之書

痘疹要本　十二冊。

本草附方撮要　十冊。

右二部草稿之儘今以傳來。

壽愿　岡甫庵。快愿。五郎吉。

寶永五子年養子。同六丑年十月十三日初見。享保六年十二月朔日竹姬君樣御病用被仰付。同九辰年正月廿八日家督寄合。同十三申年四月十二日日光御社參御供。同年十二月七日天英院樣附。同十五戌年十二月廿一日法眼。同十七子年十二月廿五日西丸御廣敷御用。同十八丑年九月三日瑞春院樣御病用。同年九月十日西丸御廉中樣御匙。同十九寅年正月十五日西丸奥醫師。元文二巳年四月四日西丸ニ而御誕生掛。元文四未年六月十九日竹千代樣御附。同年七月十一日月光院樣御用。延享二丑年正月十五日萬次郎樣御誕生御用。寶曆元未年十月七日年寄ゟ間、思召を以泊御番御免。同四戌年十月十九日浚明院樣御筆、御農之圖拜領。同六子年六月三日數年出精、老年迄相勤ゟニ付、御番御免、勝手次第折〻御機嫌伺可罷出之旨。此度結構之思召被仰出ゟ上を、此以後隱居等相願ゟ儀無用之事ニゟ旨被仰出ゟ。同九卯年九月二日死。八十三歳。同寺。

壽明　實淚人國宗瑞子。德門奥忠男。岡智庵。多門。

享保十巳年九月五日養子。同十一午年八月七日初見。元文二巳年六月廿三日死。三十六歳。同寺。

壽精　岡道溪。五郎吉。在錄甫庵。

元文二年八月三日次男惣領。寬延二巳年三月十五日初見。寶曆元未年十一月廿七日月光院樣御伺。同三酉年五月十五日奥勤見習、年〻金五十兩拜領。同七年十二月十四日西丸御廣敷御用。同八寅年十月九日死。二十五歳。同寺。

壽考　實吉田墓安法印宗甄五男。岡甫庵。孝悅。孝五郎。

寶曆九卯年三月廿日養子。同年十二月六日家督。同十二午年十二月十四日御廣敷御用。同月晦日寄合。明和六丑年十一月九日西丸奥御醫師。同月十日萬壽姬樣御用。同年十二月十八日法眼。安永二巳年二月十九日萬壽姬樣御藥可差上旨。同四未年十一月七日種姬樣御用。同八亥年

四月十八日御本丸奥御醫師。天明元丑年五月廿八日西丸勤。同六午年閏十月七日御本丸。寛政元酉年三月廿五日淑姫様御伺御用。同二戌年七月十九日瓊岸院殿御誕生御用。同四年五月二日孝順院殿御誕生御用。同年七月十九日孝順院殿御附。同五丑年九月十五日若君様附。同六寅年三月十五日奥御醫師御免、寄合。同八辰年四月十九日隱居。

壽延 實内田玄勝正啓男 岡道溪。藤三郎。

安永五申年九月廿六日養子。同六酉年十月廿六日死。十七歳。同寺。

道周 實浪人遠山右膳延將男 岡壽庵。將曹。 高三百俵

天明七未年七月九日養子。寛政二戌年九月三日初見。同八辰年四月十九日家督。同十一未年八月六日醫業出精一段之事ニ𪜈、猶又可致出精。

——醫官家譜

附記、二 松浦氏蓬萊園

〔附記、二〕松浦氏蓬萊園

隆信 松浦壹岐守。從五位下。初名信。初肥前守。

隆信 ○松浦。嘗創一莊於淺草。今我邸在淺草元鳥越者即是也。

市街起立轉移

市街起立轉移事蹟

神田佐久間町

神田佐久間町壹丁目

一、淺草向柳原邸ニ現存スル蓬萊園ハ、寛永辛巳歳○十八年。松浦壹岐守隆信退居之志ヲ抱キ、僧江月・小堀宗甫等ト相謀リ、山ヲ築キ池ヲ鑿リ、流ヲ引キ樹ヲ植ヘ、茅舍ヲ構ヘ、向東庵ト名ツケ、以テ燕息ノ所トナス○下略。

——松浦家譜 ○平戸藩。

——伯爵松浦家回答

是年○寛永十八年(紀元二三〇一年)。市街ノ起立轉移シタル者若干有リ。○文政町方書上。文政寺社書上。

市街起立轉移 寛永十八年起立轉移ノ市街若干有リ。

神田佐久間町 起立寛永十八年也。

神田佐久間町壹丁目

一、町名起立之譯、聢ら不相分𪜈得共、往古ゟ武州豐島郡峽田領之内、村名不相分、其後追々町並ニ相成、町屋取建𪜈義ニ可有之、年月等相分り不申𪜈得共、町内中程横町ゟ東之方町屋儀ゟ、寛永十八巳年中大火御座𪜈ニ付、諸材木炭薪等迄燒失仕、御用等御手支御座𪜈由、其上所〻町中ニ材木之類高積仕置𪜈由ニ𪜈、御詮議之上、河岸附ニ𪜈諸材木炭薪等商賣仕𪜈。當所幷同所久右衞門町、日本橋邊本材木町、三十間堀、本八町堀邊、都合三十五ヶ町之町人共、御評定所

ゐ被二召出一深川木置場ニおゐて屋敷被二下置一ゐ旨、御老中松平伊豆守様〇信綱。被二仰渡一拝領屋鋪被二下置一ゐ義ニ御座ゐ。右木置場町屋敷之義ゑ、元祿十二卯年御用地ニ被二召上一、翌辰年深川末六萬坪近邊ニゐ代地被二下置一ゐ所、水附場ニゐ地形築立ゐ儀も相成兼、其上翌巳年八月中大水ニゐ外ケ輪波除堤破損仕、修覆可レ仕段、被二仰付一ゐ得共、尚以町人共不レ及二自力一段申上ゐ得ゑ、先代地差上ゐ様ニ町奉行松前伊豆守様被二仰渡一、無二是非一差上、追〻水附ニゐ無之場所折ヲ以奉レ願度旨ニ御座ゐ間、寛永十八巳年以前ゟ町屋ニ相成居ゐ儀ニ御座ゐ。

但、右木置場之義、當時東之方ゑ深川寺町通り西側町ニ、西之方ゑ大川端深川清住町、同所佐賀町裏通、南之方ゑ同所中島町邊、北之方ゑ同所材木町通邊。〇中略。

一、町内河岸通町屋之儀ゑ、里俗河岸通ゟ相唱、且又中横町ゟ西之方ゑ新町ゟ相唱、代地被二下置一、裏通切地河岸通り元地ニゐ御割替被二成下一ゐ殘之分を、里俗殘地ゟ相唱申ゐ。且又河岸通り新町ゟ唱ゐ場所とも、町〻材木渡世仲ケ間ニゐゑ神田材木町ゟ申來ゐ。右ゑ御城御普請ニ付、慶長九辰年中國〻ゟ被二召出一、御材木伐出し御用同年三月廿五日被二仰付一ゐ所、大御用ニ付御免之儀奉レ願ゐ得共、御聞濟無二御座一ゐニ付、同年八月廿七日御請仕、同十一午年御成就迄無二滯御用相勤ゐニ付、當時本材木町之所ニ其砌一同罷在、材木商賣仕、同年ゟ延寶元丑年迄六十八ケ年之間、問屋仲買之無二差別一商賣致來ゐ處、山方ゟ遣しゐ金子之義ニ付及二出入一ニゐ所、山方を相働ゐもの共ゑ問屋ニ相成、御府内ニ罷在御屋敷方御出入等も出來致ゐもの共ゑ仲買ニ相成ゐ旨取極、和熟仕、出入相濟、右仲買共、本材木町組、南茅場町組、新材木町組、神田材木町組、三十間堀組、都合五組ニ相定、其後益〻御府内御繁榮ニ付仲買之義も所〻ニ相增申ゐ義ニあ、古ゟ神田材木町ゟ相唱申ゐ。

御内家持
森川五郎右衞門

右先祖五郎右衞門儀ゑ、攝津國郡不レ知伏見出生ニゐ御座ゐ所、御當地御繁榮ニ付、寛永年中罷出、當町ニ住居仕、其砌ゟ材木商賣相始、追〻手廣ニ相成、寛文九酉年三月十三日地面買請罷在ゐ所、寛政元子年十二月七日父五郎右衞門儀、初鹿野河内守様御番所ゟ被二召出一、御勘定所御用達被二仰付一、御扶持方三人扶持被二下置一、肩衣御免、町御會所相勤居ゐ所、同四子年六月三日於御勘定所ニ苗字御免ニ相成、同九巳年三月中當五郎右衞門幼名長次郎義、御同所見習勤被二

仰付、父子一同相勤罷在ル所、文化四卯年五月六日御勘定所ヲ被召出、永々苗字御免被仰付ル所、文化十三子年閏八月中父五郎右衛門義病死仕、同年十二月中同人跡御勘定所御用達被仰付、三人扶持引續被下置、同十四丑年五月中五郎右衛門ヲ改名仕ル。然ル所同人悴長次郎義、當亥三月二日御同所見習勤被仰付ル。當五郎右衛門迄連綿ヲ七代相續罷在ル儀ニ御座ル。

但、古書付古器物等取調ル所、無御座ル。

町内德兵衛店

久兵衛

右先祖中村宗左衛門儀ハ、河内國高安郡之内出生ニヲ、寛永年中御當地ヲ罷出、當町ニ住居仕ル所、其頃京都御普請御座ルニ付上京仕、右御普請御材木類山方ヲ伐出し御請負御用樣子も存居ルニ付相勤ル由、其外所々御普請御請負仕ル旨申傳。其後同人悴宗左衛門義、河内屋久兵衛ヲ相改、當町ニヲ正保二酉年中ヨリ材木商賣相始、引續當久兵衛迄、連綿ヲ七代相續罷在ル儀ニ御座ル。

但、古書付古器物等取調ル所、無御座ル。

神田佐久間町貳丁目

一、町名起立之譯、聞ヲ不申相分ル得共、同所一丁目ニヲ申上ル通、往古ヨリ武州豐島郡峽田領之由、村名不申相分。其後追々町並ニ相成、町屋取建ル儀ニ可有之、年月等相分不申ル得共、同所一丁目ニヲ寛永十八巳年木置場拜領仕ル儀有之、一丁目ヨリ相唱ル上ヲ、二丁目ヨリ申町屋も其以前ヨリ有之ル儀ニ御座ル。

神田佐久間町三丁目

一、右町起立之年代幷ニ町名之起相分不申、往古ヨリ武州豐島郡峽田領之由申傳ル得共、村名等聞ヲ相知兼申ル。尤古町ニヲ、表間口東西ヲ京間五十九間二尺五寸三分、裏行同南北二十間有之ル町家ニヲ、重キ御祝儀之節ヲ、御能拜見被仰付ル義ニ御座ル。

神田佐久間町四丁目殘地

一、右町起立之年代幷町名之起相分不申、往古ヨリ武州豐島郡峽田領之由申傳ル得共、村名等聞ヲ相知兼申ル。尤古町ニヲ、同町三丁目地續ニ有之ル、東西ヲ表間口京間拾三間、往還ヲ隔同四拾七間、都合惣小間六拾間裏行同貳拾間有之ル、河岸付町屋ニヲ、重キ御祝儀之節ヲ、御能拜見被仰付ル義ニ御座ル。

神田佐久間町元地

一、右町起立之年代幷町名之起相分不申、往古ヨリ武州豐島郡峽田領之由申傳

ゝ得共、村名等聢と相知兼申ゝ。尤古町ニ有レ之、同三町目地續ニ而、東西ゟ表京間六十間有レ之、往還を隔西之方同拾三間、東之方同四拾七間裏行同貳拾間有レ之、河岸付町屋ニ而、重キ御祝儀之節ハ、御能拜見被二仰付一ゝ義ニ御座ゝ。

――文政町方書上

〔參考〕府内備考云フ、

一、事蹟合考云、佐久間といふは、御入國以前より江戸下宿の間屋まて、代々大傳馬町ゟ住そ、名主平八といふものまして、當て町年寄といふものまゝゟそ。今は家斷絶あり、佐久間の住居ハ大傳馬町まて無レ之、佐久間町、今お玉ゟ池といふ所則住居の地ありと。されに據れと、當町〇神田佐久間町。ハ昔神田川内ゟ在しを、後年外へ移されしと見へたり。土人ハ寛永八年類燒の時、材木等の置場の燒たる事ありしを以て、始より當所ゟ置れし如く傳ふるハ、恐くハ誤あるへし。たゝ材木等の置場のみ古より在しにゟらそや。

神田久右衛門町　寛永十八年起立ス。

神田久右衛門町壹丁目藏地

同所同町貳丁目藏地

〇上略。元和二丙辰年中、久右衛門ゟ申者草創人ニ而町屋敷ニ相成、〇中略。寛永十八年中大火御座ゝニ付諸材木炭薪等迄燒失仕、御用等御差支之儀も御座ゝ由、其上所々町中ニ材木類高積仕置ゝ由ニ而、御詮議之上、河岸付ニ而諸材木炭薪等商賣仕ゝもの共、住居致ゝ久右衛門町壹丁目、幷日本橋邊本材木町、三拾間堀本八町堀邊、都合三拾五ヶ町之町人共御評定所ゟ被二召出一、深川木置場ニおゐて揚場屋敷被二下置一ゝ旨、御老中松平伊豆守殿被二仰渡一、拜領屋敷被二下置一ゝ儀ニ御座ゝ。〇下略。

――文政町方書上〇神田久右衛門町壹丁目藏地、同貳丁目藏地書上。

兼房町　町内一部ヲ收公セラル。

兼房町〇芝。

一、町方起立年代

右ゟ御入國後幸橋御門外ニ而、名主平十郎先祖平左衛門草創仕、兼房町ゟ相唱ゝ得共、何故右町名相唱ゝ哉書留申傳等無レ之、相知不レ申ゝ。其後寛永十八年正月十九日火事以後、當町之内表間口七間、裏幅同斷、裏行拾八間之處御火除御用地ニ被二召上一、代地ゟ不レ被二下置一ゝ。〇下略。

一、草分人之儀

右ゟ名主平十郎草創ニ而、由緒之儀、御入國後幸橋御門外ニ而兼房町壹町被下置、名主平左衞門ゟ申者名主役相勤、寛永四年十一月十一日死去仕、當時迄十一代名主役相勤相續仕ハ、右町内壹町名主平左衞門江被下置、名主役相勤ハゟ申儀ゟ、御入國後土井大炊頭様ゟ被仰立ハ趣ニ而、先年より唯今以正月四日ニ年々大炊頭様江御目見被仰付、年頭御禮申上ハ儀ニ御座ハ。且又町内之儀ハ、地主拾五人所持地面ニ相成、何年之頃地主ともに追々相讓ハゟ申儀、相分不申ハ得共、幸橋御門外ニ而名主平左衞門所持地面之内、表間口七間、裏幅同斷、裏行貳拾八間之處、寛永十八年正月廿九日火事以後火除御用地ニ被召上ハニ付、外ニ自分地面之内ニ而下水致置ハゟ申儀、沽券控帳面ニ書留有之、寶永七寅年繪圖面ニ茂自分下水ゟ書上ハ趣、是又書留有之、且又兼房町之内ニ而、表間口京間五間、裏幅同斷、裏行拾四間貳尺之地所、是ゟ草創代々所持仕、名主役相勤罷在ハ處、苗字之儀ゟ先年ゟ兼房町ニ而兼房ゟ申ハ得共、是ゟ私ニ相唱ハ儀ゟ奉存ハ。然ル處寛政六寅年正月中町内類燒後、兼房町外七ヶ町、幸橋御門外より虎之御門外迄町家八ヶ町御火除御用地ニ被召上、同所續

泉岳寺門前

御武家方上ヶ地之内ニ而、元坪ニ六分壹厘餘之積りを以增坪共、代地被下置ハ。當時兼房町之内ニ而、表間口京間五間貳尺七寸七分五厘、裏幅同斷、裏行同拾四間之地所、沽券狀無之所持仕、名主平十郎儀名主役相勤罷在ハ。

但、名主平十郎代々所持仕ハ手水鉢有之、右品持傳江ハ譯柄之儀ゟ、承應之頃來舶致ハ南蠻人を世話仕ハ事有之ハ而、八官ゟ申者ゟ貰受ハ由。右品ゟ唐銅ニ而、深キ擂鉢様之物ニ有之ハ。其外先祖ゟ持傳ハ物有之ハ得共、類燒之度燒失致、右鉢計ゟ類燒之度々井之内或ハ堀之内等ニ有之、燒殘ハ由。右銅色古雅之物ニハ得ゟ、他家江讓遣ハ得共、又々家内江戻りハ由ニ而、今以持傳罷在ハ。

——文政町方書上

泉岳寺門前　是年〇寛永十八年。ヲ以テ起立ス。

泉岳寺門前

一、當門前之儀ハ、慶長十七子年中泉岳寺開山宗關和尚櫻田ニ於而寺地拜領仕ハ處、寛永十八巳年正月中橋桶町より出火之節類燒仕ハ跡、御用地ニ被召上、爲替地當所拜領仕ハ。門前起立之儀も、右同時ニ御座ハ。往古ハ寺社御奉行所御支配ニ御座ハ處、延享二丑年閏十二月中町御奉行御支配ニ相成申ハ。且

又當門前往古ハ名主御座ㇱ處、中比月行事持ヨ相成、其後二十五ヶ年以前文化元子年十二月中、町御奉行小田切土佐守樣、根岸肥前守樣御勤役中奉レ願、芝車町名主四郎右衞門へ支配付被二仰付一ㇱ。

一、町内北門前西側、南北へ表二十一間半餘、裏幅同斷、東西へ奥行北之方五間餘、南之方十二間餘。同東側南北へ表三十六間半、東西へ奥行北之方八間、南之方四間。南門前西側、南北へ表四十九間餘、裏幅同斷、東西へ奥行北之方三間、南之方十八間。

一、四隣　東之方泉岳寺。西之方同。南之方如來寺。北之方田中惣右衞門樣御屋敷下高輪之内百姓地。

一、切通　道幅凡五間。

右ハ寬永十九午年中大猷院樣（徳川家光。）御鷹野之節、泉岳寺へ御立寄被レ爲レ遊、四代目住僧御目見被二仰付一、依二上意一前山拜領被二仰付一ㇱ。其節丹羽左京大夫樣水谷伊勢守樣御手傳ニヲ切通ニ相成ㇱ。

一、觀音堂

右ハ寬永十八巳年中泉岳寺起立之節ヨリ當門前ニ有之、往古ヨ地中功雲院持ニヲ宗旨不二相定一諸家之僧堂官仕ㇱ處、天明元丑年ヨリ本山修驗之僧守ニ相成當地引接院智觀と申修驗守護致罷在ㇱ。

聖護院宮御末
本山修驗　引接院

一、

右前書觀音別當仕罷在ㇱ。

——府内備考

大圓寺門前　寺院轉移ノ時ヨリ起立スト云フ。

本寺牛込保善寺末
芝伊皿子
禪曹洞派　泉谷山　大圓寺（○中略。）

一、門前町屋　間口壹間半、奥行五間。

右ハ寬永十八年當所ヲ轉地仕ㇱ節ヨ起立仕ㇱ趣、御掛寺社御奉行之義ヨ、相知不レ申ㇱ。

——文政寺社書上

赤坂新町壹貳町目　前年及今年ニ町屋ス。

福壽院門前　寬永十八年起立。

本寺四ツ谷南寺町法輪山勝興寺末
麹町十三町目
曹洞宗　祥雲山　福壽院

一、境内幷南門前町地其外御替地壹ヶ所、此外不淨地壹ヶ所、以上五ヶ所。（○中略。）

一、南門前地麹町十三丁目西角、壹ヶ所。表間口京間ニて六間五尺。裏間口京間ニて六間二尺八寸。裏行京間ニて四間五寸。裏間口京間ニある拾八間四尺。
此坪數百貳拾四坪七合五勺。

一、右同斷同所東角壹ヶ所。表間口京間ニて五間四尺八寸。裏間口京間ニある貳拾間六尺。此坪數百
貳拾坪六合。

一、右境内之義、天正十九辛卯年之頃拜領被仰付候趣之申傳ニ御座候。然所其
後寛永十八辛巳年町御奉行所ゟ奉願、門前地所町家ニ取建候趣ニある、只今以
右地面御町支配ニ御座候。

但シ門前町屋幷御替地之分共、福壽院門前と町名ニハ唱不申候。

——文政寺社書上

榮順比丘尼拜領地　傳フ、

市ヶ谷甲良屋敷

一、當町往古ゟ、武州豊島郡野方領市谷村之内ニ有之候由。寛永十八辛巳年中
加州清泰院様御局榮順比丘尼拜領被致、其頃御支配相極り不申、百姓町家出
入等有之候節ゟ、萬事御評定所ゟ申置候由。然ル處其後年代不知町並御支配
請申度段、御役名不知板倉市正様を以、右榮順尼被相願候處、御姓名不知、其節
御老中様ゟ御代官野村彦太夫様ゟ御支配被仰付候由。然ル處淨土宗京都淨
華院了秀和尚ゟ相譲り申度段、寛文四辰年中右榮順尼ゟ被相願候得ゟ、願之
通被仰付候旨、御役名不知土屋對馬守様被仰渡、了秀所持致候處、其後元祿十
三庚辰年、右了秀由緒有之、御作事大棟梁甲良豊前ゟ相譲申度候段、屋敷御改
前島勘三郎様、加藤太郎左衛門様相願候處、願之通豊前ゟ相譲候様、阿部豊後
守様被仰渡、豊前所持仕候。〇下略。

同町地守山田屋
酒商賣　七兵衛　當亥五十七歳

右之者元祖甚右衛門義、清泰院様御局榮順尼由緒之者ニ有之、清泰院様五歳
相勤候由。然ル處清泰院様御局榮順尼、寛永十八辛巳年中當町拜領ニ付、其頃
ゟ爲地守當町ニ住居仕、當七兵衛迄九百八十七年、當所ニ地守ニある住居仕候
者ニ御座候。

——文政寺社書上

雜司谷町　自證院領ト爲ル。文政町方書上云フ。

雜司谷町

一町名起り之儀、元來地名ニある雜司谷村ゟ相唱候。右ゟ往古禁中雜式相勤居
候柳下若狹・戸張平司左衛門・長島内匠抔申者、南朝ニ相勤居候處、流浪仕、當所
市街鞅弘時代

江參り住居仕ル由ニ而、雜式谷ヶ相唱ル由。右之家筋、當時當村方百姓ニ殘り居ル。然ル處其後文字之儀も區々ニ而、藏主ヶ谷、僧司谷、曾子ヶ谷抔、向々相認ル處、有德院樣御成之節、文字區々ニ而及混雜ル間、右混雜之雜之字相用可申旨、上意有之ル由申傳ル得共、慥成義無御座ル。且當町之義ヲ、寛永十八巳年中大猷院樣御裏方尾州千代姫君樣御母堂自證院樣御靈屋領としゐ、市谷自證院領ニ相成申ル。〇中略。

一、名主平次左衞門先祖之義ヲ、往古禁中雜式相勤罷在ル由、本苗田口ヶ申ル處、建武年中江州堅田浦ニ而戰功有之、禁中ゟ瓜之紋付ル錦之幌（トハリ）拜領仕ル由ニ而、苗字を幌ヶ相改、瓜を家之紋ニ仕ル由。其後又戸張ヶ世俗之文字ニ書改ル由、申傳へ御座ル。且苗字之儀ヲ、往古ゟ名乘來ル哉、寛永十酉年御撿地之節御水帳ニもとヲりヶ假名ニ而苗字御記被置ル。此御水帳只今以平次左衞門方ニ所持仕罷在ル。

但、同人方ニ所持仕ル武器等之義ヲ、先達而御調之節書上御改相濟申ル。

一、同人先祖平司左衞門法名卒年月之儀ヲ、

文安元甲子年五月二日
後榮祥瑞禪定門　俗名幌平司左衞門藤原基賢

本所吉岡町貳町目

右之通御座ル得共、禁中相勤ル平司左衞門ゟ三代程後之者之由申傳、當地致草創ル平司左衞門法名年月等相分り不申、且地頭自證院江書出ル由緒書等ニヲ、寛永十酉年中名主役被仰付ル平次左衞門ヲ先祖ニ相認申ル。此平次左衞門法名之義ヲ、

寛文五乙巳年八月十一日
德善院一叔日淨居士　俗名戸張平次左衞門基春

本所吉岡町貳町目　町屋鋪拜領者有リ。

本所吉岡町貳丁目

一、町屋鋪拜領人名前左之通。〇節一。

一、百坪

蓮池御金藏番
黑川龜五郎

右ハ寛永十八巳年先祖黑川作左衞門拜領仕ル。　――文政町方書上

〔參考〕　參考落穗集是頃ニ於ケル淺草下谷區ノ狀況ヲ記ス。言フ、

正德の末、原安適語て云く、我等父原太郎右衞門といふもの、淺草寺燒亡の後、境內諸木世話いゐし植へルと云ゝ。今の世繁茂し侍る榎さいゐちミづき等の雜木、悉くゝの人請ゝひ植ルもの也。今の淺草寺風神雷神の像左右ゟ安置ル門、俗ゟゝミなり門といふハ、遙後の新造也。むゝしハ今の山門ゟ、

町計前、右の方の道、東北のとつれ竹門といふもなしに、尋常の往還の海道也。さまハ今も武士馬上にて通る也。依之馬道といふ。

淺草寺門前の土人とも語りつゝへて云、昔ハ霞ヶ關及平川町の方より觀音門前馬次ぎにて、尤皆旅宿町也。今存生の六地藏石燈籠、往古よりの馬駕籠の立場也。されと今もこの門前、淺草海苔を商ふ。並の家々、悉く十二月十八日の市に、上總下總常陸相摸當國より參詣する旅人の宿を貸す也。かの市ゑ、昔よりは大市なりといふ。尤古來ハ、毎月三八の市、此所にたちはとなり。

古老曰、今の並木町といふハ、大猷公の末迄ゑ、並木にて、その並木の間〳〵にはにふこれありて、その窓より草履草鞋を出してゐとなみ居たる程なりと云々。

關渭水といひし施針醫東歷といふ常憲公文昭公の御代の御針醫の弟子は、元來土方丹後守家老役勤たりし武士なりしが、享保の始、六拾有餘なりし翁さり。語て曰、大猷公の御代の後迄ゑ、淺草寺今神鳴門の立は所より東叡山の岸際まて、芦一面に繁りは谷にて、一眼に見へはこ見は内に、あのとくの繁華になりはと云々。

附記、一　鷹匠町

〔附記、一〕鷹匠町

武江年表ニ左ノ如ク記ス、何ノ據ル所有ルヲ知ラス。

寛永十八年辛巳

三崎村を鷹匠町と號ほ。元祿六酉年又改て小川町といふ。

附記、二　江戸川鑿開

〔附記、二〕江戸川鑿開

利根川ノ水、島川筋若クハ權現堂川筋ヲ流レ、島川ヲ合セ、所謂庄内古川筋ヲ南下シテ、葛東葛西ノ境ヲ劃シタルコト有ル可シト思ハルヽハ、既ニ之ヲ記ス。然ルニ寛永十八年、幕府ハ關宿江戸町ヨリ新川ヲ鑿開シテ今上ニ至リ、尋テ逆川ヲ疏濬シ、上宇和田ノ放水路ヲ塞ク。是レ實ニ今ノ江戸川也。關宿舊記之ヲ寛永十二年ノ事トス。孰カ是ナルヲ知ラス。姑ク下總舊事考ニ從フ。

利根川〇中略。寛永十八年、自權現堂川下流江川、經元町、過寶珠花、至金杉、疏新川、塞上宇和田故道。享保十三年自今上至深井新田、疏新川一里半餘。塞金杉故道。

——下總舊事考

江戸川〇中略。按ニ本川類聚三代格太日川ニ作リ、卷十六云大政官符應造浮橋布施屋幷置渡船事云々、下總

國太日河四艘、元二艘、加二二艘ニ云々、右川等、崖岸廣遠、不レ得レ造レ橋、仍增二件船。東鑑太井川ニ作ル。治承四年九月二十九日戊寅、江戸太郎重長依レ令與二景親一于レ今不參之間云々、彼レ遣二中四郎種重一于葛西三郎清重之許一、可レ見二太井要害之由一餞而令レ誘二引重長一云々、十月二日辛巳、武衡相二乘于常胤廣常等之舟楫一濟二太井隅田兩河一云々。仙覺萬葉集注釋布止井ト訓ス。云、葛飾郡中有二大河一云二布止井一、其川東云二葛一郡西云二葛西一郡。即其古名ナリ。新編風土記稿云、又一名ヲ文卷川ト呼ヒ、眞間國府臺ノ邊ニテガラメキ川ト云。北條五代記國府臺戰ノ條云、ガラメキノ瀨ヲ渡ル是ナリト。蓋古渡瀨川ノ下流ナリ。渡瀨川源ヲ下野ニ發シ、上野ヲ經テ再ヒ下野ニ入リ、下總古河町ノ西北ニ至リ、思川ニ會シ、東南流西葛飾郡川妻村元栗橋村小手指村江川村ヲ劃シ、關宿ニ至リ、南流今ノ中葛飾東葛飾二郡ノ間ヲ貫キ、下流ニ至リ諸水ヲ集テ漸ク巨流トナリ、太井川ト稱ス。後利根川ヲ導キ、佐波村ヨリ八甫村ニ至リ、更ニ東南ニ疏鑿シテ中葛飾郡金杉村ニ至リ、本川ニ注キ、始テ新利根川ト稱ス。元和七年辛酉伊奈忠治佐波村ヨリ栗橋ニ至ルマテヲ鑿開スルニ及ヒ、利根川ノ本流始テ渡瀨川ノ水ニ合シテ本川ニ注ク。寛永十八年辛巳忠治又栗橋ノ東西葛飾郡川妻村ノ南ヨリ元栗橋古城墟ヲ鑿開シ、北葛飾郡下宇和田村ニ至リ、八甫ヨリ來ル支流ニ會シ、以テ本川ニ注カシム。是ヲ權現堂川ト稱ス。渡瀨川ノ水亦南シテ多ク權現堂川ニ注ク

ヲ以テ、其舊道、川妻村ヨリ江川村ニ至ル者ハ淺淤スルニ因リ、小手指村ニ於テ之ヲ塞キ、更ニ細流ヲ川妻村ノ東ニ鑿チ、北流シテ西葛飾郡前林村ノ沼地ニ注カシム。是ヲ佐伯渠ト云。故ニ小手指村以東ハ潴シテ沼池トナル。（正保圖江川村山王村間ノ沼是ナリ。○中略。）然ルニ下宇和田村ヨリ南流太井川ニ注ク者、亦泥沙日ニ堆積シ、流通ヲ滯スルヲ以テ、更ニ下宇和田村ヨリ東ヲ新鑿シ一支ハ中葛飾郡中島村ヨリ南流總新田ニ至リ、再ヒ本川ニ入リ、一支ハ東流シ、江川村ト關宿町ノ間ニ至リ、渡瀨川ノ舊流ニ合シ、又關宿西ノ溝池ヲ鑿開シ、關宿江戸崎ヨリ臺町ニ至リ、前林村沼池ノ下流ヲ引キ、之ニ會流セシム。即逆川水路ナリ。又太井川ノ上流ヲ疏濬シ、寶珠花金野井諸村ヲ過キ、金杉村ニ至リ、以テ利根川ノ本流トナス。故ニ是ヲ利根川ト稱シ、（正保圖元祿圖共ニ記シテ、利根川トナス。）又新川ト云ヒ、太井川ノ名ハ、自ラ消滅シテ、人之ヲ稱セサルニ至ル。後下宇和田村中島村等ニ堤塘ヲ築キ、其支流ノ川口ヲ塞キ、本流專ラ關宿ニ注カシム。承應三年甲午伊奈忠勝赤堀川ヲ鑿チテ其本勢ヲ分チ、寬文五年乙巳關宿城主板倉重常（隱岐守。）更ニ逆川ヲ增鑿シテ赤堀川ノ水ヲ引キ、大ニ舟楫ノ便ヲ開キ、常陸川水路ヨリ直ニ本川ニ通シ、以テ江戸ニ達スルヲ得

セシム。是ニ於テ始テ江戸川ノ稱アリ。下總舊事考、利根川沿革考、關宿舊記ヲ引キ、寛文五年始テ逆川ヲ鑿開ストナス。然レトモ正保下總國圖既ニ逆川ヲ載ス。則其前ニ在ル知ル可シ。蓋寛永中伊奈忠治既ニ之ヲ開キ、寛文ニ至リ、板倉重常之ヲ增鑿シテ舟揖ヲ通セシメシナリ。

後東流鬼怒川ニ合シ、銚子港ニ注ク者ヲ以テ利根川ト稱スルニ至リ、本川專ラ江戸川ヲ以テ之ヲ呼ビ、以テ利根川ニ別ツ。

島川〇中略。本川古ヘ利根川ノ支流ニシテ、利根川ヲ川俣村ヨリ佐波村ニ疏鑿シ、高柳村ヨリ川口村ニ導クニ及ヒ、更ニ八甫村ヨリ東ニ疏鑿シ、島川村狐塚村等ヲ過キ、上宇和田村ヨリ總新田ニ至リ、南流シテ金杉村ニ至リ太井川ニ注ク。寛永十八年辛巳權現堂川ヲ鑿チ下宇和田村ニ至リ、本川ニ合ス。然ルニ是ヨリ本川ハ漸ク淺淤シ、萬治三年庚子堤ヲ八甫村ニ築キ分水口ヲ止ムルヲ以テ、別ニ一流トナリ、島川ト稱シ、下流高須賀村ヨリ外國府問村ヲ經テ權現堂村ニ至リ、權現堂川ニ入ル。享保十二年丁未水路ヲ改メ高須賀村ヨリ直ニ權現堂川ニ入リ、北埼玉郡諸村ノ惡水ヲ本川ニ注カシム。然ルニ權現堂川漲溢ノ時ハ注下ノ水ヲ遏メ、埼玉諸村水溢ノ患ヲ被ルヲ以テ、寶曆九年己卯幕府ノ吏聞某七郎右衛門。岩松某直右衛門。等相謀リ、高柳村ト北埼玉郡北大桑村間ニ堤ヲ築キ、門樋ヲ設ケ、平時惡水注下スレハ門扉自

ラ開ケテ之ヲ洩ラシ、下流逆溢ノ時ハ、門扉自ラ閉チテ患ヲ上村ニ及ハサラシム。開闔共ニ水勢ニ任セ其製頗ル巧ナリシト云。後下流漸次疏通スルヲ以テ今其門樋ヲ廢ス。

庄内古川〇中略。即利根川八甫村ヨリ東流スル者ノ下流ナリ。寛永十八年辛巳權現堂川ヲ鑿チ下宇和田村ニ至リ引テ本川ニ會セシム。尋テ亦泥沙日ニ積ムヲ以テ、更ニ權現堂川ヲ二支ニ分チ、一ハ中島村ヨリ總新田ニ至リ本川ニ入リ、一ハ關宿ニ達シ、以テ太井川ニ注キ、是ヲ新川ト稱ス。因テ本川ヲ古川ト云。正保圖古川ト記ス。後下宇和田中島村等ニ堤塘ヲ築キ權現堂川ノ道ヲ絶ス。是ニ於テ其址潴シテ陂澤トナリ、僅ニ下吉羽村等ノ養水ト合シ、小流トナル。初金杉村ニ至リ太井川ニ入ル。享保中堤ヲ金杉村下内川村ノ沿岸ニ築キ、本川水路ヲ南ニ換鑿シ、北葛飾郡加藤村ニ至リ太井川ニ注セシム。寛政十二年庚申復之ヲ塞キ、水路ヲ導キ同郡丹後村ニ至リ、太井川ニ入ル。天保中更ニ之ヲ疏通シ、又南シテ一本木ニ至リ今ノ狀ヲナス。

——武藏通志

江戸川開疏ノ事

寛永十七年（或ハ云フ十二年、又十八年ナリトモ云フ。）庚辰幕府伊奈忠治ニ命シテ江戸川開疏ノ工ヲ起サシム。（或ハ云フ、天文十五丙午新川ヲ掘ル。今之ヲ古川ト稱ス。江戸川ハ其故址ニ據ルモノナリト。）忠治關宿江戸町ヨリ今上村迄新川ヲ鑿ツ。則チ關宿番所前上口ハ幅十九間二尺ニシテ、其他今上村迄ハ、上口二十六間、敷十三間ナリ。新ニ丘陵ヲ擘開シ、工事至難ニシテ、親野井臺迄三年、同所ヨリ金野井臺迄三年、金野井ヨリ今上村迄又三年、前後九年ノ星霜ヲ費シテ工ヲ竣エタリ。之ヲ江戸川ト云フ。（關宿江戸町ヨリ起ル。以テ此名アリ。或ハ云フ、江戸通船ノ便ヲ開クヲ以テ名クト。）而シテ今上村字淺間下ヨリ南流シテ庄内古川ニ通スト雖、不便ナルヲ以テ、慶安三寅年今上村中央ヲ掘鑿シ、同四卯年ニ至リ、同村字締切堤（當時字落合ト云フ。）迄長千四百間餘ヲ開通セリ。其後享保十三申年字落合ヲ締切リ、（故ニ締切ト稱ス。）中野久木村地内ニテ堀繼キタリ。俚俗之ヲ新川ト唱フ。此享保ノ開鑿ハ、井澤爲永ノ董督ヲ以テ新川ヲ穿疏シ、舊川ヲ修拓スルカ爲メ、工費三十萬兩ヲ要シタリ。享保二十年ニ建テシ金杉村ノ新利根川重疏ノ碑（○中略。）文ニ據レハ、新川ハ今上ヨリ深井新田ニ至ル長十餘里トアリ。是ハ五町一里ナルヘキヲ以テ二里餘ノ距離ト知ルヘシ。而カモ現在ノ地圖ト合ハズ。或ハ云フ、深井新田平方新田ノ方ニ川筋ヲ變換シ、直線ナラシメシ其長千二百間幅百間ナリト。蓋シ慶安ニ今上村ノ中央ヲ掘鑿シテ新川ヲ開キシハ、古ノ太井川ノ故址ニ通センカ爲ニシテ、是レ即チ今ノ江戸川ノ水路ナリ。然レハ今上村迄ノ開疏ヲ幕府時代ニ於ケル江戸川第一期工事、今上村以南ノ工事ヲ第二期及第三期工事トモ稱シ得ヘキナリ。

逆川開鑿工事

寛文十七年伊奈忠治江戸川開疏ノ後幾許ナラスシテ逆川ヲ鑿ツ。世ニ逆川ハ寛永五年關宿城主板倉重常城池ノ内ヲ鑿開シ、關宿臺町ヨリ關宿江戸町ニ至リ、赤堀川ノ水ヲ引キ、大ニ舟楫ノ便ヲ開ケリト傳フレトモ非ナリ。正保下總國圖既ニ逆川ヲ載ス。則チ其前ニ在ルヲ知ルヘシ。蓋シ寛文ニ至リ、重常更ニ之ヲ增鑿シ、以テ舟楫ヲ容易ナラシメタルナリ。利根川沿革考ニ據レバ、寛永十八年下宇和田村新鑿、太井川ニ南流セシメタル後、又關宿城西ノ溝塹ヲ鑿開シ、江戸町ヨリ臺町ニ至リ、前林村沼地ノ下流ヲ引キ之ニ注キ、相會流セシム。即今ノ逆川ナリトアリ。則チ其寛永中ナリシコト明ナリ。

關宿棒出シ工事

江戸川ハ地勢上利根川ノ大水ヲ激注シ、沿岸ニ危害ヲ及ホス少カラサルヲ以テ、往時起工ノ年月今詳ナラスト雖、寛永十七年始メテ江戸川開鑿ノ工ヲ起シ、九年ニシテ其工成リシト云ヘハ、思フニ其頃ナラン乎。同川分派口左岸千葉縣東葛飾郡關宿町、右岸埼玉縣北葛飾郡豐岡村大字西關宿。兩岸ニ數千本ノ棒杭ヲ樹立シ、以テ大水ノ注入ヲ制禦セリ。此工ヲ稱シテ關宿棒出シ工事ト唱ヘ、利害ノ關係大ナルヲ以テ有名ナリ。然ルニ明治八年始メテ利根川改修ノ工起リ、十年本工事モ柴工ニ改メラレシニ依リ、今ヤ其名ヲ存スルモ、其工跡ヲ遺サズ。

——利根川流域治水沿革誌

船橋氏沿革考ニハ、「寛永十二年亥年權現堂川ノ下流江川村ヘ掛リ、關宿元町ノ地内ヲ過キ、寶珠花村ノ間ヨリ金杉村マテ新川ヲ掘ル。是ヨリ下ハ中古ノ古利根川ノ儘ナリ。又關宿城裏ノ横流逆川ト唱ル、板倉家城主ノ節、江戸往來通船ノ乞ニヨリテ、寛文ノ初メ城内ヲ新ニ堀割、通船セシムルモノ」云々ト見ユ。

寺社起立轉移

寺社起立轉移事蹟

寺社ノ起立轉移シタル者若干有リ。

○文政寺社書上。續府内備考。東京通志。

寺社起立轉移 寛永十八年中寺社ノ起立轉移シタル者若干也。

柴井稻荷社

柴井稻荷社 柴井町鎮守也。芝神明社地ニ移リ、末社ニ入ル。

末社十七ケ所○節一。

柴井稻荷社間口七尺。奥行一丈四尺五寸。高一丈五尺。

祭神宇迦乃御魂命 神體金幣。

勸請寛永十八年。但柴井町鎮守稻荷社。當地江移レ之故、柴井稻荷ト唱レ。

——續府内備考

天王社

天王社 寛永十一年ノ條ニ之ヲ記ス。

稻荷天王合社 四谷南寺町

社地四百八拾七坪餘。(○中略。)

天王勸請之儀ハ、寛永十八辛巳年四谷御門外明地大傳馬町助役町地ニ相成レ二付、依レ之大傳馬町之産神神田明神社地ニ有レ之レ牛頭天王を右町之産神ニ致し勸請當時里俗御假屋横町邊ニ小祠相建レ由。然ル處、追々繁昌ニ付、氏子共相談之上、寛永廿一年寺社御奉行松平出雲守殿・町御奉行石谷重藏殿江相願、御聞濟之上、同年六月十八日當稻荷合殿ニ遷座致レ。○下略。

——續府内備考

須賀神社同上（〇郷社。）

四谷區四谷須賀町ニアリ。域内五百五十壹坪。素盞嗚尊倉稻命ヲ祀ル。寛永十八年辛巳四谷門外ノ地ヲ日本橋大傳馬町助役地トナシ、傳馬町ト稱ス、因テ大傳馬町産神神田社内須賀社ヲ分祀シテ同町ニ創建シ、今里俗御假屋横町ト云。（祭日神輿ヲ此ニ移ス。〇下略。）

——東京通志

高田八幡社

高田八幡社　下戸塚村ニ起立ス。

八幡社〇武藏國豐島郡下戸塚村。穴八幡ト號ス。正八幡ナリ。神功皇后仲哀天皇ヲ合祀ス。共ニ大橋龍慶靈瑞ヲ得テ、牛込榎町ノ古榎樹ヲ以テ彫刻シ、寛永十九年四月八日多磨郡中野寶仙寺住僧秀雄開眼セル由裏銘アリ。社傳ニ云、此所古ヨリ八幡ノ小祠及ヒ阿彌陀堂アリ、年ヲ經テ荒廢シ、神木ノ老松一樹殘リシカ、寛永十三年御持弓頭松平新五左衞門直次ニ屬セシ同心ノ輩（同心居宅ハ早稻田ニアリ。）彼神木近キ所ニ的場ヲ築キシニ、其松ニ鳩三羽ツヽ宿リテ神靈影向ノ瑞アリケレハ、相謀テ同十八年石清水八幡宮ヲ勸請シ、良昌ヲシテ別當タラシム。依テ草庵ヲ造營セントテ山麓ヲ穿チケルニ、一ツノ穴アリ、人々怪シミ燈ヲ取テ內ヲ伺ヘハ銅佛ノ阿彌陀長三寸許ナルヲ得タリ。是八幡ノ本地ナレハト

テ、則神殿ニ安置シ、今ニ祕佛トスト。寛永記江戸雀等ニ載ル所モ、社傳ト大同小異アリ。同年大猷院殿御放鷹ノ時當社ヘ御立寄アリ、此年嚴有院殿御誕生アラセラレ、又別當良昌兼テ靈夢ヲ蒙リシ次第ヲ聞召サレ、殊ニ當社ヲ御崇敬アリテ、慶安元年本社以下諸堂社ニ至ルマテ悉ク御建立アリ。其時當山ノ地形ハ、加賀中納言利常寄進シ、其餘ノ諸侯旗本ノ士モ當侯以下ヲ寄附セリ。明ル二年落成シテ遷宮ノ式ヲ行ハル。コノ年嚴有院殿御參詣、其後社地ニ能舞臺ヲ作ラレ、大猷院殿成ラセラレ、能上覽有テ後ニ神事能興行アリ。役者大藏勤ム。御名代柳生但馬守〇宗矩。ニ命セラル。年經テ社頭回祿ノ後、延寶六年御再建アリ。棟札ノ文ニ、

聖主天中天　爲大檀那　征夷大將軍源家綱公御武運長久
迦陵頻伽聲
卍奉再興武州豐島郡牛込鄉光松山放生寺八幡宮一宇　御鎭守
東照宮並末社等
哀愍衆生者　御子孫蕃榮天下泰平五穀成就萬民豐樂所
我等今敬禮

寺社奉行　松平山城守　板倉石見守　太田攝津守

別當放生寺住持權大僧都宗洗

延寶六年戊午仲冬十五日　御大工棟梁　甲良豐前宗清
同助五郎宗員

後又大破ニ及ヒ、元祿十六年再ヒ御修營アリ。棟札ノ文ニ、

聖主天中天　大檀那　征夷大將軍正二位内大臣源綱吉公御武運長久御子孫繁榮所
迦陵頻伽聲　卍奉造營武州豐島郡牛込鄉戸塚村光松山放生寺八幡宮一宇華表二基
哀愍衆生者　我等今敬禮　爲天下泰平萬民豐樂軀壽堅固長保德創建

御鎭守　總營建事　從五位不但馬守藤原朝臣秋元氏喬朝
從五位下對馬守源朝臣稻垣氏重富
東照宮幷末社等護摩堂鐘樓堂神輿堂樓門舞臺寺院等

曲淵伊左衞門源重羽
竹田藤右衞門藤原政武
伊藤新左衞門藤原□□
別當權大僧都法印本如

元祿十六年未年五月吉日御普請奉行
御大工棟梁大谷甲斐藤原正矩
大谷平太夫藤原基矩

元文二年諸堂社助成ノタメ、本所松井町ニテ千五百坪ノ町屋敷ヲ賜ヒ、延享二年當社祭禮ノ時、神輿ノ旅所トシテ牛込神樂坂上ニテ二千七百十五坪ヲ拜借地ニ成給フ。此内九百二十坪ノ内千四百九十坪ハ、近キ頃御用地トナリ、殘地千五百九十五坪ハ、麹町ニテ替地ヲ給ヒ、今神樂坂上ニハ纔ニ三百坪殘レリ。又元文三年二月九日竹千代君御降誕ノ事ニヨリ、當社へ御報賽ノタメ、高田馬場ニ於テ流鏑馬御興行アリ。ソレヨリ以來御厄年及若君樣御誕生等ニハ、必當社御祈禱トシテ流鏑馬ノ式アリ。又社傳ニ、永承中源賴義安倍貞任征伐之後當國豐島郡ヘ八幡三社鎭座ノ一ナリトミエタレト、固ヨリ據トスヘキ事ナケレハ、爰ニハ載セス。例祭八月十五日、昔ハコノ邊ノ三十六ケ町ヨリ鉾練物等ヲ出シ、牛込神樂坂旅所マテ神輿ヲ渡シ、牛込御門外ニテ天下安全ノ御祈禱修行セシト云。今ハ廢レテ社地内ノミ式アリ。〇下略。

——新編武藏風土記稿

穴八幡之社勸請之事ニ付テ、承傳ヘしゐ儀有之しゐ。此地ハ元早稻田村之内ニ中島ト小名ニ呼ヒしゐ所ニ、青柳津六兵衞ト申富有農民アリ。元ハ北條家ヘ仕ケル士トイフ。此者ノ持傳ヘタル地ニテ、松樹生繁リタル山林ニテ、一木之松暗夜ニハ折々光リアリケレハ、其松ヲ光松ト名付シ由。然ルニ寬永年中秋之比、的場ヲ築しゐトテ、一ツノ穴ヲ得タリ。深キ事七八間、穴之内暗クシテ人々怪ミテ入ラス。漸松明ヲ點シテ入テ見レハ、金像佛一軀、鐘鉦一ヲ得タリ。鐘鉦ニハ、文字彫テ有之シ由。又白キ事雪ノコトクナルモノ中ニ有リシニ、沈痾ノ病ニ

用ルニ効アリ。人々乞求シ由。右青柳津カ末之者、物カタリ也。其頃嚴有院樣御誕生ニ付、則此社ヲ御尊敬被ㇾ爲ㇾ成ケル由。又說ニハ、御疱瘡之刻、御宿願之御喜ニ此社ヲ營セラレ、院主等モ被ㇾ仰付ㇾヨシ。サルニ依テ、其刻大樹御近臣各營作ニ預ラル。裏門ハ內藤豐前守、普賢堂ハ松平左近將監、御手水垣增山兵部少輔ナリト云フ。又此地ノ古老之說ニハ、此八幡ノ邊ヨリ南尾州御屋敷大窪迄、近鄕秣場ニテㇾ由。昌連ト申富有農民アリテ百八之塚ヲ築ㇾ、其塚此八幡之地ヨリ相續、大窪マテ有ㇾ之ㇾヒシト云。右昌連ト申人傳記不相知ㇾ。其塚ハ佛供養ノ爲ニ築ケルトナリ。今ノ尾州之御屋敷內ニハ、相殘リㇾ哉。承度事ニㇾ。案ニ右之塚ハ、陣所遠見之爲ニ築ㇾ哉。左ㇾハヽ、此八幡之地モ、陣所之內ト存ㇾ。

——南向茶話

牛込 穴八幡宮

光松山の八幡宮は、世に穴八幡と號したてまつる。そのかみ征夷大將軍從一位左大臣源氏長者家光公は、理世仁德のほまれ世にたかく、國をめぐみ民をあはれみ賜ふ。しかもよく朝家をうやまひ、法を正しくおこなはせ給ふ。この故に諸國の貴賤その恩澤に浴し奉る事、上古の聖代にも恥たまはず。爰に武

州豐島郡牛込の鄕戶塚の邑に、よしありげなる岡山あり。その地に年ふりたる松の木二三本あり。古老の傳にいはく、古しへはこの所きはめてしげりたる山なりけるを、世々の人皆伐つくして、根をほり返し、山は荒て岡となり、僅に二本の松のみのこりて、常葉かきはにさかゑたり。ふかるを寬永十三年ひのえ子にあたつて、御料の御弓大將松平新五左衞門尉直次に與力せし人々、弓のけいこをいたしけるが、源家の宗廟として弓矢の守護神なればとて、八幡宮をくわんじやうし、その前に的山ヲつかせて、弓をもまなぶべしといひあはするさいはいに此地を望み得て、よろこぶ事かぎりなし。その折ふし山鳩三つとび來りて、松の枝にとゞまる。これまことに八幡大ぼさつ我らのまことある心ざしを、神もなうじゆまし〳〵、八幡大ぼさつの御やうごうある事、何のうたがひあるべきやと、人々歡喜の涙を流し、假に小社をつくり、二本の松を神木とさだめ、鳥井をたてゝあがめまつる。それより六年の後、かのとの巳のとし、威成院の良昌僧都をまねきて社僧とし、法味をそなへたてまつる。この僧もとは周防國の人、山口の八幡の氏人なり。いとけなくして毛利家の侍榎本なにがしにつかへしが、榎本身まかりければ、これを歎きて十九さ

いにして高野山にのぼり、出家して寶性院の法印春山の弟子となる。一紀行法學道をとげて、卅一歳の時より諸國を行脚しけるに、つちのえとらのとし十月のころ、奥州にくだり、金花山の求聞持堂に七十五日こもり、次の年の春二月七日、おなじき山の尾上に八幡宮のやしろあり、こゝに通夜し侍べりしに、その夜の夢に、髪からわに結る老翁、まくら上に立てつげてのたまはく、將軍家の御子、かのとの巳のとしの夏ころには、かならず御たん生あるべしとの賜ふとおぼえて、夢はさめにけり。しかれどもふかく心の内にこめてさらに又人にかたらず。それより二年過て巳の年正月三日の夜、武州にきたり、曹司ヶ谷の御藥園のあるしが家に宿しける夜の夢に、さきの老翁また來りつげていはく、今年の夏將軍の御子生れ賜ふべきよしを乘ていひしらせしを、汝うたがひ思ふならば、明日この所へ將軍家御わたりあるべきなり、それをしるしとしてわがいふ言葉をうたがはず、人々かたりきかせよとしめし賜ふ。夜あくるをそしと此夢をあるじにかたる。案のごとくその日俄に御なりおはします、僧都もあるじも大におどろき、奇特の事に思へり。されども世に披露すべき事にはあらずとて、猶ふかくつゝしみて打すごしぬ。その夏のころ中野の寶泉寺に立入て、法印秀雄の會下にありけるを、かの八幡宮を草創しける人々の中に、相知るかたありて、宮守のためとてまねきよせ、秋七月に草庵を結ばんとて、此山のふもとの地形をならして、上の山一丈ばかり堀くづしたる山の底に、ちいさき穴あり。諸人あやしみ見るに、口はせばくてはふかし、をのこのものども内に入てみれば、九尺四方に、たかさ七尺、ふかさ一丈三尺ばかりの穴なり。内に御長三寸ばかりのからかねの佛像石の上に座しておはします。そのまへにちいさき瓶一つあり。左右に人の體骨おほくありけるを、人々とりすてたり。かの佛像は世の常ならざりければ、良昌僧都加持し奉りて、御厨子にうつしたてまつる。道俗貴賤このよし聞つたへて群集をいたして、おがみたてまつるものかぎりなし。八月三日夢想にたがわず、將軍家若君たんじようまし〳〵、上下萬歳をよばふ聲ちまたにみちたり。良昌いよ〳〵有がたく思ひて、神前にまいりみてぐらをさゝげ、祝言を申て、かくぞよみける。

おひそふる千とせの松も千尋あるかけとさかゆく御代はつきせし
此若公御たんじようの奇瑞その數々おほし。當社の緣起につまびらかなれ

ばしるすにをよばず。おなじく八月九日社頭のめぐり一町四方に繩ばりして、地形を引ひらき、本社をば神木の松のもとにうつし、鳥井を石清水のうへに南むきにたて替へつゝ、八重垣ゆひまはしけるを、加州の太守黄門より數百の人歩をつかはし賜ふ。此ゆへに日數いくばくならで、おなじ月の十四日に朝清めして遷宮とりおこなひけり。この日加州の大守より酒さかな餅など山のごとくにおくりてにきはし賜ふ。次の日は法生會の式とりおこなふ。別當社僧は、あかつきかけて、振鈴の聲空にひゞき、神子巫覡は、朝まだきより神樂の音空に聞ゆ。庭のおもてに竈を立て御湯をたてまつる。松平新五左衞門尉、その與力同心引ぐして、的山の邊に幕をはり、棧敷をかまへたり。假初の宮ゐなれば、入的百手等はことぐ〳〵しかるべしやとて、只式正の小的をたつる。神的は射法なれば、小池のなにがしが子十二歳にしてつかまつりけるが、またそのありさま人の目をおどろかしけり。その夜神前にして風流のおどりありけるに、亥の剋ばかりに、神木の松の梢より桃燈ほどなる光り物とび出て、社のうしろに落侍べり。諸人おがみたてまつりて靈驗なうじゆの光りをあらはし賜ふとゝます〳〵たうとみ奉りけり。しかるにこの山の腰より清

きしたゝりの水流れとゞまる。さしもいさぎよき水也ければ、堀ためられしに、かぎりなくわき出侍べり。まことに石清水の名におふきどくならずや。むかしよりこのところを阿彌陀堂山と名づけつたへし。いか成故ともしる人なし。神木のひかり物出し事も、そのかみはためしもなし。今この八幡大ぼさつの神德あらたなる所をあらはし賜ふ。和光のしるし成べし。彌陀は又これ八幡の本地也、山の名もいはれなきにしもあらず。されども山の名をあらため、神木のきどくになそへて、光松山放生寺と號す。神と君との道すぐにして、おさまるこの世のうごきなき名も、いはし水の御神のひろきちかひぞありがたき。しかれば御詫宣にも人の國よりわが國、他の人よりわが人とて、あながちに本朝をめぐみ、殊には氏人をあはれませ賜ふ事、まことに有がたき御ちかひなり。ある發句に、

鳩の巢はあな八幡の茂りかな

かくぞつぶやきける。

二柱たつや鳥井をみるからにあなたうとやとおがむ八幡

——江戸名所記

高田八幡社　牛込の總鎮守にして、高田にあり。世に穴八幡とよべり。此地を戸塚と云。別當ハ眞言宗にして、光松山放生會寺と號ほ。舊名ハ威盛院中之坊と唱へしとなり。祭禮ハ八月十五日にて、放生會あり。旅所ハ牛込神樂坂の中腹にあり。

社記云、寛永十三年丙子御弓隊の長松平新五左衞門尉源直次に與力の輩、射術練習の爲、此地に的山を築立らる。八幡宮ハ源家の宗廟にして、しろも弓箭の守護神なれハとて、此地に勸請せん事を謀る。此山に素より古松二株あり。其頃山鳩來つて日々に此松の枝上に遊ふを以て靈瑞とし、假に八幡大神の小祠を營ミそ、件の松樹を神木とす。南向亭云く、此地ハ舊早稲田邑の地中島といふ、此地に青柳津六兵衞といへる富民あり、往古北條家に仕へし士にて、其人の持傳へし山林にてありしとぞ。此地昔ハ阿彌陀山と呼來ましとなり。されと其所以を知者なりましに、同十八年巳の夏中野寶仙寺秀雄法印の會下に威盛院良昌といへる沙門あり、周防國の產にして、山口八幡の氏人なり。幼くして毛利家の侍榎本氏某に仕へしが、榎本氏歿して後、十九歳の年遁世して高野山に登り、寶性院の法印春山の弟子となり、一紀の行法をとけて、二十一歳の時より諸國修行の志を發し、其間さは〳〵の奇特をあらハせりといふ。依そ此沙門を迎へそ社僧さらしむ。故に同年の秋八月三日草庵を結ハんとしそ山の腰を切闢時にむとつの靈窟を得さり。その崛中石上に金銅の阿彌陀の靈像一軀たゝせ給へり。御長三寸そりて。八幡宮の本地にてしろも山の號に相應するを以て奇なりとす。穴八幡の號こゝに起きり。其舊址今猶坂の傍にあり。又此日將軍家御令嗣嚴有公御誕生ありしろハ、衆益其靈威をしる。江戸名所記に云、同年八月九日社頭の繞を一町四方に繩張して其地を開き、本社をハ神木の松の本に遷し、八重垣を結まそしける。其時加州大守數百の人歩を贈らき、其地を築固めしむ。依て日あらに成就し、同十四日遷宮の式を執行す。松平新五左衞門尉其與力の人々を引供して、的山の邊に幕を張、式正の小的を建る。神的ハ射法なれハとて、小池の何某ら子十二歳にして是を勤むと云云。其後元祿年間今の如く宮居を御造營ありて、結構備きり。南向亭茶話に、嚴有公殊に當社を御崇敬あり、御宿願の事滿給ふの後、當社を營せらる。裏門ハ內藤豐前守、普賢堂ハ松平左近將監、御手水垣ハ增山兵部少輔等これを寄進すとあり。又江府神社略記及ひ和漢三才圖會等の書に、元祿年中桂昌院殿御再興あるしと云々。若宮八幡宮本社の前左にあり。東照大權現同所に並ハせ給ふ。毎年四月十七日參拜の人多し。氷室明神祠本社に相對す。盛德といふ二字を彫さる額を揭く。祭神大巳貴命。元祿二年十二月二十二日牧村氏直良十六歳にして疱瘡を患ふ、同三年正月二日金澤の住人渡邊氏是善靈夢の應ありて此神を祭る。直良此神に祈願して平愈を。同七年の頃始てこゝに鎭座せしむるといひ傳ふ。

光松　別當寺と本社との間坂の支路にあり。昔の松ハ延享年間に枯さりとて、今あるものハ後世殖繼さる若木なり。南向亭云く、此地昔ハ松樹繁茂せし山林にて其中に一株の松あり、暗夜にハ折として瑞光を現せ、故に其樹を稱して光り松と云とそ。又寛永十三年始て當社八幡宮勸請の頃此樹上に山鳩來り遊ひしと云云。放生池石階の下にあり。山の腰より清泉たさゝりおつ。實に石清水の名に應ずるの奇特といふへし。出現所坂の半腹絕壁にそひてあり。往古の靈崛の舊址なり。近頃迄其地に出現堂と號けて、九品佛の中下品上生の阿彌陀如來の像を安置せし堂宇ありしら、今ハ見えに。能舞臺址本社の左の方にあり。今礎を存するのミ。寛延三年庚午三月觀世太夫一代能を興行せし跡なりといふ。抑當社の別當寺を光松山と號るも、神木の奇特によそへてなき。神と君との道直にして、治る御代の濁りなく、石清水の

清き誓ひ最も尊くそ思ハれなる。殊更元祿の頃御再興ありしより、和光の神德日〻に顯きて昭然たり。

——江戸名所圖會

八幡社

牛込區高田町ニアリ。域内三千七百拾坪。應神天皇ヲ祀ル。寛永十三年丙子幕府弓頭松平重次（新五左衛門。）其同心ノ爲ニ習射場ヲ此ニ築ク。同十八年辛巳相謀リ、八幡社ヲ此ニ創建ス。（○下略。）

——東京通志

大圓寺

大圓寺　寛永十八年伊皿子ニ移ル。

本寺牛込保善寺末　芝伊皿子　禪曹洞派　泉谷山　大圓寺

一、拜領地七千五百五拾五坪。

當寺開山諦嚴桂察和尚儀、本寺保善寺開山蟠能門龍和尚之徒弟ニ而、越前國永平寺開山ゟ十七世ノ法孫ニ而御座い。俗世之儀ハ、甲州武田家之臣土屋氏之孫ニ御座い。元和四戊午二月二日遷化仕、當文政十一年戊子迄貳百拾壹年ニ相成申い。

一、慶長二年丁酉二月十一日（此頃開山桂察和尚、溜池邊ニ草庵住居之由申傳い。）東照神君樣御前江被召出、折々法話等聞召、御懇之奉蒙上意、其砌櫻田溜池邊江神君樣爲成い節、御杖を以四方之境を御定罷下置、則寺地ニ拜領仕いゐ、梵刹を草創仕、山號を泉谷と仕寺號之義を大淵と仕い。然所寛永十八年桶町ゟ出火之節、諸堂不殘類燒仕い。其砌右之寺地御用地ニ被召上、右爲代地、於當所七千五百五拾五坪拜領仕い。其節寺號之淵之字を改大圓寺と仕い由申傳い。（○中略。）

——文政寺社書上

神足寺

神足寺　三田臺町ニ移ル。

京都東本願寺末　月岬山神足寺

芝三田臺町一丁目

境内古跡御年貢地二百五十八坪。内八十八坪持添地。

（○上略。）同（○寛永。）十一戌年西久保赤羽江引移、夫ゟ同十八巳年三田村只今之地江引移、御年貢地五畝廿七歩、此坪數百七十七坪之境内ニ罷在い。墓所手狹ニ付、右境内地續ニ而、御年貢地町家持添墓所之儀、寶永七寅年寺社奉行本多彈正少弼樣江奉願い處、翌年正德元卯年右願之通御免被仰付い。依之境内構入、所持仕罷在い。

——續府内備考

泉岳寺

泉岳寺　寛永十八年櫻田ヨリ芝高輪ニ移ル。

下野國富田大中寺末　萬松山泉岳寺

芝

境内拜領地二萬百八十五坪。
内門前町屋千百七拾七坪。

起立野州富田大中等十一代建室宗寅和尚ゟ、今川治部大輔義元舍弟、○中略。右宗寅和尚得法之弟子宗圓和尚、俗姓今川氏、○中略。大中寺住職被仰付。則大中寺十二代也。雖然住所依爲遠境、兩御所樣○德川家康。德川秀忠。御相談之上、慶長十七壬子年於外櫻田寺地拜領、伽藍造營、開山と被成、山號萬松、寺號泉岳ゟ、專奉祝松平之孫枝榮于萬歲、德川之源泉溢于海岳之儀之旨、宗圓和尚達上聞、兩御所樣有御滿悅ゟ、蒙台許號萬松山泉岳寺。○中略。

寛永十八巳年正月廿八日中橋桶町より出火之節類燒仕、其節御用地ニ相成、於當地替地拜領仕ゟ。

寛永十九午年大猷院樣御鷹野之砌、當寺ゟ被爲成、住持門解和尚御目見被爲仰付ゟ節、當山起立之譯幷開山宗圓和尚由緒之趣御直ニ御尋有之、住持逐一申上ゟ。其外門前之松山ゟ當寺境内歟と被爲遊御尋ゟニ付、住持申上ゟ、此松山當寺境内ニ御座ゟ得ゟ至極之境内ニゟ得共、此山ゟ公儀之御山ニゟ御座ゟ旨申上ゟ處、其節若御年寄朽木民部少輔殿○植綱。ゟ上意有之ゟ、此松山住持所望ニゟ間可被下置之條、其方泉岳寺旦那ニ罷成、此山を切り通し、海端

ニ大門建ゟ樣ニ取計可申旨被仰付、依之丹羽左京大夫光重・水谷伊勢守勝隆御手傳被仰付、早速切通し相成申ゟ。勿論朽木民部少輔殿・丹羽左京大夫殿・水谷伊勢守殿今以當寺旦家ニ御座ゟ。

山門之脇有甘泉、古來謂是於鮎之井。大猷院樣臨御之節、御自由被召上、後蓋之、四民至于今、敬之。唯懷召作甘樂之惠者也。○中略。

寺中

功雲院　起立正保元申年宗全本僧ニゟ開闢仕ゟ。○中略。

陽壽院　起立慶長十七壬子年二月一慶傳尊長老開闢仕ゟ。○中略。

門良院　起立貞享元甲子年二月久山玄良長老開闢仕ゟ。○下略。

——文政寺社書上

當寺○泉岳寺。ハ門庵和尚の開基として舊家の末流たり。其がみハ安座部の臺よありしを正保年中ゟ此處ゟ引うつさる。此寺ハ又かきりなき絶景あり。高く造れる山門ハ、雲をさしてさみて虛空よそひえ、四王功利の宮殿ゟとあやしミ、天ゟ梯して登るかとおそゆ。門の内ゟ道の兩方ゟ並木の松あり。雪飛て枝ゟ積れハ、美綿をのへて雲にまかひ、風吹て枝をまさまハ、緒琴のしらへ空ゟ

龍興寺

むゝく。東南のかさハ海上をるかに晴て、帆かけ船波を走、萬天の雲に連をなせハ、田面の雁の渡るに似さり。釣をる蜑のいさり火ハ、沖にちいさく浮ましむ。波間にすさく螢火か、それかあらぬか、晴るゝ夜の星かとのミぞ見えまかふ。嵐をおしき折からハ、おみまゝもとに立かゝる心地して、獨まろねの夢をやふる。汐にむさを月かけハ、くもらぬ鏡をあらふに似て、海より出て海に入、をへて眺望に興を催を。爰ハ品川の入口にて、門前の大道ハ、のゐる人くさる人、櫛の子を引かまとし。

——江戸名所記

溜池古ハ櫻田池ト稱スレバ、安座部ノ臺ヲモ概シテ櫻田ト稱シタル者歟。文政寺社書上轉移ヲ寛永十八年トシ、江戸名所記ハ正保年中トス。孰カ是ナルヲ知ル能ハズ。姑ク文政寺社書上ニ從フ。尚上文慶長六年丹羽長重高輪塾居ノ條ヲ參照ス可シ。

龍興寺　芝岸町ヨリ麻布日ケ窪ニ移ル。

江府芝西ノ久保青龍寺末
麻布日ケ窪
禪曹洞　洞雲山　龍興寺

一、境内御年貢地貳百三拾六坪。

寛永十八年辛巳増上寺御用地ニ付、芝岸町ヨリ引地被仰付し。人王一百九代後水尾院御宇元和二年丙辰護法ノ檀那芝岸ニ於テ當寺ヲ開闢シ、青龍寺三世白容傳清和尚ヲ請シ、開山第一世トス。開基ハ分リ不申し。

——文政寺社書上

大乘院

大乘院　中興開山ノ寂年ニ因ミ、此ニ載ス。

聖護院宮御末氷川御宮別當
神留山無動寺正大先達職
本山修驗宗惣觸頭江戸御役所
大乘院

一、境内凡四百拾坪餘、御社地惣坪數之内也。

一、開闢起立之譯、天明中舊記燒亡仕、不相知。

一、開山不相知。中興開山ゟ如左。

一、中興開山大乘院源榮　慶長中住職年月不知。俗氏齋藤。寛永十八年三月晦日寂。

——文政寺社書上

本性寺

本性寺　是年寺地寄附セラル。

下總國本土寺末
平等山本性寺

境内古跡四百七拾五坪。

四谷南寺町

起立年代相知不申し。最初ハ三田佐兵衞殿祖父法號妙傳院日香居士之隱居

地面ニ⻏御座ㇾ處、寛永十八辛巳年歸依僧觀智院日詠ヲ右地面幷隱居所相讓、同年十一月死去仕ㇾ。依ㇾ之爲二菩提一本性院と一寺取建之志願有ㇾ之ㇾ。然處寛文十庚戌年寺地御改之節、御糺之上、寺地拜領仕號二平等山本性寺一ㇾ。得共、造營不二行屆一、延寶五丁巳年十月七日致二遷化一ㇾ。

——續府內備考

圓福寺

開山寂年ニ因ミ、此ニ收記ス。

一、境內拜領地　表間口二十間、奥行三十七間、坪數八百坪餘。

右御拜領之年月日時、相知不ㇾ申ㇾ。

一、開山蓮行院日圓聖人　寛永十八年巳十二月廿四日遷化。

——文政寺社書上

感應寺

東叡山末　長曜山尊重院感應寺

牛込横寺町　下總國正中山末　法花日蓮宗　妙德山　圓福寺

境內拜領地三萬四千八百五十二坪四合七勺。

谷中

感應寺　寛永十七年諸堂寺家ヲ今ノ地ニ移シ、今年ニ至リテ境內ヲ弘擴ス。

武州豐島郡谷中感應寺ハ、日蓮上人の在世ヨ草創の寺庵昔谷中村ヨ關氏某ト云地下の武士有り。日蓮宗旨立以後、相陽鎌倉ヶ本邦房州或ハ鹽原湯治の往還ヨ、屢關氏の家ヨ寄宿し玉ふ。其時關氏日蓮の非凡を見て信仰致ス事、宛も生身の如來を敬ヲ如く、平日思ふ處、掛る聖僧を不淨の儘家ニ倍宿ヲん事雖二暫時一可レ恐云々。果て屋敷の內ヨ別ニ草庵一宇を置て、日蓮を待と日久し。後ヨ祖師入來の時ハ、御一家の信心を感し、逗留し玉ふ事五日七日又三十日ヨ至る。村民法談を聞、悉く歸伏し、祖師の檀家と成、老若男女數百人、晝夜とふく草庵ヨ參詣し、異口同音ヨ首題を唱ふ。或時祖師御一家ニ告て曰、今ヶ後地ニ寐山ニ入と欲ヲ、此地ニ來る事希有成へし、多年の芳心忘るへからヲ云々。時ヨ關氏夫婦落涙千行して師ヨ云、景慕雖レ無レ限よしなく、止と欲ヨハ御形見の爲、御自作の御影を此草庵ニ殘し可レ置、心服の諸人、不斷生身の想を生し可レ奉と云へり。檀家の懇望無二是非一思召て、即自影一軀を刻ミ、庵室ヨ殘し置給ふ。今本堂安置の尊像是也。則願て衆ニ命して云、生身想生し首題を唱ふるし、此所大伽藍佛法流布の靈地と成るべしと云々。關氏ハ今の關一統是也。其後ハ祖師御入來ㇾ、身延山ヨ隱居、池上ニ遷化し玉ふ。然則當山ハ元日蓮上人草創之靈地、自影安置の道場ニ。祖師入寂以後、關氏を初メ信仰之諸祖、那地を寄せ、寺を建て、諸尊を造立し、住持を添置き、晨昏の勤行無怠。ㇾとも邊鄙の小

地成る故、住持をといへとも弘道教化の器量もおのりしと見へ、尊像の靈驗
に預る者希ゆへ、祖師の遺跡ある事を知る人鮮し。況其行狀をや。扨長曜山感
應寺と名ケし事ハ、祖師の付給る歟、その後の事なるの、記錄紛失、依て慥ニ知
ると不能。其後文祿元年日運上人之代、客殿庫裏本院諸堂幷坊中不殘燒失之
旨ニ也。寛永の中頃、公方樣御不例、英勝院殿驗祈禱可執行旨被仰付、山中の衆
僧ハ勿論、下谷駒込寺町邊一派の住持相集ヨ、於本堂内祈念有之、驗祈禱ハ於
書院酉之刻ゟ執行、驗者は四ッ谷本源寺住持願壽院日泰也。太田備中守殿參
詣有之、座中ゟ警固、寄女の詑語の時ハ、衆僧を退け、備中守殿小侍從女驗者日
泰日長只四人在座ニ尋聞、備中守殿自筆を染て寄女の詑告を委細に書留る。
其後寄女の告に依て、又英勝院殿御祈禱被仰付也。其趣新に正月の儀式を粧
ひ、千部を可誦よし。依之諸堂ニ御鏡餅を供し祝、門松を建二百三十人の僧を
以五日ゟ千部を成就を。御不例忽復す。此旨達上聞の由被仰聞。扨千部讀誦の
日毎、樂を奏を。然る處に簫の音響さる由、英勝院殿被聞召、御本丸御納戸の簫
を御寄附、春日殿ゟ某秋月を召寄、向後公方樣御長久之御祈禱可仕旨被仰付、
別ゐ難有仕合奉畏也。就夫迚ゟの儀ニ日蓮宗ニ御名代を立置セ給ハヽ、感應

道交の道理成間、御祖の靈驗も可新成旨を委しく申上也。其後兩月計りも在
て、又被召寄、此度ハ堀田加賀守殿御列座にて被仰渡也ハ、我秘藏の孫堀田久
太郎を御名代ニ日蓮宗ニ被成也間、彌御祈禱丹誠を可抽旨被仰付、同年十月
十二日春日殿久太郎殿御同道にて本堂へ御參詣、御樽三荷昆布三箱鳥目三
百貫文三佛前へ御備有之、於祖師の寶前ニ、春日殿御高聲ゟ今日ゟ公方樣御
名代ニ堀田久太郎を宗旨ニ被成也間、天下安全ゟ可有守護御誓也ト云々。扨
本坊へ御入、晩景迄罷在、忝仰共有之、是より後ハ、毎年正五九月御祈禱之御札
御城ゟ差上也。久太郎殿も毎年正五九月ニハ必御參詣在之由ニ也。
寛永十五戊寅年正月十日公方樣御鷹狩之次、當院へ高駕入御ま玉ひ、住持日
長を御前ニ被召出、小幡孫市郎殿承ニゐ、重々御尋有之、則御請申上也。御尋第
一當寺開闢已來幾年數を經也哉。御請根本ハ祖師日蓮取立の寺庵也、享德元
年中興より今年迄百八十七年歟ニ成ル。御尋第二、當寺の日蓮木像直作の由
達上聞、爾りヤ否。御請直作無紛といへとも、直作さる由緒の證文代々相傳せ
し處、先住日運代ニ燒失故、今御前に於て容易に直作とハ難申上也。此時尤と
の御意在之。御尋第三ニ、身延池上兩派の中ニゐ何を成ル哉。御請池上方不受

不施の由申上。御尋第四、只今御布施を賜拝受有間敷哉否。御請、貴命難辞といへとも、宗旨の爲に立儀間、幾重にも御免の訴訟可申上。御尋第五に、只今迄終に他宗之布施を不受哉。御請、宗旨開闢以來、他宗の布施被不受、依之大權現神祇台徳院殿尊儀御當代に至る迄、以上五ヶ度の御吊に、諸宗一同御諷經を奉勤といへ共、當宗へは御布施被成御免、終に不致拝受とて、五ヶ度之一々巨細に申上。宗門の所立在りの儘に達上聞之處、益御機嫌能、還御後銀子拾枚拝領之。同年秋、去ル正月の御成を難有奉存、寺内に少しの御茶屋を營む。同十月十一日新造之御殿へ被爲成、御機嫌克御花迄被爲生給ひ、銀子五十枚拝領。其後切々入御、毎度御前に被召出、難有上意有之。寛永十八辛巳年境内狭少にして、寺僧可置の所無之、隣地拝領之訴訟申上し處、同年十月廿二日隣地二萬九千六百九拾餘坪添下し賜ふ。寛永十二乙亥年番神堂建。願主久世三四郎。鐘鑄。願主阿倍四郎五郎。同十五戊寅年秋御殿を結構。同十七庚辰諸堂并寺家今の屋敷へ引移す。同十八辛巳年境内の隣地を莫太に拝領し、望の儘に寺家悉く今の屋敷へ引移る。同廿年癸未九月大鐘二敷を鑄ル。其一ヲハ碑文谷へ寄し、一ツは當山に安ず。同年霜月十四日に寶塔建立の事始。翌正保元甲申年七月造畢。同二乙酉年四月十五日十種供養入佛を修す。開眼し畢ぬ。夫が元祿の子今至る迄、數年の星霜を經、常憲院様御代故有て天台宗に相成しは譯ハ、舊記等にも、何等の故障有之しやうかゝる御咎被仰付しは哉、不明白しゝ。依之日蓮直作の自影幷相傳フ處の重寶に至ル迄、此時の混雜に散亂も致しは哉、中興の舊記よは一切右様のものの不見當しは間、此儀難顯しゝ。○中略。

享徳元壬申歳碑文谷日曜聖人謂ラク、祖師舊跡尊像安置ノ靈地可捨置處ニアラストテ、彼山ヲ隱居アリテ、當寺ヱ移リ、諸檀那ヲ勸テ、廣博ノ地ヲ寄進セシメ、抽木屋敷是ナリ。殿堂ヲ立テ、衆徒ヲ領シ、行事ヲ勤ム。是ヨリ後、世人普ク祖師ノ舊跡手自ノ尊像ナルコトヲ知リ亘セリ。伽藍日興立シ、參詣年盛シテ、柚木ノ本屋敷猶狹小ナレバ、廣博ノ勝區ヲ尋求ム折節、文祿元年日運聖人ノ代、回祿ノ災ニカヽリ、客殿庫裡等本院ノ分不殘炎上シ、舊記モ此時ニ燒失ス。諸堂幷坊中ハ無恙。此次テニ伽藍ヲ今此原屋敷ニ移シ、衆徒モ共ニ移ル。故ニ堂山ハ元祖ヨリ以來三度屋敷替アリシナリ。日運聖人ノ御書物ノ中ニ書キ置レシヲ爲後代書付置クモノナリ。

市街恢弘時代

某日長元和七年辛酉正月十二日此山ニ入、同九年癸亥六間九間ノ庫裡ヲ立テ、寛永二年乙丑七間半九間ノ客殿ヲ造ル。元客殿ヲハ引ニ移駒込長元寺。同五年戊辰十間十二間ノ大堂ヲ建立。始堂ヲハ移ニ長元寺。同八年辛未大小ノ書院二宇ヲ營ス。始ノ書院ヲハ、移ニ妙揚寺一客殿トナス。同十二年乙亥番神宮立。久世三四郎願主。同十五年戊寅秋結ニ搆御殿。同十七年庚辰諸堂幷寺家少々、今屋敷へ引出ス。同十八年辛巳境内ノ隣地ヲ博大ニ拜領シ、願ノ儘ニ寺家ヲ悉ク今ノ屋敷へ引移ス。同廿年癸未九月鑄ニ大鐘二鋪、其一ヲハ碑文谷ニ寄セ、一ヲハ當山ニ安ス。同年霜月十四日ニ寶塔建立ノ事始、翌正保元年甲申七月造畢。同二年乙酉四月十五日修ニ十種供養一、入佛開眼。慶安元年戊子八月永代安堵ノ御朱印ヲ頂戴ス。今世ノ所願悉ク滿足シテ、今年隱居スルナリ。在住廿八年ノ間、イカハカリ法ノタメニ精神ヲ盡シキ、云云。

當山通號尊重院、私之別名領玄院

日　長花押

——續府內備考

武州豐島郡谷中東叡山末

長耀山尊重院感應寺○中略。

一、寛永十八年辛巳境内狹少ニして、寺僧可レ置之處無レ之、隣地拜領之訴訟申上

處、則同年十月廿二日隣地二萬九千六百九十餘坪添賜。

一、寛永十二年乙亥番神堂立、久世三四郎願主。同鐘鑄、安部四郎五願主。同十五年戊寅秋、結ニ搆御殿一。同十七年庚辰諸堂幷寺家、今屋敷へ引移ス。同十八年辛巳境内之隣地を博大ニ拜領シ、願之儘ニ寺家悉ク今之屋敷へ引移。○下略。

——文政寺社書上

〔參考〕僧日長

感應寺緣起○續府內備考收。ニ左ノ如ク見ユ。

日長聖人者、武州荏原郡衾村之產、而小杉氏之裔也。其先瀨田谷近臣、世事ニ武業一。後下ニ民間一而年尙矣。師幼見ニ妙光山楊師一。楊見レ有ニ異相一、乞以稚髮、字稱ニ秋月一。未レ越ニ一紀一、通ニ利八軸一、氣質純朴、心操弘大。雖レ志ニ于學一、而乏ニ財產一、望崖有レ年。徐至ニ中年一、寓ニ居下總飯高學校一。聚レ螢則更レ夜、窺ニ台教之奧一。積レ雪則終レ日、探ニ當家之隱一。孜々乎思過レ半。主ニ于駿府妙藏寺一。元和七辛酉年、師齡三十六。養ニ珠院殿○隆山氏一。英勝院殿太○田氏一。頻延ニ致之一、主ニ于當山一。○中略。慶安元戊子秋、頂ニ戴御朱印一。于レ時師齡六十四。我願既滿、衆望亦足、茲年捨ニ遺徒衆一、隱ニ境內西一。翌歲猶惡ニ世喧一、閉ニ居山崎一。今領玄寺是也。

同四年辛卯十一月假示微疾、同月二十七日世壽六十七歲安然坐亡。先此寬永七庚午歲受與不受相論已來、深思於護惜、身輕塵芥、運籌於興隆、日惟不足。就中碑文谷法華寺者、先師投足之地、而當山同門之道場也。法運既塞、住職斷絶、伽藍頽敗、日々就衰微、僧坊零落、年々欽齋會。師不忍見之、續絶給貫、充擴境内、補故修新、以爲莊觀。或歎末葉之微、則以當寺末寺爲彼末寺。若慮造營之艱、植數千萬松木于中丸畠地、竟擢庭山。誠公爲彼山貫主、其之竭心投財者、不遑具記。是偏佛法相續、道念且亦耀師當山中興報謝也矣。皆寛文丙午冬誌之。權僧都日純。

成就寺　起立年代ヲ知ラス。寛永十八年東叡末ニ入ルト云フ。

東叡山末中之郷
天台宗
嘉椿山西光院成就寺

一、境内御除地千八百六拾九坪。

但、間口四拾八間半。奥行中央ニ而九拾五間半御座ハ得共、入組罷在ハ間、右間數ニ而ハ坪數ニ合不申ハ。爲念此段記置ハ。

一、當寺ハ慈覺大師草創之地ニ而、古刹ニ御座ハ處、屢荒廢之地ニ相成、其後四百餘年を經て、大僧都舜慶中興起立いたしハニ付、則大師を開山と仰き、舜慶を中興初祖と相唱ハ。尤往古と比叡山末ニ而、嘉祥山寂光寺圓仁院と相唱ハ處、寛永十八年當寺九世忠圓代ニ東叡山末ニ相成ハ節、只今之山寺院號ニ相改り申ハ。尤舜慶と正和五辰年二月四日入寂仕ハ。——文政寺社書上

法乘院　深川相川町富吉町裏ヨリ七軒寺町ニ移ル。

本寺武州葛飾郡東葛西領下小岩村善養寺末
同國同郡江戸深川七軒寺町
新義眞言宗
賢臺山賢法寺法乘院

一、御除地古跡九百五坪。

大猷院殿御代寛永六己巳年深川獵師町相川町富吉町裏通ニ而右之寺地被下置ハ。類燒ニ付御奉行様御名前書物相不知申ハ。

御除地寺地代地境内八百三拾五坪

右ハ九百五坪之處、七十坪紛レ減少ニ相成、今ハ八百三拾五坪。

表口西北拾六間四尺七寸。奥行北東四拾壹間四尺貳寸。
同西南三拾壹間三尺五寸。裏口東南貳拾五間三尺。

右寛永六己巳年深川獵師町相川町富吉町裏通ニ而寺地被下置ハ處、寛永十八辛巳年御船藏幷天野孫左衞門殿御用御役屋敷ニ被召上、只今之寺地代地ニ被下置ハ。類燒ニ付御奉行様御名前書物相不知申ハ。〇下略。

法乘院　平野町ニアリ。賢臺山賢法寺ト號ス。當郡東葛西領小岩村善養寺末ナリ。開山ヲ覺春ト云フ。寛永六年富吉町裏通ニ當寺ヲ起立セシカ、同十八年御用地トナリ、今ノ地ニ移遷シ、同二十年五月五日寂セリ。本尊舊ハ閻魔ヲ置キシカ、寶暦十年火災ニ罹リシ後ハ、金剛界ノ大日ヲ安ス。行基ノ作ト云フ。左右ニ弘法興教ノ像ヲ置ク。境内除地八百九十七坪。內六十二坪ハ寄附地ナリ。又接地ニ六十六坪餘ノ寄進地ヲ添ヘリ。

鐘樓　寶曆六年ノ鑄鐘ヲ掲ク。

閻魔堂　本尊ハ運慶ノ作ナリ。外ニ十王及ヒ脫衣婆ノ像ヲ置ク。

護摩堂　本尊不動及ヒ二童子共ニ良弁ノ作ト云フ。

支院

不動院　開祖ヲ賢覺ト云フ。延寶元年十二月廿七日寂ス。本尊胎藏界大日ヲ安ス。

〔附記〕將軍世子宮參

——府內誌殘編

——文政寺社書上

寛永日記其他ニ見ユ。今左ニ大猷院殿御實紀ヲ抄出ス。

九日〇寛永十九年二月。若君〇德川竹千代(家綱)。御宮參あり。巳刻にまづ二丸の內宮に參らせ給ふ。御太刀は稻葉美濃守正則、御脇差は酒井日向守忠能役し、近習のともから圍繞して、御拜あり。御太刀目錄進薦し給ひ、神酒を奉る。御酌は吉良上野介義彌、御加は保科肥後守正之つかふまつる。別當竹林坊へ銀五枚、社僧等えも銀若干かづけらられて後、本城へかへらせ給ひ、御祝ありて後、大手の御門より出まし、紅葉山御宮に參らせ給ふ。行列は先阿部對馬守重次、元寛日記には、是より先に大目付一人とあるすさる事にや。次に兼松彌五左衞門正直布衣。次に銃廿挺。猩々緋雨皮。次に森川金右衞門氏信布衣。次に弓廿張。次に本多太郎左衞門信勝布衣。次に鑓虎皮投鞘。廿本。左に安藤次右衞門正珍、右に富永主膳正重吉布衣。次に御馬二匹。諏訪部源治郎定矩したがふ。次に召替御輿。次に傘。笠立。床机。狹箱。次に犬二疋。神保吉右衞門定好。次に白丁十五人づゝ二行にたつ。次に隨身六人。左に堀三右衞門直景、松田善右衞門勝政、丹羽平右衞門正長。右に下曾根三十郎信由、大久保權右衞門正長、小出甚太郎重勝。赤地金襴。袍。淺黃指貫。緌。次に同朋永倉珍阿彌直活、佐野福阿彌正長、土肥清阿彌宗次。次

に諸大夫行列。左は小笠原右近大夫忠眞、奥平美作守忠昌、石川主殿頭忠總、
以上狩衣。太田備中守資宗、松平右衞門大夫正綱、板倉阿波守重郷、松平佐渡
守利綱、板倉主水佑重矩、西尾丹後守忠照、松平縫殿助眞次、安部攝津守信盛、
酒井壹岐守忠重、本多豐前守正貫、石川播磨守總長、大久保左馬允忠知、水野
石見守忠眞、柳生但馬守宗矩、久貝因幡守正俊、朝倉石見守在重、高木筑後守
正次、榊原飛驒守職直、安部丹波守信之、山口備前守重恒、伊澤隼人正政信、北
條右近大夫氏利、松平監物乘次、松平但馬守知乘、松平修理亮氏信、戸田淡路
守氏經、松平筑後守康盛、有馬石見守重良、島田刑部少輔直次、水野右京亮勝
忠、永井式部少輔直重、關兵部少輔氏盛、那須美濃守資重、川勝丹波守廣綱、松
平豐前守勝義、松平備中守伊耀、山内豐前守一唯、本多淡路守重能、山崎左近
家治、内藤攝津守信良、分部左京亮光信、淺野内匠頭長直、榊原越中守照清、片
桐石見守貞昌、秋田安房守盛季、伊東大和守祐久、有馬伯耆守賴次、淺野因幡
守長治、古田兵部少輔重恒、相良壹岐守賴寬、山内修理大夫忠直、寺澤兵庫頭
堅高、眞田内記信政、稻葉淡路守紀通、松平備後守恒元、植村出羽守家政、水野
備前守勝貞、土岐山城守賴行、諏訪出雲守忠恒、岡部美濃守宣勝、菅沼織部正

定芳、内藤帶刀忠興、大久保加賀守忠職、伊井兵部少輔直好、松平周防守康映、
松平河内守定賴、松平和泉守乘壽。以上大紋。以上
定綱。以上狩衣。土井遠江守利隆、井上河内守正利、永井右近大夫尚征、青山大膳亮
幸利、秋元越中守富朝、土屋民部少輔利直、内藤飛驒守忠政、永井日向守直清、
堀越中守利長、青山因幡守宗俊、田中主殿頭吉官、齊藤佐渡守利宗、新庄美作
守直房、本多美作守忠相、仙石大和守久隆、佐久間將監實勝、井上筑後守政重、
神尾備前守元勝、渡邊圖書頭宗綱、永井監物白元、松平淡路守忠直、鳥居石見
守忠賴、水野出雲守成貞、水野下總守忠勝、佐々木大膳亮高和、山口出雲守直
治、石丸石見守定次、本多丹後守重世、大久保宮内少輔正朝、德永式部少輔昌
成、三好備前守長富、酒井藏人忠次、立花甲斐守種吉、酒井下總守忠正、京極主
膳正高通、井上淡路守庸名、土岐左馬助賴勝、酒井大膳亮勝吉、高力左近大夫
忠長、織田上野介信勝、久留島丹波守通春、水谷左京亮勝宗、朽木兵部少輔定
總、小出修理亮吉重、堀美作守親昌、京極刑部少輔高和、三宅大膳亮康盛、松浦
肥前守鎭信、大關土佐守高增、金森長門守賴直、秋田河内守俊季、中川内膳正
久盛、龜井能登守玆政、鍋島刑部大輔直朝、毛利日向守就隆、黑田甲斐守長興、

京極下總守高治、加藤内藏助明友、鳥居主膳正忠春、内藤豐前守信照、高力攝津守忠房、北條出羽守氏重、本多下總守俊次、水野隼人正忠清、本多能登守忠義、松平若狹守康信、酒井攝津守忠當、松平因幡守忠久、松平山城守忠國。以上大紋。次に左、松平伊豆守信綱。右、阿部豐後守忠秋。元寛日記各衣冠とあり。疑ふべし。此二人はともに四品なれば、狩衣たるべし。次に村越七郎左衞門正重、布衣。次に長刀。次に左弓。右に纂目。本多太郎左衞門信勝所屬の與力是をもつ。次に堀田加賀守正盛直垂。次は戸田左門氏銕、狩衣。次に御輿。その後に御太刀は酒井河内守忠清、狩衣。御刀は稻葉美濃守正則。御脇差は酒井日向守忠能役し、牧野内匠頭信成以上大紋。こゝにしたがふ。次に近習の布衣侍。次に御笠。御沓。素襖烏帽子着百人したがふ。次に醫者二人。次に御持鑓三柄。次に押、井戸三十郎覺弘、井上次兵衞利義、江原與右衞門宣全。次に歩行押五人、次に杉浦内藏允正友、酒井和泉守忠吉、宮崎備前守時重。大紋。次に山崎權八郎正信、布衣。次に御後輿五挺。輿添左右に五人づゝ。次に押、久貝惣左衞門正信、鈴木佐兵衞重泰、渡邊半丞吉綱。次に堀田權右衞門一純。布衣。次に歩行士三十人。次に左、内藤伊賀守忠重。右、水野備後守元綱。次に歩行押五人。次に小人騎馬の輩、各小結かけし烏帽子小素袍、大總かけし

馬にのる。侍六人。鑓一柄つゝめしぐす。左は土井大炊頭利勝二子八之助利長、堀田加賀守正盛三子久太郎正俊、松平山城守忠國子三之助信重、菅沼織部正定芳五子主稅定賞、松平若狹守康信三子求馬助英信、永井信濃守尚政三子大學尚庸、岡部美濃守宣勝三子左京豐明、牧野内匠頭信成六子主殿教成、大久保主膳正幸信四子小吉幸治、水野隼人正忠清二子長吉忠增、松平伊豆守信綱五子采女信興、金森出雲守重賴九子右近重利、遠藤但馬守慶利二子大助常昭、牧野内匠頭信成八子兵部成房、秋山修理亮正俊弟十兵衞正勝、山崎權八郎正信五子主馬政豐。右は酒井讃岐守忠勝四子靱負忠直、松平伊豆守信綱四子内記信定、土井大炊頭利勝三子七之助利房、石川主殿頭忠總六子半太郎總氏、松平長門英親、弟宮内直政、青山大藏少輔幸成四子藤藏幸隆、本多下總守俊次四子式部忠隆、秋元但馬守泰朝養子主水正朝、大久保右京亮教隆二子杢之助教廣、酒井壹岐守忠重二子藤松忠辰、榊原内記照久三子大膳久政、松平備中守伊耀二子金三郎金益、水谷伊勢守勝隆二子彌四郎勝能、永井豐前守直貞、子十左衞門直孟、島田幽也利正五子右近利直、馬場三郎右衞門利重五子權六郎利興。次に押、多賀外記常勝、松平内記清信、猪子左

大夫一吉、渡邊孫助久次。次に歩行押十人。次に惣同勢。次に酒井讃岐守忠勝押後せり。この輩の中にも近習幷番頭、その外の諸大夫は紅葉山まで供奉し、其外の諸大夫は櫻田門内より供奉し、小人騎馬の輩は、櫻田の堀田加賀守正盛が宅前小路より供奉し、弓銃はじめ諸器械は、西城下にとゞまり、紅葉山にはまからず。尾張大納言義直卿、紀伊大納言賴宣卿、水戸中納言賴房卿、尾張宰相光友卿、紀伊宰相光貞卿、水戸中將光圀卿直垂。御先に紅葉山にまかりむかへられ、若君より御神前に御太刀目錄獻せられ、御拜あり。御簾は書院番の諸大夫六人役し、神酒奉る。御酌御加の役は、二丸の內宮におゐじ。大僧正天海御幣奉る。別當延命院忠運銀三十枚給はる。社僧等へ銀若干かづけられ、直に麹町山王祠に詣給ふ。供奉の行列前に同じ。尾紀水三卿三世子、紅葉山より御先にまかりむかへらる。國持其外四位以上は直垂狩衣、無位の長子等は長袴着て豫參し、神前に太刀一振、龍蹄一疋、銀二百枚進め給ひ、別當寂教院晃海銀五十枚、社僧等へ百枚、神主日吉右京進五十枚、惣社人へ百枚かづけられ、神樂あり。伶人太平樂を奏す。御拜はてゝ井伊掃部頭直孝の邸へ立よらせ給ひ、直孝御膳を奉り、供奉の輩にも饗行ふ。直孝へ來

國次の御脇ざし、銀五百枚、小袖廿、鞍負佐直滋へ長光の御刀、時服十、銀貳百枚、弁之助直寛、仙之助直繩時服十づゝ給はる。直孝より延壽國時の太刀、大左文字の刀、久國の脇ざし、小袖二十、馬代金廿枚、猩々緋廿間、行器十荷、昆布五十把、熨斗五十把、鯛三十枚、鰯五十連、樽十荷、直滋より備前兼光の刀、越前綿二百把、弁之助直寛、仙之助直繩より、太刀馬代獻じ、かへらせ給ひて後、供奉の輩皆營中に於て祝酒を下さる。今朝三家よりは、兩御所に三種二荷づつ奉らる。御所には此御宮參りのさま御覽ぜられんとて、二丸の多門矢倉へならせらる。若君終日御心地よげにわたらせ給ひ、山王にて神樂の間晝寢し給ひ、御目覺て國持大名等拜謁せしとき、よく笑はせ給ひ、御けしきこと更うるはしくわたらせ給ひしとぞ。又歩行頭小十人頭打交り、山王より度々馬上にて本城に御けしきのさまを注進す。女房輿添つとめしもの幷徒頭堀田權右衞門一純所屬の歩行士、小袖上下を下されしとなり。御道には諸大名より人數出し、辻々に弓銃を備へて警衞せり。

十九年壬午〇寬永〇紀元二三〇二年。二月十九日己未、〇己未、三正綜覽。淺草觀音堂〇市內淺草區。燒ク。境內東照社亦災ニ罹ル。〇變災篇參照。

淺草觀音堂燒失　變災篇ニ具記ス。

二月十九日〇寛永十九年。

一、淺草ニ火事出來、觀音堂燒ル。彼所ニ權現樣御宮有之ニ、御宮も火うつり、ニ付、とやく被レ爲レ聞しハヽ、紀伊殿彼所へ御越可レ有レ之所、遠路、其上遲も御聞付、公方樣御機嫌之程無二御心元一旨、口上ニ而所々執政衆へ使者被二差出一。右ニ而御三家登城、或使者等被レ出しニも不レ及段、御城付ニ兼松彌五左衞門〇正直。申聞しゟ。

萬年記

一、淺草觀音堂火事ニ付、御徒衆爲レ注二進之一、道番之ことく置可レ申由上意ニ付、牧野佐渡守〇親成。北條新藏〇正房。曾我太郎右衞門〇包昭。三番闔取ニ而出ル。

二月廿日〇寛永十九年。

紀

一、御老中ゟ御登城之義伺、扨御三家御登城被レ成、御老中へ御逢、火事之義就レ中御宮へ火移しゟ得共、御神體ヲハ守出奉り、目度思召しゟ由被二仰達一、次ニ公方樣御機嫌御伺御歸也。

二月廿一日〇寛永十九年。〇中略。

紀

一、一昨日火事之砌、牧野佐渡守早く火事場ニ參しゟニ付、御歩行組頭壹人、平のかちの衆三人、早々頭佐渡守と一所ニ而、御宮へ心付しゟニ付、組頭御切米知行ニ成、一同右之御加增合貳百五十石、殘三人三十俵ツヽの御加增ニ而、百俵ツヽ被レ下、火事之刻、御使番衆御城へ不參しゟニ付、堀三左衞門川勝丹波兩人御城へ日夜十日ゟ廿日ゟ相詰しゟ樣ニ、能勢次左衞門、右川彌左衞門兩人ハ御城へ罷出しゟ得共、火事ゟつまりしゟとゟ早く罷歸ニ付、晝夜五日御城へ相詰しゟ樣被二仰出一由。火事之砌御宮へ參しゟ坊主共に御ゟうひ御金被レ下しゟ由。

萬年記

一、牧野佐渡守組與頭山本市左衞門百石御加增、御切米百五十俵地方ニ直し、都合貳百五十石ニ成申しゟ。同平組三人、百俵ツヽニ被二仰付一。是ハ淺草火事ニ權現樣御宮之御道具、彼近所ニ有合申付、取出申故御心附也。

諸家功顯記

一、淺草觀音堂燒失ニ付、權現樣御高牌奉二守出一、勅額迄も奉レ除しゟ樣、堀田加賀守殿〇正盛。被二仰渡一ニゟ、御先迄ゟ御番仕しゟ段奉二上聞一、牧野佐渡守へ被二仰付一、同組庵原三右衞門、西山與左衞門、深澤新右衞門三人へ御加增拜領、百俵被レ成、殘之組之者ニハ銀子被レ下之。

大内日記二月廿四日之條

一、牧野佐渡守組淺草火事以後、權現樣御宮御道具、彼是番仕しゟ御褒美、不レ殘銀子被レ下しゟ事。

——寛永日記

寛永十九年二月十九日之七ッ時分ニ、南風殊之外つよし。淺草皆々燒申しゟ。駒

かさたうれ𑖨きより火事出來ニて、町寺いつ𑖨も不ㇾ殘やけニて、二王門之火五重れ堂へつきて、夫ゟ本とうへつき、𑖨き宮皆々やけ、いみしへゟ御座いかのゲ書し黑の繪馬其外いつ𑖨も不ㇾ殘い。淺草中之事、宮數いつ𑖨もかきたてら𑖨そい。殊之外大火事ニゐい、定ゐ後日ニかき物出可ㇾ申、中〳〵不ㇾ被ㇾ申い。以上。

——誠貳日記

十九日〇寛永十九年二月。淺草觀音堂火事ニ付、御歩行衆爲ㇾ注進之、道番之ゑとく置可ㇾ申由上意ニ付、牧野佐渡北條新藏曾我太郎右衞門三組闈取ニゐ出ル。

——御徒方萬年記

十九日〇寛永十九年二月。淺草觀音堂火あり。御宮あるにより、徒頭牧野佐渡守親成・北條新藏正房・曾我太郎右衞門包助・三組の所屬をして三番に分ち、かしこにまかり、火のさまを注進せしむ。ゑかるに佐渡守親成一番に御宮へはせつき、勅額をはじめ御神寶とりいだせしとぞ。紀伊記。御徒方萬年記。〇落穗集・誠貳日記には、神祖の御遺命にて、日光山の外、府内において、も御宮をいとふみ、諸人に參拜をゆるさるべし、さりゑから別に一山を興隆するに及ばず、御祈願所の事ゑれば、淺草寺觀音堂の傍に手がるくいとゑむべしと有しをもて、日光の御宮構造と同時に、淺草御宮をも經營あり、日光御遷座の同時に、淺草にても遷座の式行はる、其時の別當觀音院と内藤右近政親交り厚かりしかば、山門近邊に家をつくりすみしが、其家より火をあやまち、折ふし南風はげしく山門へ吹付、本堂はじめ諸堂こと〳〵くやけて、御宮までに及びたり、其後觀音再建ありし時、御宮の事、さきに御神體をば紅葉山にうつされ、拜殿のみの事なれば、再造の沙汰に及ばれずとゑり、この御宮のあとは、今淡島明神の祠あるほとりといへり。一說には、この火駒形堂邊より起るともしるしたり。然るに寛永十二年七月十二日の日記によれば、本城の御宮を淺草知樂院に下され、其境内に營造せしめられ、費用金下さるとあれば、日光同時に御造營は、紅葉山にて、淺草寺境内へ御造營のことは、その疑ひなきにあらずといへども、しばらく存して後考に備ふ。

廿日〇寛永十九年二月。三家まうのぼり御けしき伺はる。昨日淺草の火事によりてゑり。〇中略。

廿一日〇寛永十九年二月。歩行頭牧野佐渡守親成、一昨日火災のとき速に淺草寺にはせまいり、御宮の御神寶共をとり除、勤番せしとて、其組頭山本市右衞門某廩米百五十俵を采邑にかへ、百石加へて二百五十石たまはり、同所屬庵原三右衞門正忠・西山與左衞門某・深澤新右衞門某三十俵くはへて百俵づゝにゑしたまはり、其餘歩行士には褒銀を下さる。同じ時にはせまいりし坊主等へも銀給はる。その時まうのぼらざりし使番堀三右衞門直景・川勝丹波守廣綱は、日夜廿日、が間宿直命せらる。又其日まうのほるといへとも、早くまかんでし能勢次左衞門賴重・石川彌左衞門貴成は、五日の間晝夜詰切せしめらる。

——大猷院殿御實紀

同○寛永。十九年壬午九月閏

二月十九日淺草寺燒亡。（○此時木村市兵衛といふもの、古繪馬を助く。○中略。此火事は門前をりの失火なり。）

——武江年表

廿八日戊辰（○寛永十九年（紀元二三〇二年）二月。○戊辰、三正綜覽。）下館（○常陸國。）城主松平頼重（○右京大夫。）高松城（○讃岐國。）十二萬石ニ轉ジ、上下二邸ヲ賜フ。（○寛永日記。寛政呈譜。大猷院殿御實紀。）

松平賴重邸

松平賴重邸事蹟

松平賴重賜邸　傳フル所左ノ如シ。

二月廿八日（○寛永十九年。）

一、水戸右京大夫（○松平頼重。）讃岐之内ニ而城地共拾貳萬石御拝領、幷屋敷上下御拝領。（萬年記）

同

一、右ニ付尾紀兩卿（○徳川義直。徳川頼宣。）も爲御禮御登城、謁御目付。

家譜

一、高松請取御用中山東市正信正罷越、同七月十日歸府。——寛永日記

水戸中納言頼房長男

頼重（從四位上。左近衛權少將。稱讃岐守。幼名竹丸。又改右京。）

○松平。

一、寛永五戊寅年十一月二日十七歳ニ而從五位下ニ改右京大夫。

一、寛永十六己卯年七月十三日常州下館五萬石被下置、御直被仰出。（○中略。）

一同月（○寛永十九年二月。）廿八日、依召致登城、所於御座之間讃岐國高松十二萬石被

下置、御直ニ被仰出、再御前ニ而被爲召、屋敷被下置旨、御直ニ被仰出。

一、同年（○寛永十九年。）三月七日致登城、領地拝領幷屋敷拝領之御禮申上、御太刀馬代白銀三百枚御小袖二十献上仕。支度出來次第入部可仕旨、以御懇之上意被仰出。

若君様（○徳川綱。）御太刀馬代白銀百枚巻物廿献上仕。——寛政呈譜

廿八日（○寛永十九年二月○中略。）松平右京大夫頼重、常陸下館を轉じて、讃岐國高松の城主になされ、十二萬石を給ひ、宅地をも上下二所にてくたさる。

——大猷院殿御實紀

謂フ所ノ上下二邸、上屋鋪ハ往古江戸繪圖御成橋通ニ「松平右京（○頼重。）ト見ユル者ナル可シ。「毛利長門（○秀就。）下「屋敷」ノ南ニ隣ニ隣ル。披雲閣年譜（○高松藩記錄、「寛永二十年癸未八月三日徙居櫻田賜邸。」ト記ス。或ハ本邸ヲ指ス歟。下屋鋪ハ新添江戸之圖三田札之辻ニ「松平右京下」ト有リ。寛文四年櫻田上屋鋪（○下文記ス所ノ御成橋内邸歟。）ヲ上屋鋪ト爲スト云フ。

是月（○寛永十九年（紀元二三〇二年）二月。）ヨリ五月（○寛永十九年（紀元二三〇二年）。）ニ至リ、天下飢饉シ、餓莩

道路ニ相望ム。乃チ市中ニ假屋ヲ設ケテ粥ヲ給シ、有司ニ命シテ鄕里ニ送還セシム。〇變災篇參照。

飢饉　變災篇ニ記述ス。

一、同年〇寛永十八年。ノ暮ヨリ十九、廿年ノ春迄、天下飢饉、依テ餓死ス。犬乞食道路ニ散亂ス。〇寛永十九年二月。十日或五日ニ。

——玉露叢

一、凡自當月至五月、天下大ニ飢、饉死者滿巷、士民商夫爲乞食幾千萬ト云フヲ不知、皆一衣ナク、赤裸ニ成テ、古莚古薦を纏身、伏路頭、或行市中。世俗名之謂薦被。于時依仰、自奉行所命町奉行、尋乞食ノ本國、其國主或地頭代官令歸其國、其餘ハ自奉行所新ニ造小屋、旦暮煮粥施行之。

——天享吾妻鑑

寛永十九年壬午の春より夏過迄大旱魃にて、國々飢饉にて、萬民飢に及び、牛馬餓死多し。或は道路にぬしまろひ、池川に身ゑなくる者其數を知らず。往還の旅人道ゑよけ、馬乘物も往來自由ならず。所々の何某されがしなといそれし者も、爲方盡て、莚茭を身にゐとひ、乞食と成者多けれそ、ゐして小屋〳〵の者共は語るに不及、殊に江戸日本橋に茭かふり幾千人といふ數をしらず。有德なる町は、日々施行を引て、彼等を助成す。去年〇寛永十八年。去々年〇寛永十七年。世中作の違ひ、今年〇寛永十九年。又大きに日てりして、諸國青苗つきて、農人とも箸に目鼻を付さることく成て、山田をかへす力もなく、五穀の種も持されぞ、田畑そし〳〵永不となりされば、御調物さへ怠ぬれバ、諸侍の所務もならず。町人職人及遊民共、諸事逼迫の體なり。又よる人の咄しにも爰の辻には餓死何人、かしこの街にそ何十人有しなと云へり。淺ましき事共多くて、人間の命此時に絶やすらんと、世ゑあやふまぬ者はなかりけり。こやうに五穀不足の處に、上樣御藏奉行衆數十人申合、町人共にも金持共を大勢かさらひ、國々におゐて米穀夥しく買取、一圓に出さず、相場高直になして、莫大の利潤をとらんと相さくむ。去程に高直に成、小判一兩を以米六斗をこふ。六斗の米なゑも買取程に、諸國日ゑ追て衰微しけり。誠に極惡大欲の企、罪なき人民ゑ餓死に及はす事、人の敵國土の禍前代未聞の惡人なり。たま〳〵人間と生を請、幸なるかな辱も神國に生れ、聖人賢世の折ゐゑ、富貴財滿の家を繼、可難有事と知るなゑ、假初にも正路を守て、仁心をも專一と思ふへき身の、天道にも聖れず、人道をも憚ゐゑず。數萬の金銀にて積惡ゑ作せり。されは萬民ゑなやます其罪天命に

やおとされけん、此事御公義へも聞へ、御藏衆幷町人共、妻子共に御成敗なり。其人數六十九人の由。丙十六人は切腹、三十六人は御成敗、十七人は籠舍、七月十八日に如レ件。此頃よこさんしよと云うさむやり、其後豊也。

——正事記

勘定頭任命

勘定頭任命事蹟

三月三日癸酉（○寛永十九年（紀元二三〇二年）○癸酉三正綜覽。）幕府勘定頭ヲ置ク。即チ後ノ勘定奉行也。（○藩翰譜。德川理財會要。江戸幕府職官考。寛政重修諸家譜。大猷院殿御實紀。明良帶錄。御役人代々記。御役人系圖。柳營補任。官職沿革史。）

勘定頭任命　德川幕府ニ於テ勘定奉行ノ事ヲ行ヒタル者慶長中ヨリ之有リ、寛永十二年ニ至リ組織分掌略備ハリ、同十九年三月三日始メテ勘定頭ノ稱有リト云フ。所傳區々孰カ是ナルヲ知ル能ハズ。姑ク藩翰譜・寛政重修諸家譜・杉浦正友譜・理財會要・江戸幕府職官考等ニ從フ。

勘定奉行

慶長八年癸卯十二月、始テ所務奉行ヲ置キ、大久保長安（石見守。）ヲ以テ之ニ充ツ。是ヲ勘定頭ノ創始ト爲ス。（吏徵。別錄。是ヨリ先キ永祿七年甲子三河一國始テ平定スルヲ以テ、本多重次（作左衞門）、高力清長（與左衞門）、天野康景（三郎兵衞）ニ命ジ、國務及ヒ聽訟ノ奉行ト爲ス。是ヲ岡崎ノ三奉行ト稱ス。德川氏奉行ノ職目ヲ置ク、蓋シ之ヲ以テ始ト爲ス。東照宮御實紀。藩翰譜卷十八。）

寛永十九年壬午三月三日、始テ勘定頭ヲ置キ、伊丹康勝（播磨守。）酒井忠吉（紀伊守。）杉浦正友（内藏允。）ヲ以テ之ニ充ツ。

勘定頭　三員。

老中支配（老中ノ司管ニ屬スルヲ謂フ。）

芙蓉問（城内營中ノ班席ヲ分畫シ、職務ノ等差ヲ瓶別スルヲ謂フ。）

諸大夫

郡國ノ吏務及ヒ貢租ノ賦課ヲ管掌ス。

是ヨリ先キ慶長八年癸卯十二月所務奉行ヲ創置スルノ後、松平正綱（右衞門大夫）郡國ノ吏務及ヒ貢租ノ賦課ヲ兼掌ス。正綱晩年ニ伊丹康勝ヲ推薦シテ、共ニ其職務ニ從事ス。正綱康勝ノ退職スルヤ、爾後代官伊奈某（半左衞門）大河内某（金兵衞）繼イテ其職務ヲ管理シ、又タ代官曾根吉次（源左衞門）之ヲ兼掌セシニ、此ニ至リ始テ勘定頭ヲ設置シ、此三名ヲ擢用ス。是レ勘定奉行ナリ。且ツ從前町奉行ノ上官タルモ、此三名ヲ擢用スルノ後、之ヲ其次官ニ班ス。（藩翰譜卷二。同卷八。役人代々記別錄。）

——德川理財會要

●勘定所（○中略。）

鎌倉ノ時、奉行アリテ結解勘定ヲ掌ル。戰國ノ時ニ至リ、諸家勘定奉行アリ。（東鑑。）

甲陽軍鑑。由良家傳記。慶長見聞記。武家名目抄。慶長ノ初、大久保長安石見守。租賦會計ノ事ヲ管ス。慶長年錄。野史。

職掌錄。同十四年、松平正綱右衞門大夫。郡國ノ吏務租稅ノ結解ヲ掌ル。其後伊丹康勝播磨守。代官伊奈某半左衞門。大河內某金兵衞。曾根吉次源左衞門。正綱ト與ニ郡國ノ租賦及ヒ關東八州ノ訴訟ヲ掌ル。當時勘定奉行ノ職未定ラズ。正綱以下五人、相謀リテ專財政ノ事ヲ管ス。溝翰譜。理財會要。東武實錄。寬永十二年職務ヲ規定シ、五人ヲ以テ二番ニ分チ、一月每ニ交替勤務ス。凡代官公用訴訟及ビ百姓ノ訴訟ハ、之ヲ詮議シ、小支ハ之ヲ專決シ、決シ難キハ會議ニ出シテ之ヲ議決シ、尙決シ難キハ、之ヲ上申スベシ。凡代官ト百姓トノ訴訟ハ、之ヲ詮議シ、會議シ、會議ニ出シテ之ヲ議決スベシ、モシ決シ難キハ之ヲ上申スベシ。凡藏入ノ名主ト、百姓トノ訴訟ハ、之ヲ詮議シ、小支ハ之ヲ專決シ、決シ難キハ會議ニ出シテ之ヲ議決シ、尙決シ難キハ上申スベシ。凡藏入ノ百姓ト、給所トノ訴訟ハ、其組ノ番頭ト詮議シ、之ヲ會議ニ出シテ議決スベシ、モシ決シ難キハ之ヲ上申スベシ。凡藏入ノ百姓ト寺社領百姓トノ訴訟ハ、寺社奉行立會ニテ詮議シ、之ヲ會議ニ出シテ議決シ、モシ決シ難キハ、之ヲ上申スヘシ。凡藏入ト給所トノ間ニ起ル山埜水利ノ訴訟ハ、其組ノ番頭ト立會ニテ詮議シ、之ヲ會議ニ出シテ議決シ、モシ決シ難キ

ハ、撿使ヲ以テ上申スベシ。敎令類集。同十九年三月始メテ勘定頭ヲ置キ、更ニ伊丹康勝・酒井忠吉紀伊守。杉浦正友內藏允。ノ三人ヲ以テ之ニ補ス。溝翰譜。理財會要。役人帳。參取慶弘紀聞。野史。篡略。而シテ康勝ヲ以テ始テ佐渡奉行ノ兼官ヲ廢ス。天和二年十二月勘定奉行ヲ諸大夫ニ班ス。是ヨリ先勘定奉行ノ職或ハ諸大夫、或ハ布衣、或ハ無爵タリ。是ニ至テ之ヲ一定ス。

——江戶幕府職官考

十日〇寬永十二年十一月〇中略。關東公料の地幷に農民の訴訟は、松平右衞門大夫正綱・伊丹播摩守康勝・伊奈半十郎忠治・大河內金兵衞久綱・曾根源左衞門吉次五人、一月つゝ二番にして勤むへし。今の勘定奉行の職掌。

十六日〇寬永十九年八月。留守居酒井和泉守忠吉、杉浦內藏允正友、後閣宿直を免され、國用の事査撿すへしと命せられ、曾根源左衞門吉次も和泉守忠吉・內藏允正友幷伊丹康勝入道順齋と共に、租稅財穀出入の事を司らしめられ、伊奈半十郎忠治、今まで國用の事にあつかりしをゆるされ、今より後關東諸代官の得失を糺し、堤坊修築の事の勾當すべしと仰付らる。

——大猷院殿御實紀

御勘定奉行、其始勘定頭とも稱さり。諸國代官を統領し、收稔、徭役、金穀出納、及關八州以内人民の訴訟を裁判することを掌る。大任なり。惣て關東八州の人民の訴訟として、領主は決斷ニ及ひ難きを、添書添使を以て差出はるものあり。寛永十五年（九カ）三月始て三員を置く。御老中支配さり。是より先き慶長八年大久保長安を以て所務奉行とは。蓋し勘定奉行は濫觴なり。後に四員となる。内二員を公事方とは。諸國代官所は訴訟を判は。常に評定所に參務は。二員を勝手方とは。租税の收納、用度の會計を掌る。共に月番あり。從五位下に叙し、職高三千石なり。大手門の内に下勘定あり。御勘定衆は之に勤務す。又營中ニも勘定部屋あり。訟獄を聽く所ハ、元來勘定所なりしが、天保十三年以來公事方奉行の官邸に於て之を行へり。吟味役四員ありて、二員ハ訟獄の裁判を司りて、評定衆式日立合に列し、他の二員ハ代官所の租稔以下、金穀出納公文等を勘撿はることを掌る。專ら用度を勘る職なるが故に、經濟の才ある者之に補は。或は遠國へ派出はる事あり。天和二年始て、此職を置く。中の間に列は。但し公事方に關せされバ、聽訟の任なし。

御勘定奉行

慶長十四年松平右衞門大夫正綱始役は。萬治の頃ゟ御勝手方公事方と分れ、御勝手ゟ、一切御用筋國郡の事迄取扱ふ。關東筋に知行有之小身の衆、川欠普請自力及ひ難き所ハ、其頭支配へ相願ひ、頭より御支配は相願、此場へ下り、見分差添遣し、御普請有之處、當時御省略中ゆへ相願ひ出ましは旨、併一村亡所ニ及ふ程の事ニて、自力に難及ハ、相願ひて、見分の上、可被仰付御旨也。高掛り國役金御普請金納ゟ、此場の掛り納證文ハ下勘定所へ差出は。子年の人數調高帳も懸り也。其外大名衆所替等ハ、波之間ニて被仰渡ゐつて、家來ゟ下勘定所へ出て、委細調等あり。御殿詰御勘定同吟味役なとあり。御代官筋ゟ段々歷昇しさる仁利ニ敏き故、漢の公孫弘ゟ三許の如き御益筋と號し、種々上計は。公事方ハ、御領の百姓の公事、御料計ニてなく、惣して百性方の公事、關八州の分ハ多く江戸へ持出は。地頭ニ多自捌屆難きハ、添翰添使を以て差出は。駈込訴ハ、當人留置、其地頭の家來呼出し引渡、目安相渡は。御老中方は駈込訴も同斷、誰殿御差圖と申渡は。差越訴ハ取上ニ不及差戻す。無名訴狀捨文ハ燒捨。昔神尾若狹守天領ニ繩を入れ、松平右近將監心得違と成しよし沙汰せり。明智の川井越前守ハ、四文錢を鑄させ、夫ゟ後續て功を立んと、寛政の小笠原和泉

守を酒造を世話し、文化の肥田豊後守ハ二割減しを考ふ。何ぞも人情ニ符合ほ。其基ひとそる所ハ、常憲院様〇徳川綱吉。文昭院様〇徳川家宣。御兩代之奢侈花麗ニて失墜、莫太の御入用あれハ、御藏も空虚と成り、有徳院様〇徳川吉宗。天下を知し召給ふと、俄ニ是を埋んとそる故、御儉約を被仰出、其上古金を以て新金ニ吹直しなれバ、物の品より金の位賤しなれハ、人情の及ふ所いろんともすべうらほ、自然の勢ひあれそ、諸色高直と成さり。剰へ米穀を貴ほして金銀を貴ぶ、若國家不慮の事いらハ、金銀を積とも、かてよハ食まし、金銀を以て米穀ニ替るハ、大平の下臈の業なり。其職ニ關る人、能々思慮をべき事也。兼帶ハ道中奉行也。當時關東御郡代、是より兼ぬ。久世丹後守ハ此場より御小性組番頭ニ昇りさり。職ニ堪さる人材といふべし。

一、御勘定奉行ハ國を治め民を養ふ事を司る職ゟ侍ゟハ、重き御役と見へさり。むらしハ是も御老中の御兼勤らゟ、其後松平右衞門大夫殿〇正綱。當役勤申されるニ付、夫まてハ町奉行より上さるといへり。伊丹播摩守殿〇康勝。酒井紀伊守殿〇忠吉。杉浦内藏允殿〇正友。御役之比より、町奉行衆の次よ成ゟさる。播磨守殿ハ、伊丹喜之助とて、御近習まて輕き御奉公勤らゝれしを、才智有、地方鍛練

——明良帶錄

ふる人とて、御取立、當役ゟ被仰付、毎度御加增被下、壹萬石領せらゟ、後ニハ剃髮伊丹順齋と云々るゟ、御勘定奉行ハ勤らる。紀伊守殿ハ、酒井讃岐守殿〇忠勝。舍弟あれハ、俗姓も貴々れ、共、番頭ゟも成給ハほ、此御役被仰付。内藏允殿ハ、小拾人より成立て、御納戸頭勤られしゟ、算勘ゟ達し申されさるとて仰付らゟ、三人同時の御勘定奉行也。右之内紀伊守殿と内藏允殿ハ、御留守居に成ゟて も御勘定奉行猶被勤さるといへり。人數ハ、其以後も三人或ハ四人ゟて不定あり。むらしハ、當御役ゟ成る人、三千石の高ニ被仰付し故、御加增有さり。曾根源左衞門殿小身あるニ付、大分御加增被下高三千石成ゟさり。御役も久敷勤仕せられ、隱居してハ曾根覺齋と改られしゟ、御役中諸大夫ニハ被仰付さる也。順齋の子息伊丹藏人殿〇康長。御勘定奉行ニ成ゟ、諸大夫ニ被仰付て、名を是も伊丹播磨守殿と改らゟしハ、萬石以上の故あるべし。岡田豊前守殿ハ、御役以前伊勢御宮御造營奉行勤らゟて、其時諸大夫ゟ被仰付さり。此外之衆ハ御加增被下、三千石已上ニハ成ゟされ共、諸大夫ニ被仰付入ハ無之、何ぞも布衣まて居られしあり。

——御役人代々記〇大藏省本。

御勘定奉行當役布衣。天和二戌十二月廿六日諸大夫補任。

市街恢弘時代

家康公御代ゟ家光公御代迄一人ニ而相勤。○慶長十四酉二月十八日任○慶安元子六月辭。

寛永十八巳年正月十八日ニ任(イ、寛永十九午八月十六日御勘定吟味役ゟ。(イ、寛永七午十月東國撿見關西洪水撿見ニ而撿見勘定頭ト成、同十三年惣勘定頭ト成)○寛文元丑十一月十九日御免。

寛永十九午三月三日任(イ、寛永九申五月三日御納戸頭ゟ。同十二亥五月廿一日佐渡奉行兼帶)○萬治二亥七月廿三日辭。

右同日(○イ、寛永十一戌二月廿五日御留守居に)○明暦二申二月十一日辭。

右同日、三日三日任、此時四人也。(イ、寛永十二亥十一月九日勘定吟味役ゟ)○明暦二申正月十一日辭。

御勘定頭

寄合頭ゟ○慶安元子御免。

寛永九申五月三日御納戸頭ゟ○同十二亥五月廿一日佐渡奉行兼帶○萬治二亥七月日辭。

同日同斷ゟ。三千石加増○同十二亥十一月九日御留守居。

同日。○同十一戌二月廿五日御留守居。

寛永十九午二月三日詰並ヨリ○寛文二戌二月廿七日御代官一色内藏介を打果ス。

寛永十九午八月十六日御勘定吟味役ゟ○寛文元丑十一月十九日辭。

寄合頭ゟ
松平右衛門大夫 イ正政綱
曾根源左衛門 元源藏 吉次

御留守居佐渡奉行兼役
伊丹播磨守 後順齋 康勝

御留守居兼役
酒井紀伊守 元和泉守 忠吉

同
杉浦内藏之助 イ充 正友

——御役人系圖

松平右衛門大夫 正綱
伊丹播磨守 康勝
酒井紀伊守 忠吉
伊丹藏人 播摩守 勝長
曾根源左衛門 吉次

——柳營補任

播磨守源康勝○伊丹。ハ、○中略。御納戸頭を經て、終に御留守居に至る。○註略。中頃松平右衛門大夫正綱を共に、郡國の吏務貢賦の結解等をたゞさせり、寛永十九年三月三日をしめて勘定頭三人を置きし時、其第一に撰きき。年老て頭の毛ことく〳〵禿ありたきハ、自入道して順齋と號す。諸役人帳を按せるに、此人年頃松平右衛門大夫と同しく天下吏務の奉行人たり。後に二人なからいさゝハ御勘氣を蒙る事有て蟄居せり。其跡をハ御代官伊奈半十郎大河内金兵衛二人ありに司とる。其後是を御代官曾根源左衛門其事を兼司せきり。こゝに於て播磨入道順齋・酒井紀伊(忠吉)杉浦内藏之助三人をそろへて御勘定頭にふさる。是ハ御勘定のしらの始也と云々。しかきハ、伊丹のくのことき職にある事兩度ふり。此人農をつせ也、商を通じ、民せとをに利を同うしける。名譽天下の人語り傳ふる事誠におほし。

——藩翰譜

正綱初正久。長四郎。右衛門佐。右衛門大夫。從五位下○松平(大河内)。

○上略。三月二十五日○慶長八年。從五位下右衛門佐に叙任し、のち右衛門大夫と稱す。○中略。のち駿府にをいて板倉内膳正重昌・秋元但馬守泰朝とともに御近習の出頭人となり、正綱は勘定奉行を兼ぬ。○中略。三年○寛永。○中略。これよりさき御書院御小性組の番頭をかねつとむ。○中略。六月二十二日○慶安元年。卒す。年七十二。

康勝（喜之助。播磨守。從五位下。剃髮號順齋。○伊丹。）○上略。十四年○天正。より台德院に近侍す。（時に十二歲。）そののち御納戸頭をかぬ。○中略。慶長五年○中略。そののち御勘定奉行にすゝむ。○中略。寛永元年二月大猷院に附屬せらる。このとき從五位下播磨守に叙任し、○中略。十一月○寛永十年。三日よりなを御勘定奉行を兼。○中略。十六年○寛永。三月十日剃髮して順齋と號し、のち御留守居とあり、兼役もとのごとし。慶安三年七月十一日職を辭すといへとも、なほ佐渡國を支配する事もとのごとし。○中略。承應三年六月三日卒す。年七十九。

忠吉（童名小鍋。和泉守。紀伊守。從五位下。致仕號宗山。○酒井。）○上略。御書院番とあり、○中略。寛永元年父忠利○酒井。大留守居たるの處、衰老せるにより、其職事を見習ふへきむね仰をかうぶる。○中略。六年○寛永。正月五日從五位下和泉守に叙任し、○中略。十年○寛永。二月二十七日馬上同心六人徒同心四十人を預けられ、御裏門番を勤む。○中略。十一年○寛永。二月二十五日御留守の事を司り、關所及び諸家の人質を奉行し、御旗本八十餘騎を隊下に屬せられ、與力十騎同心五十人を預けらる。○中略。十九年○寛永。八月十六日奥方

の番をゆるされ、財用出入の事を兼つとむ。○中略。四年○慶安。七月二十二日兼役をゆるされ、もとの如く大奥の事を沙汰す。○下略。

正友（一十郎。市右衞門。越後守。內藏允。從五位下。○松浦。）○上略。のち御納戸の頭を勤め、寛永三年八月台德院殿洛にのぼらせたまふのとき供奉し、十九日從五位下越後守に叙任す。十二年○寛永。十一月九日御留守居とあり、十六年十二月十二日正友及ひ伊丹順齋・牧野內匠頭信成・曾根源左衞門吉次とともに、諸賄穿鑿の事をうけたまはり、○中略。三月三日○寛永十九年。勘定頭をかぬ。八月十六日○寛永十九年。奥方の番をゆるされ、曾て命せられしもろ〳〵の費用をたゞすへきむね仰をかうぶる。○中略。四年○慶安。七月二日勘定頭をゆるされ、御留守居に復す。○下略。

——寛政重修諸家譜

內田氏等邸宅

內田氏等邸宅事蹟

廿六日丙申（○寛永十九年（紀元二三○二年）三月。○丙申、三正綜覽。）小姓組番頭內田正信（○信濃守。）其他邸宅ヲ賜フ者有リ。（○寛永日記。）

內田氏等邸宅　寛永日記ニ據レバ、

一、（萬年記）內田信濃守（○正信。）ニ秋山修理（○正俊。）屋敷被下、服部玄蕃（○政久。）屋敷筒井內藏（○忠重。）ニ被下、本田主稅（○本多政道歟。）屋敷阿部修理（○政澄。）息（○阿部正令。）へ被下。

木挽町狂言座開設

木挽町狂言座開設事蹟

是月（○寛永十九年（紀元二三〇二年）三月。）木挽町五町目（○京橋區。）ニ狂言座ヲ許可ス。稱シテ山村座ト曰フ。（○戯場年表。）

木挽町狂言座開設　戯場年表ニ據レバ、

同（○寛永。）十九年壬午

三月、岡村小兵衞木挽町五丁目ヨリ狂言座免許、座名を山村座といふ。二代を長兵衞、三代目養子七十郎改五右衞門、又改山村長太夫と成。四代目長太夫隱居して剃髮す。名を淨閑と改。此養子五代目長太夫の時、正德四年午二月八日斷絶せ。

正保元年甲申

山村座よて中村數馬丹前六法の狂言の事より、看物人の內きおひ組同士よて口論と成、遂よ佛小左衞門といへるをの牢舍申付らる。

同（○正保。）四年丁亥

山村座よて狂言踊りといへるを工夫して、あいだへせりふを入、まさ幕毎に此處何の段と大書して、舞臺の柱へ張出ス。是を段付と云、掛板の始也。

歌舞妓年代記武江年表ノ類、山村座開設ヲ正保元年ノ事トス。

譜第諸侯交替期

譜第諸侯交替期事蹟

正保元年甲申十二月十六日改元。

五月十九日（○中略。）○木挽町六丁目岡村長兵衞芝居始る。二代目より後、山村長太夫座と改む。（正德四年よ至リ芝居斷絶ス。）

——武江年表

五月九日戊寅（○寛永十九年（紀元二三〇二年）○戊寅、三正綜覽。）譜第諸侯ノ交替期ヲ定ム。（○國朝舊章錄。寛永小說。寛永日記。大猷院殿御實紀。）

譜第諸侯交替期　左ノ如シ。

一、同年十（○寛永十九年。）五月九日、御普代家六月交代相定。九月朔日よ御近習御普代家關東領知之輩半年代定。

——國朝舊章錄

一、大猷院樣御代までハ御譜代衆常江戸、國持衆も參勤之時節、たゝと不相究處、國持衆四月交替と被仰出、其後御譜代衆二月ゟ六月ゟ勝手次第可被仰付ハ間、願ハへと被仰出、其時何も相談にて相願、六月に相究ハ由。（○寛永十二年の條參照。）

——寛永小說

九日（○寛永十九年五月○中略。）小笠原右近大夫忠眞・松平周防守康映・松平和泉守乘壽・松平越中守定綱・松平山城守忠國・植村出羽守家政・永谷伊勢守勝隆・松平丹波守光重・水野監物忠善・內藤帶刀忠興・堀七郎五郎直時・牧野內膳正康成・諏訪出雲守

忠恒・眞田隼人正信重・秋田河内守俊季・前田右近利意・堀美作守親昌・大關土佐守高增・松平若狹守康信・岡部美濃守宣勝・石川主殿頭忠總・菅沼織部正定芳・戸田左門氏鐵・本多下總守俊次・永野隼人正忠清・本多能登守忠義・松平玄蕃頭清昌・土岐山城守賴行・內藤豐前守信照・內藤兵部政晴・牧野播摩守定成・鳥居主膳正忠春・眞田伊豆守信之・眞田內記信政・太田原左兵衞政清、今までは思召むねありて仰出されざりしが、來年二月より番をわかち交替して、封地の政務をはからふべしと命せらる。

——大猷院殿御實紀

寬永日記是年〇寬永十九年。九月朔日ノ條、又左ノ如ク見ユ。

九月朔日〇寬永十年〇中略。

一、每歲八月交替、午年在江戶。

青山大藏少輔〇幸成。　永井日向守〇直清。　太田備中守〇資宗。

高木善次郎〇正治。

一、同斷、未年在江戶。

永井信濃守〇尙政。　井上河內守〇正利。　內藤志摩守〇忠重。

山口但馬守〇弘隆。　板倉主水佐〇重繼。

一、每歲於江戶越年、午年在江戶、半年替。

奧平美作守〇忠昌。　稻葉美濃守〇正則。　北條出羽守〇氏重。

三浦龜千代〇安次。　西尾丹後守〇忠照。　松平太郎八〇重正。

森川半彌〇重政。

一、同斷、未年在江戶。

松平式部大輔〇榊原忠次。　土井遠江守〇利隆。　秋元但馬守〇泰朝。

酒井日向守〇忠能。　阿部市正〇正令。　土屋民部少輔〇利直。

西鄉孫六郎〇延員。

右之通可交替之旨上意之趣、老中被傳之。

廿二日辛卯〇寬永十九年(紀元二三〇二年)五月〇辛卯、三正綜覽。書院番高林利春〇河內守。會我近祐〇又左衞門。小姓組江原宣全〇興右衞門。・興津宗能〇兵左衞門。・大番河野照良〇庄大夫。青木義繼〇新五兵衞。・富田某〇庄之助。・小宮山宣興〇市內麴町區。傳九郎。ヲ奉行トシテ、龍口〇市內麴町區。ヨリ錢龜橋〇市內麴町區。ニ至ル堀浚ヲ爲ス。命シテ松平正綱〇右衞門大夫。・秋元泰朝〇但馬守。・島田幽也〇利政。及町奉行幷ニ目付宮城和甫〇越前守。ニ協議スル所有ラシム。〇寬永日記。大猷院殿御實紀。寬政重修諸家譜。

龍口堀浚　左ノ如シ。

五月廿二日○寛永十九年。

一、龍口より錢龜橋迄御船入自由有之い様ニ、可浚御堀之旨ニ付而、

高林河内守○春。利

曾我又左衞門○祐。近

江原與右衞門○宣全。

河野庄大夫○照良。

富田庄之助

右奉行被仰付之間、松平右衞門大夫○綱。正秋元但馬守○泰朝。幽也○島田利正。兩町奉行宮城越前守○甫。和ニ可相談之旨、老中傳之。

——寛永日記

廿二日○寛永十九年五月○中略。龍口より錢龜橋迄の水路浚利奉行を、書院番高林河内守利春・曾我又左衞門近祐・小姓組江原與右衞門宣全・與津兵左衞門宗能・大番河野庄大夫照良・青木新五兵衞義繼・富田庄之助某・小宮山傳九郎宣與に仰付ら れ、松平右衞門大夫正綱・秋元但馬守泰朝・島田利正入道幽也・幷に町奉行及ひ目付宮城越前守和甫に議すへきむね面命せらる。

——大猷院殿御實紀

利春○彌市郎。高林。河内守。從五位下。實は島田幽也二男。

○上略。そののち御書院の番士とあるを、

をうけて、辰の口より錢龜橋にいたるまで御堀浚の奉行をつとむ。

近祐○權左衞門。曾我。又左衞門。

○上略。十年○寛永。御書院番にうつり、○中略。

浚の奉行をつとめ、○下略。

宜全○與右衞門。江原。今の呈譜親全に作る。

○上略。後御小性組の番士とあり、○中略。

口より錢龜橋まて堀濬の事を奉行す。

宗能○左近助。與津。兵左衞門。

○上略。のち御書院番にうつり、○中略。十九年○寛永。五月二十二日おほせにより

て、龍口より錢龜橋までの御堀浚の奉行をつとむ。

照良○庄大夫。今の呈譜通正に作る。河野。

某年台德院殿にめされて大番に列し、○中略。十九年○寛永。五月二十二日仰を

うけたまはりて、龍口より錢龜橋まで御堀濬の奉行をつとむ。

義繼○虎之助。新五兵衞。遠江守。從五位下。

○略。上十九年○寛永。五月二十二日仰をうけたまはりて龍の口より錢龜橋にいたるまで堀浚の奉行をつとむ。

勝親傳九郎。致仕號二少庵一。今の呈譜宣輿に作る。

○小宮山。○略。上のち大番をつとめ、○略。中十九年○寛永。五月二十二日仰をうけて龍の口堀浚の事を奉行す。

——寛政重修諸家譜

〔參考〕

是ヨリ先五月六日○寛永十九年。將軍家光隅田川ニ遊ビ、歸途深川ヨリ舟ニ乘シテ錢龜橋ヲ入ルニ、汐引キ進マズ、船手方責問セラレタル事有リ。茲ニ浚渫ノ擧ヲ見ルニ至レル者ナル可シ。

五月六日○寛永十九年。

一、辰後刻角田川筋へ御鷹野ニ出御。河烏鷺等御物數被レ遊酉後刻還御。

一、還御之節、深川ゟ御船ニ被レ爲レ召之處ニ、鹽引申し故、錢龜橋ゟ御座船を漕戻、後藤橋ゟ被レ爲レ上し。依之今日御供之船手面々召殿中一、爲二御役儀一之間、常々鹽時等不二相考一、不届之仕合、曲事被二思召一也。向井兵部儀乘二御座一之間、別ゐ不届

ニ被二思召一し、急度雖レ可レ被二仰付一、若輩之上、初ゐ乘二御座船一ニ付ゐ、被レ宥二其科一て、止二出仕一旨也。次ニ間宮虎之助乘二御座船棹當し共一も不レ存躰、不届思召也、是又今度之儀ハ御赦免、被二押出仕一也。次ニ小濱彌十郎儀、曲事ニ雖二思召一、御先船之次ニ乘之間御赦免、雖レ然御目見仕間敷し旨也。次ニ天野孫左衞門、溝口半左衞門、鹽時之考無レ之儀、不調法ニ雖二思召一、頭役被二仰付一、其上御船とも不二乘出一之間御赦免、自今已後可二相嗜一旨也。右何も一人宛於二竹間一、內藤信濃守、久世大和守上意之趣傳レ之。

——寛永日記

是日○寛永十九年（紀元二三二年）五月廿二日。米廩ノ奉行黒田某○次郎右衞門。其他ヲ諸家ニ預ケ、七月八日丙子○寛永十九年（紀元二三二年）。○丙子三正綜覽。之ヲ處刑ス。此外處罰セラレタル者若干也。米穀ノ騰貴ニ乘シ、富商ト通謀シテ私曲ヲ營ミタルヲ以テ也。○救濟篇參照。

米廩奉行以下處罰　左ノ如シ。

五月廿二日○寛永十九年。

一、及二晩日一於二評定所一寄合之。是江戸御藏衆日來私曲之儀有レ之由被レ及二聞召一、依レ之

彼席へ御藏衆召寄給。右之通之間、所々へ御預也。申分於有之者、伊奈半左衞門曾根源左衞門迄可相達之旨、老中傳之。所謂、

本多八郎兵衞〇勝行。へ　黒田次郎左衞門
松平若狹守〇康信。へ　久保田藤右衞門
井上河內守〇正祐。へ　新里彦左衞門
水野監物〇忠善。へ　北見孫右衞門
松平万助〇忠俱。へ　山下彌五左衞門
鳥居主繕正〇忠春。へ　石坂金左衞門
岡部美濃守〇宣勝。へ　葛谷藤兵衞
菅沼織部正〇定芳。へ　朝岡三郎左衞門
久留七郎左衞門
山田彦左衞門
大久保七兵衞
田邊清右衞門

右之通御預也。

右六人御城米淺草御藏當座之奉行被仰付之旨、伊奈半十郎〇忠治。曾根源左衞門〇吉次。得差圖、當夏借より可進退之由、老中被傳之。

小宮山清四郎
久保田小兵衞

一、御城米淺草御藏當座之奉行被仰付之旨、伊奈半十郎〇忠治。曾根源左衞門〇吉次。得差圖、當夏借より可進退之由、老中被傳之。所謂、

一、米渡所　〔山梨十左衞門 河村六右衞門〕
一、御藏口　〔谷元兵衞 小泉源右衞門〕
一、帳付所　〔鈴木太兵衞 伊東九郎左衞門〕
一御藏之內見廻　富岡平左衞門 石川伊左衞門
五月廿七日〇寬永九年。　林傳右衞門 柴田金左衞門
一、南條惣右衞門私曲之事有之由申出族依有之、今日於評定所、內藤兵部〇政晴。ニ被預置之。
五月廿九日〇寬永十九年。
一、先日御預之御藏奉行男子之分御預。

西鄉孫六郎〇延員。へ　葛谷藤兵衞子　虎之助

堀大學（○直輝。）へ　淺岡三郎右衞門子　理左衞門
山口但馬守（○弘隆。）へ　同人子正　山三郎
高木善次郎（○正弘。）へ　石坂金左衞門子　源五郎
阿部德千代（○正能。）へ　新里彥左衞門子　彥太郎
板倉主水佑（○重矩。）江　南條惣右衞門子　兵太夫
惣右衞門ハ御代官之。

右之通御預之旨、伊奈半十郎・曾根源左衞門傳之。席半十郎所也。

六月八日（○寛永十九年。）

一、今度御城米幷淺草御藏之義御穿鑿ニ付ゐ、兩所之御兵粮員數可相改之旨被仰出。因茲御小性組衆八人、御書院番衆七人、大御番衆拾五人、都合三十人、爲彼改奉行人被仰付之間、伊奈半十郎・曾根源左衞門相談所改之旨、阿部對馬守（○重次。）被傳之。

六月十三日（○寛永十九年。）

一、今度御藏米出入之儀ニ付ゐ、糸原甚兵衞令私曲之由、申出族依在之、爲御穿鑿從評定所戸田左門江被召預之。

六月廿二日（○寛永十九年。）

一、於評定所大寄合、

大久保加賀守（○忠職。）へ　小林彥五郎
酒井河內守（○忠清。）へ　高野喜三郎
松平式部大輔（○忠次。）へ　鶴岡與右衞門
皆川山城守（○隆庸。）へ　日野彌兵衞

右四人面々、役義ニ付ゐ私曲有之由、依有申出族爲御穿鑿御預之旨、老中被傳之。

——寛永日記

廿二日（○寛永十九年五月。○中略。）此日米廩の奉行黑田次郎左衞門某は本多八郎兵衞勝行に預られ、久保田藤右衞門某は松平若狹守康保へ、新里彥左衞門某は井上河內守正利へ、北見孫右衞門某は水野監物忠善へ、山下彌五左衞門某は松平万助忠俱へ、石坂金左衞門某は鳥居主膳正忠春へ、葛谷藤兵衞某は岡部美濃守宣勝へ、朝岡三郎右衞門某は菅沼織部正定芳へ、長谷川藤六某は松平太郎八重正へあづけらる。よて久留七郎左衞門正親・山田彥左衞門正德・大久保七兵衞正重・田邊淸左衞門安直・小宮山淸四郎安次・窪田小兵衞通正、權に藏奉行

を命せられ、此夏の借米より沙汰せしめ、伊奈半十郎忠治・曾根源左衞門吉次に指揮をあさしめられ、又米廩に歩行目付を置て査撿せしめらる。渡米所に二人、廩口に二人、簿書巡察四人と定めらる。

廿七日〇寛永十九年五月。代官南條惣右衞門某を内藤兵部政晴にあづけらる。これも富商とはかり米穀をしめ置て、衆人を艱困せしむるよし訴人あるゆへなり。

廿九日〇寛永十九年五月。さきに罪蒙りし藏奉行葛谷藤兵衞某子虎之助某を西郷孫六郎延員へ、淺岡三郎右衞門某長子理左衞門某を堀大學直輝へ、二子山三郎某を山口但馬守弘隆へ、石坂金左衞門某子孫五郎某を高木善次郎正弘へ、新里彦左衞門某子彦太郎某を阿部德千代正能へ、代官南條惣右衞門某子兵太夫某を板倉主水佑重矩へあつけらる。

八日〇寛永十九年六月。城米及廩米の員數明詳に査撿すへきむね仰出され、小姓組八人、書院番七人、大番十五人、査撿の奉行仰付られ、勘定頭曾根源左衞門吉次及ひ伊奈半十郎忠治にはかりあふへしと命せらる。

廿二日〇寛永十九年六月。勘定小林彦五郎某を大久保加賀守忠職へ、高野喜三郎某を酒井河内守忠清へ、鶴岡與右衞門某を松平式部大輔忠次へ、日野彌兵衞某を

皆川山城守隆庸へあづけらる。これみな米廩の事により、私曲のはからひせしゆへとぞ。

五日〇寛永十九年七月。大番組西山十右衞門昌時を松下石見守長綱へ、同じ番士遠山平九郎安宗を京極六九高直へ、窪田平十郎某を本多八郎兵衞門勝行へ、高野庄右衞門某を本多下總守俊次へ、高野万太郎某を鳥居主膳正忠春へ、高野兵衞某を岡部美濃守宣勝へ、腰物奉行戸田六兵衞吉政を島津万壽丸久雄へ、徒押葛谷藤左衞門某を九鬼式部隆季へ、處士戸田半九郎を杉原伯耆守長房にあつけらる。これ皆先に罪蒙りたる藏奉行幷勘定等か子弟なるゆへあり。

八日〇寛永十九年七月〇中略。この日城米の廩奉行黒田次郎右衞門某・久保田藤右衞門某・新里彦右衞門某、淺草米廩の奉行山下彌五左衞門某・石坂金左衞門某・朝岡三郎右衞門某・葛谷藤兵衞某・米契裏書役高野喜三郎某、淺草米廩の傍に於て斬に處せらる。津田平左衞門正重・蒔田對馬助長廣・篤三郎右衞門正重檢視たり。城米方手代六人、藏田手代三人、同所に於て斬せられ、檢使は歩行目付三人まかる。又手代一人は追放たる。代官南條宗右衞門某・勘定糸原甚兵衞某・鶴岡與右衞門某・日野彌兵衞某は、切腹せしめらる。檢使は佐々權兵衞長次・土屋忠

兵衞知貞本多四郎兵衞學澄多賀外記常勝なり。三郎右衞門某子理右衞門某・金右衞門某子源五郎某二子善次郎某彦左衞門某子彦太郎某宇右衞門某子兵太夫某喜三郎某子勝左衞門某子平十郎某三郎右衞門某子万太郎某藤左衞門某子三子山三郎某も切腹せしめられ、撿使は横田甚右衞門胤松太田宇兵衞某富永孫六郎泰賢大岡傳左衞門清政朝倉甚十郎正世本多將監景次中根五兵衞正次大井新右衞門政景竹尾宇太夫某初鹿野傳右衞門昌次なり。彌五左衞門某子甚三郎某喜三郎某子小三郎某幷與右衞門某か幼子一人金太夫某か幼子二人孫右衞門某か幼子二人善次郎某か幼子二人手代三人手代子八人は、斬に處せられ彦左衞門某子歩行士久兵衞切腹せしめられ、士屋兵部少輔之直撿使たり。金右衞門某子喜三郎その幼子三人喜三郎某子文十郎某斬に處せらる。手代の子二人は養子實子をたゝされ重て罪科に處せらるへしと命せられ甲州上州にある手代の子六人は、各地において死罪に處すへき旨令せらる。日記。○世に傳ふる所、今年春より米價騰貴して、斗米銀九匁餘にかゝるにいたれば、諸民困窮し、小糟糖酎の粕るとを食し、餓をしのきかねたり、其ゆへいかにと尋るに、代官藏奉行勘定役の者等私曲をはかり、ひそかに豪商富賈にはかりて、空米券をなして官廩米を推し、更にいだざりしゆへなり。よて其事を市人柳右衞門訴へ出て、これに預る、富商等、遠流追放せられしと云。（譚武日記）

十四日○寛永十九年七月。さきに罪蒙りたる藏奉行等か私曲にくみせし富商長谷川甚左衞門・三浦屋又左衞門・松本作兵衞は、佐渡へ流され、家財は沒入せられ、其他五人手代二人は、家産沒官の上に府を追放たる。是等私曲にはくみせしかど有のまゝをつゝます聞えあげ、かつ罪も輕ければとて、かく命せられしとぞ。

十九日○寛永十九年八月○中略。この日藏奉行喜多見長五郎某、松平万助忠政にあつけられ、信州飯山に配流せらる。

廿一日○寛永十九年八月。淺草藏奉行伊丹彦左衞門勝信切腹せしめらる。私曲あるをもてなり。小姓組三上半兵衞季正撿使としてまかる。其子は斬に處せらる。書院番大久保平四郎忠興撿使たり。其父代官理右衞門之信は、青山大藏少輔幸成にあづけらる。

——大猷院殿御實紀

一、寛永十七年の比なるへし、江戸小網町ニ在之三浦や又左衞門、本町ニ居申し長谷川甚左衞門、兩町人申合、淺草御藏之米買置、御藏衆ト致相圖、色々私欲之儀令露顯、彼又左衞門甚左衞門ハ佐州へ遠島、御藏高野喜三郎切腹、其外手代共、其儀にさゝりたる者ハ不殘御籠屋斬罪被仰付之。

——談海

附記 宅地收公

〔附記〕宅地收公

五月廿二日○寛永十九年。

一、一昨日麻生筋御成之刻、別所彌右衞門○重家。小姓組。屋敷上覽、此已前拜領之屋敷於二于今一圍無レ之、明置之義、不レ届之旨被二仰出一、因レ茲彼屋敷可二召上一之由、酒井和泉守○忠吉。ニ被二仰付一ニ依り傳レ之、云々。

——寛永日記

市民戒飾

六月廿八日丙寅○寛永十九年(紀元二三〇二年)○丙寅、三正綜覽。農民疲憊、飢饉ノ處有ルヲ以テ、大目付町奉行ニ訓示シテ、市民ヲ戒飾セシム。○武家嚴制錄。

市民戒飾事蹟

市民戒飾 武家嚴制錄ニ據ル。

一、大目付衆町奉行衆ゟ被二仰渡一覺書

覺

一、當年ゟ諸國之人民草臥レ候間、少〻可レ令二用捨一、此上若當作も於二損込一ゝ、來年可レ爲二飢饉一レ候。儉約之義、兼〻雖レ被二仰出一、諸士も彌存二其旨一、萬事相愼、減少をへし。町人百姓之下ゝ、食物迄萬其覺悟いたし、不レ及二飢饉一樣に相計ゝ勿論、百姓等ゝ常々ミさりふ米不レ捨樣に可二申付一事。

一、百姓年貢之義、無二損込一所申付之、未進をへらさる事。

伊達氏内藤氏邸前土橋修理

伊達氏内藤氏邸前土橋修理事蹟

一、當年ゟ相定役義之外、百姓遣ひ申間敷事。

一、五穀之類費に不二罷成一樣ニ可二申付一事。

一、來年ゟ、本田畑ニ多葉粉不レ可レ作事。

右之條〻、堅可二申付一もの也。

寛永十九年午六月廿八日

大目付中

兩町奉行

八月十日戊申○寛永十九年(紀元二三〇二年)○戊申、三正綜覽。**大番組頭加藤正信**○傳兵衞。**・大番榊原長勝**○小兵衞。ヲ奉行トシテ、伊達忠宗○松平陸奥守。邸前、内藤忠興○帶刀。邸前ノ土橋ヲ修理ス。○寛永日記。大猷院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

伊達氏内藤氏邸前土橋修理 左ノ如ク傳フ、

八月十日○寛永十年。○中略。

榊原小兵衞○長勝。

加藤傳兵衞○正信。

右内藤帶刀○忠興。前土橋・松平陸奥守○伊達忠宗。修復奉行被二仰付一之。

——寛永日記

十日〇寛永十九年八月〇中略。大番組頭加藤傳兵衛正良・大番榊原小兵衛長勝に、松平陸奥守忠宗・内藤帶刀忠興宅前の土橋修理奉行命せらる。

——大猷院殿御實紀

正信〇傳兵衛。加藤。〇上略。十九年〇寛永。八月十日、おほせをうけて内藤帶刀忠興をよび松平陸奥守忠宗〇伊達。か邸地前の土橋修理の奉行をつとむ。

長勝〇小兵衛。榊原。〇上略。大番とあり、〇中略。寛永十九年八月十日仰をうけて内藤帶刀忠興をよび松平陸奥守政宗〇忠宗。歟。等か邸地まへの土橋修理の奉行をつとむ。

——寛政重修諸家譜

附記賜宅

〔附記〕賜宅

九月朔日〇寛永十九年〇中略。

一、天野孫左衛門〇重房。深川。溝口半左衛門〇重長。石川六左衛門上屋敷。於兩所屋敷被下之旨、被申渡之。

——寛永日記

世子附屬醫員宅地

九月五日壬申〇寛永十九年(紀元二三〇二年)〇壬申、三正綜覽。世子竹千代〇徳川家綱。附屬醫員安倍順良〇長徳院。・山田正信〇如成。・塙安友〇道閑。・岡壽元〇甫庵。・奥盛良〇宗印。・吉田宗以〇策庵。・川島茂繼〇了俊。ニ金ヲ給シテ、城邊ノ宅地ヲ購求セシム。〇寛永日記。

世子附屬醫員宅地事蹟

世子附屬醫員宅地　ハ、

九月五日〇寛永十九年〇中略。

一、若君様〇徳川家綱。御醫師爲屋敷代、金子被下。所謂、

長徳院〇安倍順良。　如成〇山田正信。　道閑〇塙安友。　甫庵〇岡壽元。　宗印〇奥盛良。　策庵〇吉田宗以。　了俊〇川島茂繼。

右へ御城近邊之町屋敷相調可申旨、伊豆寺〇松平信綱。内匠頭〇牧野信成。傳之。

——寛永日記

五日〇寛永十九年九月〇中略。若君附の醫員安倍長徳院順良・山田如成正信・塙道閑安友・岡甫庵壽元・奥宗印盛良・吉田策庵宗以・川島了俊茂繼、城邊市井の宅地購求すへしとて、各金を給ふ。

——大猷院殿御實紀

相馬氏八町堀邸

廿一日戊子〇寛永十九年(紀元二三〇二年)九月。〇戊子、三正綜覽。中村〇磐城國。城主相馬義胤〇大膳亮。八町堀邸〇市内京橋區。ヲ購求ス。〇中邑世紀秘説。子爵相馬家回答。

相馬氏八町堀邸事蹟

相馬氏八町堀邸　傳フラク、

附記、一 秋元氏代官町邸

一色定堅屋敷

相馬大膳亮義胤公

寛永十九壬午年

一、九月廿一日、八町堀御屋鋪御求。

松宕院樣御歸後御住居所也。

——中邑世紀秘說

大膳亮義胤公〇相馬。御代

寛永十九午年九月、八町堀御屋敷御求。

——子爵相馬家〇中村藩。回答

〔附記、一〕秋元氏代官町邸

寛永十九年壬午年ニ泰朝公〇秋元。代官第ニ於テ逝去。

——御世譜雜集

ト傳フレハ、秋元氏代官町邸ハ是ヨリ先ノ給賜ニ係ルコト勿論也。往古江戸繪圖飯田口內酒井內記・朝倉筑後二邸ノ地、正保江戸圖ニ「秋元・但馬」ト有ル者是ナル可シ。

一色定堅屋敷

寛政呈譜ニ、

定堅〇內匠。一色。

附記、二 飯田町鬪諍

同年〇寛永十九年。赤坂築地屋敷拜領仕。

〔附記、二〕飯田町鬪諍

同〇寛永十九年九月。廿一日

一、去頃於飯田町、間宮諸左衞門〇正次。組之御步行衆小者と彼町之者及鬪諍之處、御徒衆翌朝、小者共召列、一町之族不殘□。右之趣達御耳之處、双方爲曲事之旨被仰出。所謂、

一、飯田町之輩於合、無爲可相濟之處、求事之義、不屆之間、町頭幷月行事籠舍之上欠所。

一、御徒衆ゟ頭申渡之儀不致承引、理不盡彼町へ罷越之義、爲不屆之間追放。

一、鬪諍仕出し族貳人充双方四人斬罪。

右之趣、松平伊豆守〇信綱。阿部豐後守〇忠秋。阿部對馬守〇重次。朽木民部少輔〇稙綱。有列座、御步行之頭幷兩町奉行へ申渡之。

——寛永日記

廿一日〇寛永十九年九月〇中略。この日間宮諸左衞門正次所屬の步行士こと〳〵く追放たる。これは此八月十八日葛西の御狩ありしに、此一隊の步行士川口

の番にまかりし時、各下部を家にかへしけるに、この下部とも廿二三人飯田町にて相撲を見物せんとせしより、市人等とあらそひ出し、さんざんに打擲せられ、からうしてかへり、各其主にかくとつげしかば、歩行士等大に憤り、其夜一隊ことごとく計り合て飯田町へまかり騒動せんとさはぎ立しかば、官長等聞付て、制し止むれどもうけひかず、十九日の曉、彼打擲されし下部をさきに立て、飯田町へ行、只今騒動打するぞといひふれて、やかて市塵に亂入し、騒したるつみによりてあり。よりて爭闘仕出したる者双方二人づゝ斬に處せらる。市街の里正月行事等も、あつかひ方よろしからざるをもて繋獄せしめ、家財没入せらる。——大猷院殿御實紀

廿四日辛卯（〇寛永十九年（紀元二三〇二年）九月〇辛卯、三正綜覽。）牛込行元寺（〇市内牛込區。）ニ寺領印書ヲ給ス。〇文政寺社書上。

行元寺朱印 文政寺社書上ニ據ル。

覺

一、御朱印地境内　東西六拾間餘、南北五拾間餘、繪圖面〇略。之通。

東叡山末天台宗　武州豊島郡牛込牛頭山千手院　行元寺〇中略。

但、東之方九百九坪七合五勺之處、寶暦十一巳年六月寺社御奉行小出信濃守殿ニ中年十ヶ年季貸地願上い處、御聞濟ニ相成、貸續有レ之い。東之方五拾壹坪之處、天明八申年九月是又中年十ヶ年季貸地ニ仕度段、寺社御奉行土井大炊頭殿ニ奉二願上一、御聞濟ニ相成、門前ニ有レ之い。南之方表門前、間口八間半奥行十一間餘、此坪數九拾貳坪餘、西之方裏門前、間口拾五間、奥行拾六間半餘、此坪貳百四拾九坪餘、内門前間口九間、奥行六間餘、此坪五拾四坪餘之場所、古來有來り、年季地ニて無二御座一い。

一、御朱印四石。但、牛込中里村ニ而右大猷院様御代、初而拜領仕い。

御朱印御文言之寫、

寺領武藏國豊島郡牛込村之内四石事、任二先規一寄附之事。全可レ收納一並寺中竹木諸役等、如二有來一免許、彌不レ可レ有二相違一者也。

寛永十九年九月廿四日　　御印

行元寺

〔附記、一〕番士相續制

覺　實子惣領

一、御番御奉公いさしいまも、御目見いさしいまも、又幼少まて御目見不仕市街恢弘時代

附記、二 東叡山定書

いふも、實子之分申分無之よハ、跡式不殘被下ハ事。

一、知行御切米跡式被仰付ハ者、七月よりそゑよ相果ハ分よハ、惣領之知行よても御切米よても、其年ゟ被下之、翌年ゟ差上可申事。

一、兄弟在之ものよハ、親之知行高ニより、次男よも似合敷程ヨけ被下ハも在之、致御奉公ハものハ勿論、御目見不仕ハ者よも、分被下ハ事在之。兄之拜領分を相應に被下ハ儀も可在之事。

一、十年已前並之御加增も、去年より本知なみよ被下ハ事。

一、親之知行と子之知行と同高よてハ得ハ、本知よてハ之間、親之知行と替被下ハ樣よと申ものよは、替被下ハ儀も有之事。

一、養子跡目之儀、前ゟどより番頭組頭へ相斷、見を置ハ分ゟ、實子なみニ可被下ハ。但當暮より伊豆守〇松平信綱。豐後守〇阿部忠秋。對馬守〇阿部重次。民部少輔〇朽木稙綱。ニしろと養子見を置ハ樣ニと被仰出ハ事。

寛永十九年十月三日

——御當家令條

〔附記、二〕東叡山定書

東叡山日記〇慈眼大師全集收。ニ據レバ、寛永十九年十一月廿六日東叡山定書ヲ定メ十二月十七日東叡山門末定書及東叡山衆議定書ヲ定メタルコト見ユ。

廿六日〇寛永十九年十一月。

定

一、於東照大權現御神前、毎朝寺中衆幷常詰之所化衆三人宛、素絹五條著致出仕、例時懺法無懈怠可相勤事。

一、毎月十二日寺中爲輪番可有論談事。

一、於御神前、毎月十七日寺中衆致社參、御法樂、幷於本堂所化衆可有論談事。

一、毎月十四日、於常行堂、曼陀羅供可有執行事。

一、毎月廿四日於法華堂聲明懺法、可有執行事。

一、三季講演、寺中門中所化衆、不可懈怠事。

一、月次之法事齋於有之者、可爲物相、幷寺中會合之振舞、可爲一汁三菜、酒二反(ハン)、摠寺中至下々迄、如古法、常住可爲物相、不可有隨食事。右如斯。

寛永十九年霜月廿六日

雙嚴院書判

最教院書判

竹林坊僧正書判

天海御書判

東叡山

十二月十七日十〇寛永十九年。

定

一、不レ闕二時勤行一、可レ致二天下安全之御祈禱一事。

一、每月十七日可レ致二東照大權現之御法樂一事。

一、天下之制法者不レ及レ申、背二本寺之下知一、不レ可レ致二私檢斷一事。

一、不レ可レ闕二三季之出仕一。若令レ煩之時者、早可レ有二其斷一。無二左右於令一レ闕之者、可レ爲二銀子壹枚過料一事。

一、三季之講演、門中者從二當會一二人宛來會之、役者所化者、當二其時一取二圖講師衆二人、問者衆廿人、取持可レ勤之事。

一、每年正月、東叡山本院年頭之儀、從二元日一至二元三一、各可レ致レ之。進物者、爲二目之外可レ爲二無用一。多少可レ任レ心事。

一、不レ遂二大阿闍梨一者、不レ可レ掛二七條袈裟一事。

一、加行護摩等之儀者不レ及レ申、九字護身法迄、猥不レ可レ許レ之事。

一、衆僧逝去時、猥不レ可レ致二引導一。幷年忌等、不レ論二高下一、可レ窺二本寺一事。

一、縱雖レ爲二出生器量人一、於二亂行僧者一、早令二追放一。若於二弟子同宿中一、亂行事令二風聞一者、糺二實否一、於レ爲二實事一、是又早可レ致二追放一。於二隱置一者、師弟共可レ爲二同罪一事。

一、於二衆僧等一者、不レ論二親疎一、帶二武具兵杖一、惡事不レ可二同意與力一事。

一、縱雖レ爲二近所一、白衣不レ可二往還一事。

一、寺內走入之者不レ及レ申、雖レ爲二緣類知人一、牢人一切不レ可二抱置一事。

一、於二寺內一縱雖レ爲二伯母姉妹一、不レ嫌二老若一、女類一切不レ可二抱置一事。

一、境內竹木、猥不レ可二伐採一事。

一、不レ知二身分限一、不レ可レ致二侈振舞一事。

一、縱雖二寺內廣俗家之儀一不レ申及、不レ可レ借二置他宗等一事。

一、背二師命一者、縱雖レ爲二所化一、不レ可二介抱一。且雖レ爲二我弟子一、於二不孝之輩一者、可レ令二追放一事。

右之條々、相背者於レ有レ之者、從二衆僧中一急度東叡山江可二申達一者也。

寛永十九年極月十七日

護國院書判

喜見院書判

雙嚴院書判

天海御書判

江戸東叡山末門中

一、東照大權現於御寶前、每月每日例時、上旬本院、中旬所化衆、下旬寺中、可レ被二相勤一。其日出仕衆、於二拜殿一可レ致二判形一事。

一、聲明懺法曼荼羅供、三ヶ月於レ無二出仕一者、過料百疋可レ出事。

一、曼供聲明懺法、兩日之衆中出仕。辰上刻著座、讃三敬禮以後、集來於レ有レ之者、過料十疋可レ出レ之事。

一、法事回章致レ點、會場無案内於レ不二出仕一者、過料五十疋可レ出レ之。付、若他國江罷越、令レ煩之時者、從二衆中一可レ有二免許一事。

一、曼供如二定來一出銀拾貳匁、閏之時者拾三匁、致二各出一於二本院一、如レ定可レ有レ齋事。

一、聲明懺法衆中齋、從二本院一可レ勤レ之事。

一、曼供衆中逝去有レ之者、爲二衆僧一可贈弔漸寫御經事。

一、曼供取持之役者、從二衆中一年々圖取、三人宛可レ致二相勤一事。

寂教院書判

竹林坊權僧正書判

十一月○寛永十九年(紀元二三〇二年)。弓師備後請ウテ、三十三間堂ヲ淺草○市内淺草區。ニ建ツ。○享保撰要類集。文政町方書上。府内備考。府内誌殘編。東京通志。

三十三間堂創建 左ノ如シ。

淺草三拾三間堂由來之覺

一、淺草三拾三間堂と、元來新兩替町弓屋備後思立ニ而、地屋敷之儀と、松平伊賀守樣○忠晴。ゟ申上、御公儀樣ゟ被二仰上一、堂屋敷地拜領仕、取立申し。私請取から木立計千五百兩之契約まて、寛永十九壬午年造立、霜月廿三日ニ相渡申し。同

雙嚴院書判

寂教院書判

竹林坊僧正書判

廿未年ゟ備後御弓之射手衆相集いゐ、箭代等取申事ニ御座い。然共右から木立千五百兩之金子壹兩ゑ、私方ゟ濟不申い。依之申年御訴訟申上い處ニ、御公儀樣ニゐ急度金子濟申樣ニと被爲仰付い得共、如何仕い哉相濟い儀成不申いニ付、甲申十月二日ニ御評定所ゟ私幷備後被召出、松平伊賀守樣〇忠晴。松平出雲守樣〇勝隆。安藤右京亮樣〇重長。朝倉石見守樣〇在重。神尾備前守樣〇元勝。御僉議之上ニゐ、堂屋敷共ニ永代堺屋久右衞門ニ被下い間、難有奉存支配可仕い之由、急度被爲仰付、則備後儀御拂被成、堂地立退申い。甲申十月二日ニ拜領仕、當年迄八拾三年代々支配仕い儀ゑ、紛無御座い事。

定

一、白銀五枚　堂銀
一、同　六枚　箭撿見
一、鳥目壹貫文　燈明錢
一、同　壹貫文　垜錢

右之通、被致矢數い方ゟ、可被出之也。

一、鳥目壹貫文　板代

三十三間堂

江戸名所記所載ノ圖也。

東京府所藏

廿未年ゟ備後御弓之射手衆相集いゐ、箭代等取申事ニ御座い。然共右から木立千五百兩之金子壹兩ゑ、私方江濟不申い。依之申年御訴訟申上い處ニ、御公儀樣ニゐ急度金子濟申樣ニと被爲仰付い得共、如何仕い哉相濟い儀成不申いニ付、甲申十月二日ニ御評定所江私幷備後被召出、松平伊賀守樣〇忠晴。松平出雲守樣〇勝隆。安藤右京亮樣〇重長。朝倉石見守樣〇在重。神尾備前守樣〇元勝。御僉議之上ニゐ、堂屋敷共ニ永代堺屋久右衞門ニ被下い間、難有奉存支配可仕い之由、急度被爲仰付、則備後儀御拂被成、堂地立退申い。甲申十月二日ニ拜領仕、當年迄八拾三年代々支配仕い儀ゑ、紛無御座い事。

定

一、白銀五枚　堂銀
一、同　六枚　箭撿見
一、鳥目壹貫文　燈明錢
一、同　壹貫文　垜錢

右之通、被致矢數い方ゟ、可被出之也。

一、鳥目壹貫文　板代

三十三間堂

江戸名所記所載ノ圖也。

東京府所藏

三十三間堂